

實にやつて來たジャリーから船長株を取り上げるのは可愛そうだから、君は表面船長となつて責任を持ち、仕事はジャリーにやらして監督して居つて呉れ、そして萬一不當の取扱又は危険と思ふ事があつたら何時でも取つて代る様にと云ふ、變な話だとは思つたが、マールやる處までやつて見様と思つて、所長に請求してジャリーを呼出して生の面前でそれ丈の事を云渡して貰つた、處がジャリー君、所長の面前ではエースサー、ペリーグードサーと云ひ、生に向つてもキャピランヨコヤマと云つて握手した、けれども所長の視線を離れると御機嫌頗る斜めだ、生にはろくに物も云はぬ、けれども仕方がない、充分の注意を拂ながら之を續けて居た、處がジャリーさん、或る岬角をスレ、く通過するとか、或る島と島の間を度々通過したとか云ふ事を自慢して、どうも責任上大事を取れと云ふ生の意見に對して態と逆らふ様にするから、生は郵船加茂丸形八千噸級に引續き東洋汽船の天洋丸形が地洋丸春洋丸と續々出來て來るからジャリーにやらせるのは甚だ心許ない、生は自ら直接操縦の任に當る事が出來なければ單に表面上の責任者と云ふ事は御免を蒙ると所長まで申出た、所長は篤と考慮すると云つて未だ實現に至らぬ内に平野丸事件が起つた。

## 六、平野丸事件

郵船八千噸級の第一船が加茂丸で第二船が平野丸であつた、其試運轉に際し朝早くより一同乗船

して、我々運用關係のものはジャリー御大を始め生も星野君（社外船々長の經歷を有しジャリー君の配下にして試運轉のチーフメイト）もブリツヂに居た時機關部からトライエンデン（碇泊して居て機關を試に回して見ることを）をして好いかと聞きに來た、ジャリー君例に依て無造作にオーライと云つたから生は少し待て、好い時に此方からテレグラフで知らせると云つて星野君は船首に、セーラー一人（海軍水兵上りの舵夫格のもの）は船尾に行かうとする時、機關部から來た使はジャリーの返事を聞て行つて仕舞つたから念の爲別に一人のセーラーに後を追はせ追付かなかつたら機關室まで行くと云つてやつた、船首尾共に白赤の手旗を持ち安全なれば白旗を、危険なれば、赤旗を上げる事になつて居るから船首尾共に白旗が上つたらテレグラフで知らせようと構へて居る、ジャリー君は何を餘計な事をするかと云つた様な顔で見居る、そして船首船尾ともまだ各其位置に行かぬ内に、機關部の使を追跡したのも追付かないで機關室へ下りて行く途中にある間に機關部ではジャリーさんの返事に依てトライエンデンを始めた、其時生憎と造船技師が通船に乗つて船尾の吃水を測つて居る時であつたのにプロペラが回はつたから堪らない、通船は刎ねられて中空に上つた、製圖技師一人は片足を腿根から切斷され、通船々頭一人行衛不明となり後に死骸となつて浮んだ、造船技師一人は舵のガジョンの何處かにつかまつて居て此人丈は足も濡さなかつたと云ふ事件が起つて其日の試運轉は中止になつた。



警察へ召喚——關係技師一同警察へ召喚された、そして造船技師機關技師は皆簡単に済んだが、生とジャリー星野兩君とは中々簡単に済まない、生と星野君は夜半過に還されたがジャリー君はとう／＼一晩引張られて朝になつて泣きそうな顔をして歸つて來た。

此件に關して生は警察に對しても、造船所に對しても、假令事情が如何にあらうとも監督者としての責任は免かれないと云ふ理由に依てなら、どんな罰でも甘んじて受ける、併し技術者として餘り馬鹿げ切つた出來事であるから、どうしてそんな失體を演じたのかと追究を受けて、そして事實有の儘を申陳べて其上で責任者として處罰せられたいと一通り申陳べた、何れ其内に何とか云つて來るだらうと思つて居たが、終に何人の過失にもならないで済んで仕舞つた。

それからジャリー君は試運轉の操縦を辭退して試運轉の操縦が名實共に確實に生の手へ歸した、平野丸事件と云ふのは之である。

## 七、天洋丸級最大型船の試運轉

天洋丸、地洋丸、春洋丸は是まで三菱で建造した船の中で一番大きな船で又日本の汽船中で一番大きな船であるから勿論生の操縦した船の中でも、ドックの出し入れの時丈には天洋級の約二倍の

噸數を有するミネツタ號、ダコタ號をも取扱つたが、沖へ乗出した船としては一番大きな船であつた、併し浮標を離れて、船首を回轉して出港する時には舵効補助の爲に船首船尾に曳船を使用する事が出來たから割合に樂であつた。

又大型船として従來のレコードを破つた船舶に、又タービン機關として、三暗車機關として（後には四暗車の軍艦霧島、日向など出來たけれども）も初めてとあつた、めに關係會社は勿論遞信省、工科大学、又ロイド其他外國の會社からも見學視察として種々の人が來た、其船の試運轉は實に晴れの舞臺であつた。

試運轉は初めてのタービン船、三暗車船であつたから試験の種類も多い、各種の速力試験、前進後退、停止距離、回轉圈測定、長距離、石炭、油の消費等で最初より終了まで嚴冬二ヶ月以上掛かつた、其間に萬一風でも引て出られない様な事があつてはならぬと思つて其間生は風呂に這入らなかつた、此緊張裡にも亦一つの滑稽もあつた。

外套の新調——社命に依て船を止めて陸上に勤務する様になつたから、最早當直用の重い大外套など用はないと、氣を大きくして皆人にやつて仕舞つた、處が寒中の試運轉、長時間ブリツヂに立つ、試運轉の船長はスタンドバイからフィニッシュまで星野君と二人で立通した、前に人にやつた外套が入用になつて來た、けれども取返す譯にも行かず、終に大氣張に氣張つて新らしく大外



套を作つた、それが今でも冬になると大に生の體を温めて呉れる。

其時の天洋丸の船長はキャピテンゴイングとて非常に注意深い人でオーダーブックに細大洩さず詳しく書くので有名であつた、地洋丸はキャピテングリーン、天洋丸はキャピテンスミスでチーフメートは今は船長の階級を超越して陸上に重要な地位を占めて居らるゝ檣前勵君、東郷正作君等であつた。

## 八、當時長崎の外人

當時造船所に居た外國人はドックマスターのクロウさん、エンヂニヤ(機關工場勤務)のウィルソンさん、扛重機係りのジャリーさんで、此人達は何れも明治初年所謂外人跋扈の時代から三菱に居たので此人達には讀者諸君はそんな事があるものかと思はるゝ様な一種特別の氣風を共通的に持つて居た、それは日本人でエライ人は英語を話す、つまらない奴は英語が話せないと思ふから、エライ人に日本語で話しかけては失禮だと思つて英語で話しかける、だから日本語で話す時には幾分輕侮の念を含んで居る、故に三十餘年間日本に居ても本當の日本語が話せない、又習はうともしない。

外に造船設計にクラーク、機關設計にショウの二氏が居たけれども生が行つて間もなく出たから數に入れない。

**デビッドクロウ**——前記三人の内生が一番古くから知つて居るのはクロウさんであつた、須磨の浦丸に初めて乗つた時に三菱鐵工所から同船のデツキコーキング監督に來た時であつた。

そんな古い事をどんな印象で覚えて居るかと思ふに、一人の大工さんがピツチを沸かす竈をデツキに濡漙を敷て其上に据へた、そして其漙は熱の爲に直に乾くから時々水をやれば問題は起らなかつたが、遂ウツカリして居たので漙が乾いて火が付いてデツキが少し焦げた、監督のクロウさんやつて來て「なぜ水進上ないゴツダイミヨウ」(なぜ水進上ないはなぜ水をかけぬかの意)、と云つて横面をポカーン、其當時の事であるから殴られた大工さんは絶對無抵抗だ、監督さん舳から艦の方を一廻り廻つて來てはデツキの焦げた處を見て腹が立つて堪らぬと見えて又なぜ水進上ないゴツダイミヨウと云つてはポカーン。

それから三十年の後、生が造船所へ行つてから何かの話の序に乃公は一廉のゼントルマンを以て任じて居り、ジャリー君を評してどうもゼントルマンライキでない、部下に對して口ぎたなく小言を云ふ、小言を云ふのはまだしも直に手を出すからいかんと云つた、なぜ水進上ない時代は別として其頃は實際ゼントルマンライキであつた。



クロウ夫人——聞く處に依るとクロウ氏は結婚後妻君の感化に依て大變に穩順になつたと云ふ、夫に就て思出すのは生が越後丸三等運轉士時代に長崎のドックに行つたら、其時はクロウさんは早やドックマスターになつて居た、そして其頃が新婚勿々であつたような、越後丸の初代の日本人船長大熊徳藏君を自宅に招いて新婚の妻君を紹介して私おかみさん澤山よろしいおかみさん、と云つたなど中々罪がない、併しそんな言葉を餘り聞たことのない生等の耳には變に聞へた。

其おかみさん即ちクロウ夫人は彼の越中島に繋留してある商船學校の不動練習船で曾ては久しい間の燈臺監視船であつた明治丸船長ゼームス氏即ち明治丸ゼームスとして名高いキャピテンゼームスの妹で、生が造船所に行つた頃は可なりお婆さんになつて居たが明治丸ゼームスの妹なる話は屢々出た、そして此夫人こそ荒つばいクロウさんを能く感化したであらうと思はれた。

クロウ夫人中々の派手者で又交際家で知事さんなど代れば必ず新事夫人を訪問するから又先方からも答禮があり、常に往つたり來つたりで月給は大概そんな事に使つて仕舞ふらしかつた。

三人とも英國人ではあつたがクロウとウイルソンの二氏はスコッチでジャリー丈がアイリッシュであつたので二氏は常に幾分ジャリーを輕蔑して居る様に見へた。

ウイルソン——ジャリーマンズブリッジ氏の事は試運轉と平野丸事件で殆んど書き盡して居るか、茲には省略してウイルソン氏の事を書かう、明治十年西南の役には汽船赤龍丸の機關士として薩

南の方面に航海した當時の船長が福井光利君であつたような、ウイルソン君が鼻にかゝつた聲で能くキャピテンフキーと話したのが今も尙耳朶に残つて居る。

ウイルソン氏は機關工場の組立場勤務で、それは、勤勉家で、それこそ讀んで字の如く臨目も振らずに何時も働いて居た、そして試運轉には何時もチーフエンヂニア格でやつて來た。

同氏は多年機關運轉に従事した記念とでも云ふべきか、右であつたか左であつたか忘れたが人さし指を一本失なつて居た、之に就て一つの皮肉な談がある、或る時何かの作業中に一職人にポルト拾個を持つて來いと口で云つて置けばよかつたが熱心の餘り兩手を廣げて是れ丈け持つておいでと云つた處が其職人が九個持つて來たのでウイルソン君眞赤になつて怒つた事がある。

ウイルソン君の聲が少し鼻にかゝつて居たから日光丸がネコ丸と聞こへ、常陸丸がイタチ丸と聞こへた、それから誰が云ふとなく讃岐丸がタヌキ丸、宇品丸がムジナ丸、和泉丸がネヅミ丸と聞へると云ひ出したがマサカ夫程にはなかつた。

クロウ、ウイルソン兩スコッチ氏が揃も揃つて大の御國自慢家であつたが併し我々日本人の機嫌を損しない様にとの御上手は忘れなかつた、假令へばスコットランド人は日本人と氣質が能く似て居る、スコッチは先天的に日本の武士道を重んずると先づ我々を喜ばして置いて、イングランド、アイerlandが歴山大王の馬蹄に蹂躪せられた時もスコットランドには一步も踏入ることは出來な



かつたと云ふ様な事は屢々聞かされたものであつた。

ロバートソン——此人は造船所の使用人ではなかつたが長崎外人中の一名物男であつた、日本婦人と結婚し日本に歸化して姓は魯畑、名は遜と稱し日本字の名刺を振撒いて居た、此人中々剛直家で、其頃はビュローペリタスのサベイヤーであつたが曾てはロイドサベイヤーで検査が餘り細かくて八釜しいので方々から批難を受け終に本社から止めさせられたものだと聞た事もある。

此老人中々の日本通で古い事を能く知つて居る、何れ元は三菱汽船のエンヂニアであつたらう、初代岩崎彌太郎社長を能く知つて居ると云ふのが自慢であつた、宴會では直にナンコで呑む(ナンコとは箸を握つて其數に依つて勝敗を争ひ負けた方が呑むと云ふのであるが生は能く知らぬ、諸君も知る必要はない)、酒が好きで酔ふと話がくだい、ウツカリつかまらうものなら大變だと皆警戒を怠らなかつた、氏の「宮さん」御馬の前で、ひらくするのは何じやいな、今度此度朝敵征伐、錦の御旗を知らないか、トコトヤレトヤレナ」は有名なものであつた。

此好々爺も酒を飲むと、くだい斗りでなく、時には始末に負へぬ悪ふざけをやるので、酒の爲には常に厄介老爺として人から嫌はれた、誰が何と云つても酒は何人をも善くはしない。

此外にロイドのヘロン氏、エツケン氏、リングー商會のリングー氏等澤山あつたが只顔と名を知つたのみであつたから略す。

## 九、クロウ氏の銀婚式

生が長崎に行つて間もない時であつた、長崎バブリックホールでクロウ氏の銀婚式が舉行された。其時には、知事、控訴院長、其他官邊の重立并に夫人、英國領事并に領事館員の重立并に夫人、ホームリングー其他實業諸會社員并に夫人令嬢等多數の來賓、造船所からは丸田所長は上京か何かで不在中、加藤、濱田、江崎、中泉、山本、山田、佐伯、中村、堀江、山本、秀島、山崎の諸氏夫婦又は主人丈參列した、生も案内を受けたが夜會服を持たぬから斷つた處が、夜會服を持たぬものは生斗りでなく造船所の御歴々でも洋行戻り以外の人は大概持たぬ、そこで生は初めから案内狀發送に就て斡旋して居た關係上、方々から生の處へ、フロツクコートでも好いかと服裝の事に就て問合せが來るから聞て見たら、フロツクコートは夜會には用ひない、日本服で結構と云ふ事で皆安心した。

羽織袴の至急新調——日本服で結構と云はれて安心しないのは生一人、日頃妻から和服も一通り持つて居らぬと差支へる事があると云はれても毎度要らぬで押通して來たが此處でバツタリ差支へた、矢張斷らう、と云つてもクロウ氏始め其他の人達がマサカ日本服を持つて居らぬと云つて



も眞には受けまい、病氣と云つても毎日顔を合せて居る人には餘りシラム、しい又縁起でもない、そうかと云つて、外の人なら兎も角も同じドック勤務の生が謂はれなく決席は甚だ穩當でない、サ一困つた、所謂ない袖は振れぬとは此事だ、妻もそれ御覽なさいとも云つて居れず、造船所社宅御出入の呉服屋さんに頼んでシルケートコットンとかの大安物で大急ぎで新調することゝなり辛ふじて間にあつた。

ホールの一夜——生も新調の紋付羽織袴で出掛けたが平素日本服を着た事のない生は何となく恥かしい様な気がした、それから其時間と云ふのが甚だケツタイで、先づ午後十時から始まり、濟むのは翌日午前三時頃だらうと云ふから社宅に歸る連中は通船を待たして置くが、生はまだ其頃社宅に這入らないで西山の借家に居た時であつたから、無駄な事とは思ひながら車を待たして置いた。其夜の服装は日本人側は婦人は皆日本服、男子は生等數人が和服、其他は皆夜會服であつた、外人はスコッチは皆古代ハイランダの制服、其他は皆夜會服、婦人は皆イビニングドレスであつた。

式の順序は今能くは覚えて居ないが、飲食は至つてアツサリしたもので、紅茶にビスケット、サンドウキツチ、ウイスキータンサン位で、舞踏は中々盛んであつた、日本人側には誰も踊るものはなかつたが西洋さん達は男も女も皆盛んに踊る、生の處へも老若お好み次第の盛裝美人が入代り立

代り勧誘に來たが之斗りは閉口して遂に立たなかつた。

又時々室を變へて一寸した御馳走が出る、夫が濟むと又踊る、生もダンスは斷つたが室が變はる毎に、司會者が大聲にレディースエンドセントルメンと號令を掛けて誰と誰、誰と誰と云ふ風に名前を呼んで腕を組ませて往も還りもマーチさせる、何だかどうも恥かしい様でクスグツタイ様で二度腕を組んだ婦人が若かつたか、お婆さんであつたか顔も得見ず、只香水の匂と最早好い加減に踊つた後であるから汗の臭も少しはした様であつた、兎に角仕方がないから腋の下に冷汗をかきながら號令に従つて堅くなつてマーチした。

日頃眞面目を以て任じて居る大英國の紳士叔女が之であるからお轉婆の勿返りと來たらどんなであらうと其時に思つた、ダンスは西洋各國の習慣中でも今以て辯護の出來ないものゝ一つであらうと思ふことは生に取つては今も尙其時と變らぬ。

それから食堂が開かれ主客共に英語の祝辭が交はされ、歡談に時を遷して閉會したのは三時か或はモット過ぎて居つたかも知れぬ。

## 十、大浦丸船長

救助船大浦丸は今はサルベージ會社に屬して居るが同船は最初は長崎でサルベージ用として造つ



て三菱自ら救助事業をして居た、今一々覚えて居ないが同船に依てなされた救助作業の大なるものは安房國野嶋崎附近で乗上げたエムプレツスオフチャイナ、救助は奏功しなかつたが矢張同地附近で乗上げた彼の巨船ミネソタの姉妹船ダクタ、門司港内で沈没した義勇艦梅ヶ香丸等であつた。

**歴代の船長並に機關長**——造船後最初の船長は今は成功隠退せられた元彦島造船所長三浦義豊君であつた、三浦船長が神戸三菱のドックマスターとして行かるゝ様になつて其後任は今は故人となり其令息が立派な船長となつて居らるゝ福岡龜吉君で、福岡船長が可なり永く續いて同君が三菱を去り後任物色中、生が少しの間臨時船長を命ぜられた。

**佛蘭西軍艦ドンテルカストル**——生が臨時船長中に同艦が上海沖の舟山列島に乗り揚げて救助に趣いた。

同艦救助に就ては上海の外國サルベージ會社からも救助船が二隻來て居り、佛蘭西東洋派遣艦隊旗艦外二三隻も現狀に來て居た、そして各サルベージ船から船長并にサルベージ技師が旗艦に集まつた、生も救助主任ジャリーマンズブリツヂと當時製圖工であつた其令息アルフレッドが佛蘭西語を能く話すので夫を伴ひ三人で出掛けた。

司令官から各サルベージ船が共同で救助して呉れと云はれて作業上の打合をして居る内に天候不良となり荒天が續いて終に救助不能となつたのは惜かつた。

其後星野君の推薦に依て救助船々長として最適任なる小林力太郎君を雇入れた。

**機關長**——造船當時から機關長は北川保君であつた、北川君は東京商船學校出身で大浦丸の機關長でありながら碇泊中は機關工場組立場に働らき或時は試運轉の機關長ともなり、又救助には機關長で救助技師を兼ねると云ふ千兩役者であつた、君今は東京三菱海上火災にあつて重きをなされて居る。

それで大浦丸は適任なる船長機關長の共力に依て従事する處の事業として成功せざるはなき成績を擧た。

**小林力太郎君**——は千葉縣房州の外海岸に生れ幼より大工を習ひ、長じて一廉の大工さんとしての腕を持つて居ることは云ふまでもないが明晰な頭腦の持主である君は普通の大工さんで甘んずることは出来ないで早くも東京に出て石川島造船所に入り製圖を習熟した。

石川島通勤中其宿所が故本田教授の隣家とかで朝夕の出入其他の行動が同教授の目に留まり、教授の勧誘斡旋に依て練習船月島丸に乗る事になつたと云ふ。

そんな關係で東京商船學校の航海科三十二三期前後の學生には知人が多かつた。

君は普通の大工さんに甘んぜないで製圖を習得し船に乗つて立派なカーペンターたらんよりも更に立派なナビゲーターたらんと志して水夫の仕事から運轉士の仕事、航海術運用術を見習ひ約十年



の後は立派に船長となつて三菱に這入つた。

君の明晰なる頭腦は獨り船長として適任なる斗りでなく、幼時より習ひ覺えた大工の腕と次で習得した製圖の技倆が救助の方法や計畫の上に發揮せられて偉大の成績を擧げた事は社の内外共に認むる處であつた。

其後クロウ氏が退隱歸國して生が其後を襲ぎ山崎技師が老年の故を以て退隱することになつてからサルベージの時だけ小林君が乗る事にして船長には一等運轉士辻田哲六氏を引上げ小林君はドックに来て生の助役と云ふ事になり、萬事實に痒い處に手の届く様にやつて呉れて生は好き跡嗣ぎを得て喜んで居た處が健康を害して久しく休み終に生よりも先に三菱を退いた、併し其後幸に健康は恢復して東京サルベージ會社に入り更に大に救助事業に手腕を發揮して斯道の權威と云はれた。

## 十一、試運轉の苦心

生も船の操縦に就ては多年の運轉士船長執務中先づ以て一回の懲戒を受けた事もなく一廉の老練家で決して人後に落ちない積りで、獨り天狗を極め込んで居た處が試運轉となると大分勝手が違つた。

操舵の號令——造船所のセーラーが多く海軍の水兵上りである爲にポート、スターボード、ステデーに慣れて居ない、之が慣れるまでは特別の注意が要る、併し軍艦の試運轉となると海軍式にオモカデ、トリカデ、ヨソソロとやる、是は彼等の御手のもので却つて乃公甚だ勝手が悪い、併し勝手が悪いなど理由にはならぬから一心に慣らして仕舞には御手のものになつた。

元來ポート、スターボードとオモカデ、トリカデとは單に日本語と英語の差丈ならば何でもないが事實がアベコベであるから、やゝつこしい、即ちポートと云へばスターボードを向き、スターボードと云へばポートを向くなんて云ふ變な習慣が世界の海上王國イギリスから創められて、商船界では之を採用し商船學校でもそう教へたが、帝國海軍では早くオモカデ、トリカデに改めたから世話はなかつたが、生等は商船界で多年習慣付けられて居たから理屈に合はなくてもポートスターボードの方が勝手が好かつた、今度倫敦會議で一樣に極つたそうだから、是からは世話はない譯だが中々厄介な問題であつた。

船長と技師の早變り——試運轉では愈々船を動かす時から船長で、それまでは造船所技師であるから試運轉當日は朝早く出て行つて、ステヤリングギヤ、テレグラフ、汽笛、汽角其他一切を試験して抜錨、運轉に差支ない様にして、それから船長だ、船が愈々沖に出ると星野君と交代にブリツヂに立通す、大概は朝早く出て行つて夕方には歸るのであるが、軍艦では時々夜を徹して翌



日又は翌々日に歸ることもあつた、其時分には既に乗組員が乗組んで居て航海科の士官が時々加勢して呉れた。

速力試験——となると擔任技師は少しでも餘計に出さうと思ふから、進行に抵抗又は障害を少しも與へない様にと云ふ理論から割り出して種々の注文が出る、汽笛を鳴らすと汽力が下るから餘り鳴らさぬ様にして呉れ、里程標の中へ這入つたら舵を左右すると抵抗が起るから舵を左右しないで呉れ、里程標を出たら再び這入るまでの時間が餘り短かいと汽力の上る暇がないから相當タイムを置いて呉れ、餘り永いと火夫が疲れて標間航走中に汽力が下るから其處を丁度好い工合にやつて呉れと云ふ様な事を云つて来る、そんな譯に行くものと云ひたい處だが試運轉の速力が造船獎勵法、航海獎勵法に依つて政府から貰ふ金額に影響する、其船の格が定まるのであるから直接擔任の技師さん氣を揉むのも無理はないと思つて此方も亦一生懸命にやつた、初の程は此呼吸が中々六つかしかつたが追々と慣れて來て仕舞には手に入つたものになつた。

それでも時には里程標間を往復何回か走つて後一回で完了と云ふ土俵際で幾等汽笛を鳴らして注意を喚起しても聞かぬ横着な漁船又は小廻船に邪魔をされて止むを得ず轉舵する、折角の前數回の航走がおジャンになる、擔任技師が怒り出す、少し重要な試運轉には造船所長か副長が何時も來て居る、そして斯んな時には技師と同じ様に御機嫌が悪るい、けれども誰の機嫌が悪るからうが誰が

何と云はうが是斗りは斷行しない譯には行かぬ、斯んな場合に何時も實際止むを得なかつた、若し彼時に轉舵を躊躇したら漁船をやり切つて仕舞はなければならぬと我が味方になつて呉れたのは臨檢の試験官であつた。

漁船を乗り切つた——それでも或時に二人乗の漁船を乗り切つた事がある、けれども寫眞師を戴せて連れて行つた小蒸氣船を呼んで直に救助した、船は勿論粉碎したが人に怪我がなかつたと安心して居たら其中の一人年を取つた方が右の腕がない、是は面倒だと思つたが又其一刹那に考へた、若し其腕が今もぎ取られたものなら幾等氣丈な老爺でも一時氣絶位はしそうなものだ、それに着て居る半袖の白シャツに血が付いて居ないのも變だと氣が付いて兎も角も本船にあげて、いたわりながら早速見て見たら、抑々是は明治十年田原坂の激戦に於てと昔語りを初めたから先づ安心。

此衝突は既に完全に替つて居たものを無謀にも本船の前路を横切つて他側に出ようとしたので本船からも又其隻腕の老爺もアブナイからヨセと云つたのに大丈夫だと無理に押切らうとして其時本船の操舵も機關逆轉も効を奏さぬ程、短距離に接近した時であつたから終に衝突したことが兩人から自白されたので責任は全然此方ない事となり造船所から若干の見舞金をやつて事は済んだが後に此事を里程標地元の口利き聞き付けて幾等かの物にしようとなくらんだものであらう、生は警察へ呼ばれたり、警官が素行調査に來たりしたが其時にも臨檢の試験官の有利な立證などありて何



事もなく済んだ。

艦艇の試運轉——生の乗つた船は初めから帆船汽船共に航洋船であつて小形船には全く経験がない、航洋船でも初めの間は船に酔つて閉口した、其時分に酔はない人を見ると腹が立つやら悔やしいやら悪らしいやら情ないやら何とも云へぬ否やな氣持であつたが、何時とはなしに忘れて仕舞つた、そうなつて見ると船に酔ふなんて意氣地のない奴だなとどと思ふこともあつたが、それでも自分の酔つた時の事を思出しては常に酔ふ人に同情した。

船の揺れる時は飯が不斷よりも甘くて餘計に食へるなんて云ふ事を聞くと酔つたものゝ面當てに態とそんな事を云ふのではないかと思つたこともあるが、實際自分が慣れて見ると全くそれに違ない、併し生は常に酔ふ人に同情を持つて居たから、そんなことを口にしたことはなかつた。

水雷艇の試運轉——爾來三十年、船酔と云ふ事は全く忘れて居たが、昔執つた大形の杵柄は小形には役に立たぬものと見えて、水雷艇の試運轉で思出した、まだ走つて居る中はそのでもないが、試運轉の事であるから時々は機關の故障でストツブする、海面は至極平穩で航洋船なら鏡の如くと形容したい位の時でもグラリン／＼と揺れるわ／＼、それでも機關室の人達は一生懸命にやつて居るが其他のものは片つ端から斃れて鮪市場へでも行つた様にアツチにもコツチにもゴロ／＼コロけて居る、ブリツヂに居るものは職掌柄コロげる譯には行かぬから堪へては居るものゝ心持は好くな

かつた、併し全然食事の出来なかつたのは初めの二三回で、それも直に慣れて來た、處が酔つて居る人の眼かち見ると、そんな事は分らぬから、キャピテンは多年鍊へ上げた丈あつて慥かなもんだ、感心だ、浦山しいと云はれると何だかクスグツタイ様な氣がした。

軍艦の試運轉——汽船で初めに天洋丸地洋丸を手に掛けたから其後に香取、鹿島、諏訪、伏見の如き大物が來ても驚かなかつた、だから常盤、富山、加茂、平野、かなだ、めきしこ等は全く手に入つたものであつたが軍艦では實際勝手が違つた。

軍艦では上甲板から階段を一層づゝ上る毎に平面が狭くなり、幾つも／＼上つて一番上のコンマインディングブリツヂになると極めて狭い、其處から見ゆる海面は艦體から大分離れた處であるからブイや棧橋の着け離しに、商船でブリツヂの外端に出て前後の水面を見ながら取扱ふ様な譯に行かぬ。

艦長さんの配下には夫々要所々に責任者を配置して居るから操縦は手足を動かす如く意の儘であるが試運轉の艦長さんにはそんな配置がないから頗る不便であつた、併し度が重なるに連れて是も段々と慣れて來た。

軍艦では、デツドスロー、スロー、ハーフ、オリヂナル、エコノミカル、フールと云ふ様な各種の速力試験を夫々別々に長時間やるから自然試運轉に暇が掛かり、其外に回轉圈測定、燃料試験、水雷發射、實彈射撃、其實彈射撃も各砲を別々にすると各砲一齋射撃とありてそれは／＼試運轉



の數が多い。

燃料試験は晝夜打透しに長時間やり、實彈射撃は何處でも出来るものでないから陸地を充分離れた最安全の地を撰び而かも盡間のみ施行するのであるから一々長崎に歸つて朝又出掛けて行つては往復に時間が取れるから、霧島時には其附近で適當の錨地を求め其處に假泊し當番文を残して艦員、技師、職工の大部分は上陸して宿屋に泊らせた、生も肥前小濱に小蒸氣で送られて温泉宿に泊つた。

霧島の一齋射撃——商船界では可なり古狸の生も實彈射撃しかも口經十四吋砲の射撃は生れて初めてだ、霧島には八吋砲が各舷八門づゝ十六門、十四吋砲が前に四門、後に四門で八門、是等各種の砲を別々に射撃試験が濟んで愈々お仕舞に主砲十四吋砲八門と右舷八吋砲八門を右舷正横に向け一齋射撃と云ふことになつた。

生は射撃試験に就ては船を其位置まで持つて行き射撃が終つたら又錨地まで持つて來る、射撃の間は艦長が操縦するから用はないのであるが矢張見たいから終始ブリツヂに居た。

射撃に就ては種々の人から種々の事を聞て、心配したのは鼓膜の破裂と内臓の顛倒と云ふ事であつた、之を人に尋ねると何れも親切に教へて呉れる、其方針は一様でも程度は人毎に違ふ、耳に詰める脱脂綿が堅いと夫が爲に鼓膜を破る、それも一理ある、と云つて一寸斗りやつて置いたでは役

に立たぬ、どうも度合が分らぬ、終に軍醫長に頼む事にした、夫からは親切な軍醫長は發射の場所が近くなるとわざ／＼ブリツヂまで來て何時でも好い工合に詰めて呉れた、それから五臟六腑の顛倒を防ぐ爲には晒らし木綿を堅く腹に巻いて常に下腹に力を入れて居た。

生は發射の時にはブリツヂの左舷のレールに軽く身を倚せて居た、發したら大氣の激動で押付けられるだらうと豫想して居たら反對に砲彈の飛んで行く方へ引張られる様になつた、それから八吋砲や十四吋砲を別々に發射した時に比較してどんな大きな音がするかと片唾を呑んで待構へて居た、愈々打方用意のラツパがなつてネー打テの大聲の號令でなくて艦長は靜かに打てと云つて砲術長が鉦に手を觸れたと思つた其利那、耳がツーンと云つた斗りで天地晦盲、只黄ろい煙に包まれて咫尺を辯ぜず何が何だかさツパリ分らない、暫らくして遠方に轟々たる<sup>だま</sup>の響を聞た、其時に生は初めて斯んな事では軍人にはなれないと思つた、それから發射した方向を凝視して居ると最初に八吋砲八門の着彈の水煙が八本直立に上り暫らくして大分前の方へ主砲八門の水煙が上つた時は思はず快哉を叫んだ。

それから各室のドローヤ引出しの大部分は半開にして置いたが處々試験的に密閉して置いた分は悉く破壊された、又之も試験的に艦載艇の位置に置いた傳馬船も微塵に破碎された。(口繪参照)

三十六ノツトの驅逐艦山風——生の取扱つた船の中で一番速かつたのが大形驅逐艦山風の三十六

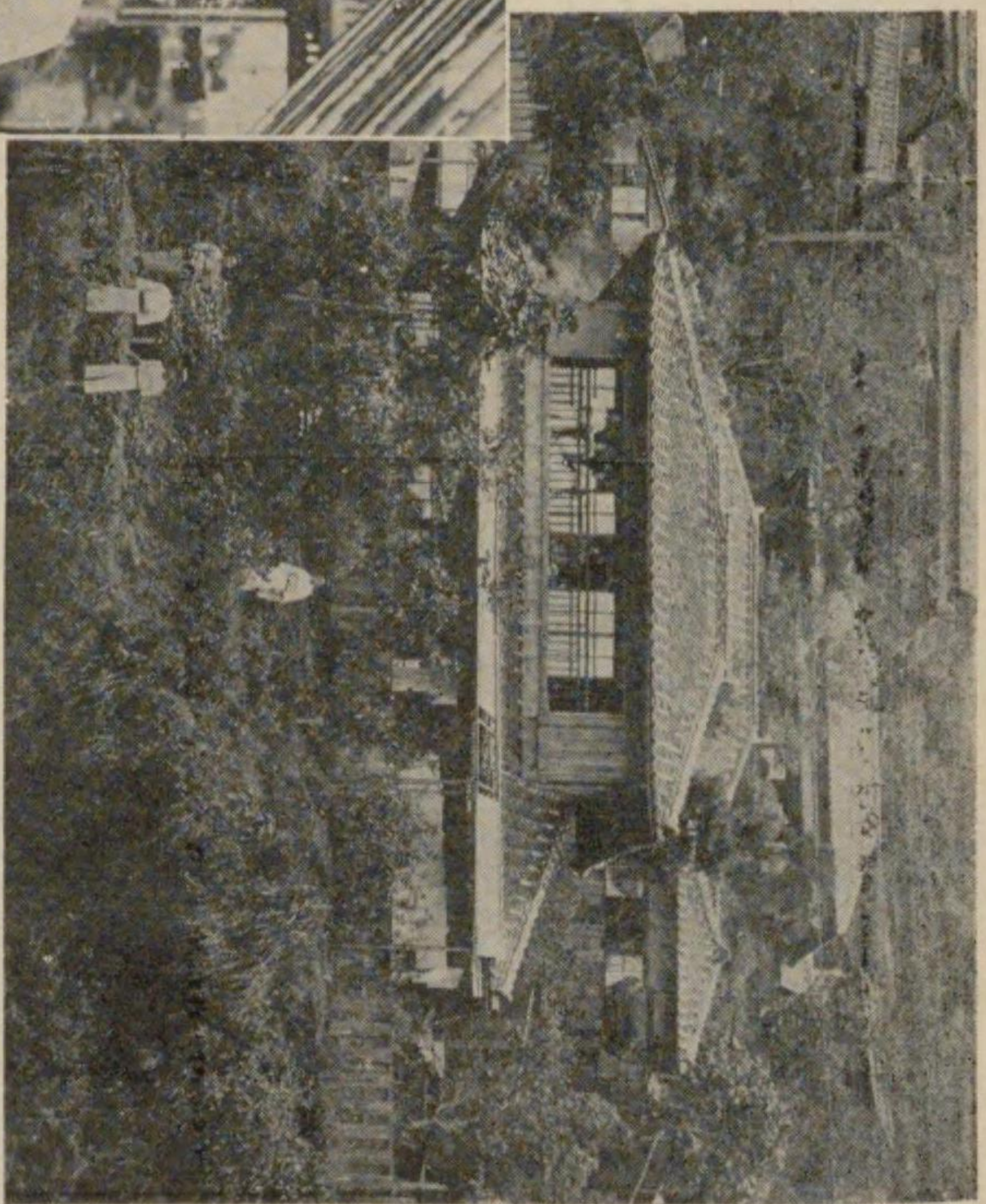


ノットであつた、山風は海風と姉妹艦で、山風は艦體機關共に長崎で作リ、海風は艦體は舞鶴で作リ機關を長崎で作リ技師が舞鶴へ出張して取付けた、斯んな快速力の船で前進の時にブリツヂで前方を見て居ると大氣の壓力で眼蓋に風を含み母衣ほろの様になつて到底眼を開いて居られない、水泳眼鏡を掛けたが體溫でガラスが曇つて前方が見えなくなる是には中々苦心した。

それから驅逐艦の煙突は短かいからブリツヂに居る我々の頭と餘り高低がないので前進の時はまだしも後退の時は堪らん、軍艦の試運轉では後退の時間も相當永い、其間黒煙に包まれて前方（後退の時は艦尾が前方である）を看守する、我々を包むものは黒煙斗りでなく油交りの蒸溜水と蒸氣であるからやり切れない、斯うなつて來ると初めの間は邪魔になる程（失敬）いろ／＼の人が狭いブリツヂへやつて來るが一人減り二人減り終に操縱關係のもの斗りになる、我々は責任上どんな事があつても其位置を去る事は出來ぬ。

驅逐艦の試運轉から戻ると眼が充血して眞赤になつて、それから自分には分らぬが他の顔を見ると眞黒で眼斗り光つて、丸で丹波の山奥から生擒つて來た荒熊で御座いと云ひたい様であつた、そしてそれが又油で込み着いたのであるから少々石鹼で洗つた位ではとれないから、皆ソコ／＼にして家に歸つて風呂で能く洗ふ、是などは全く實際に其衝に當つたものゝ外は何人も知らぬ苦痛であり、そして又何時まで忘れる事の出來ない試運轉の苦心の一つであつた。（口繪参照）

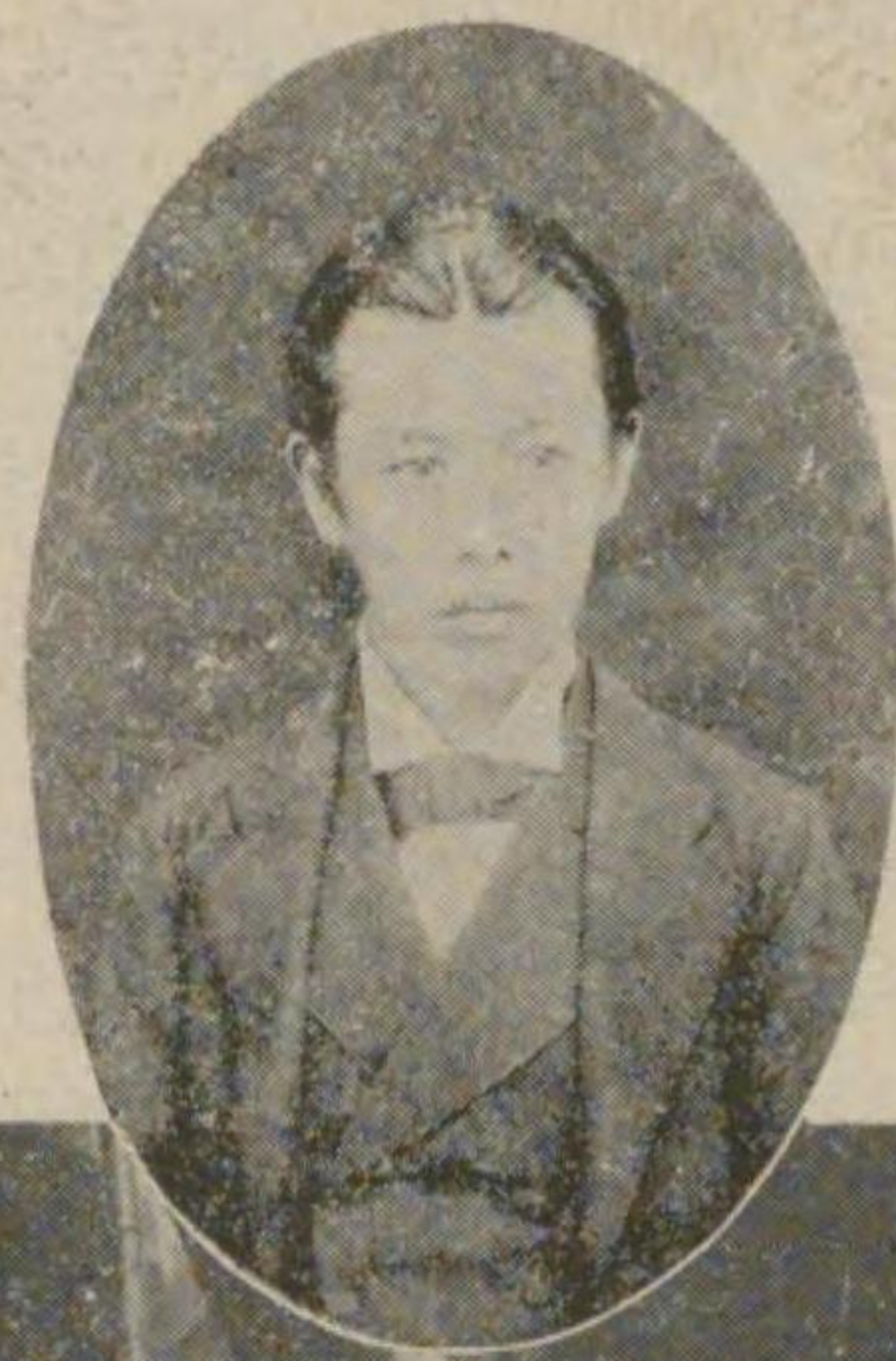
クロウ氏送別寫眞  
全氏宅に於て  
前列右端 著者  
左端 著者の妻  
二人目 クロウ夫人  
後列右から二人目 塩田所長  
二人置いて クロウ氏



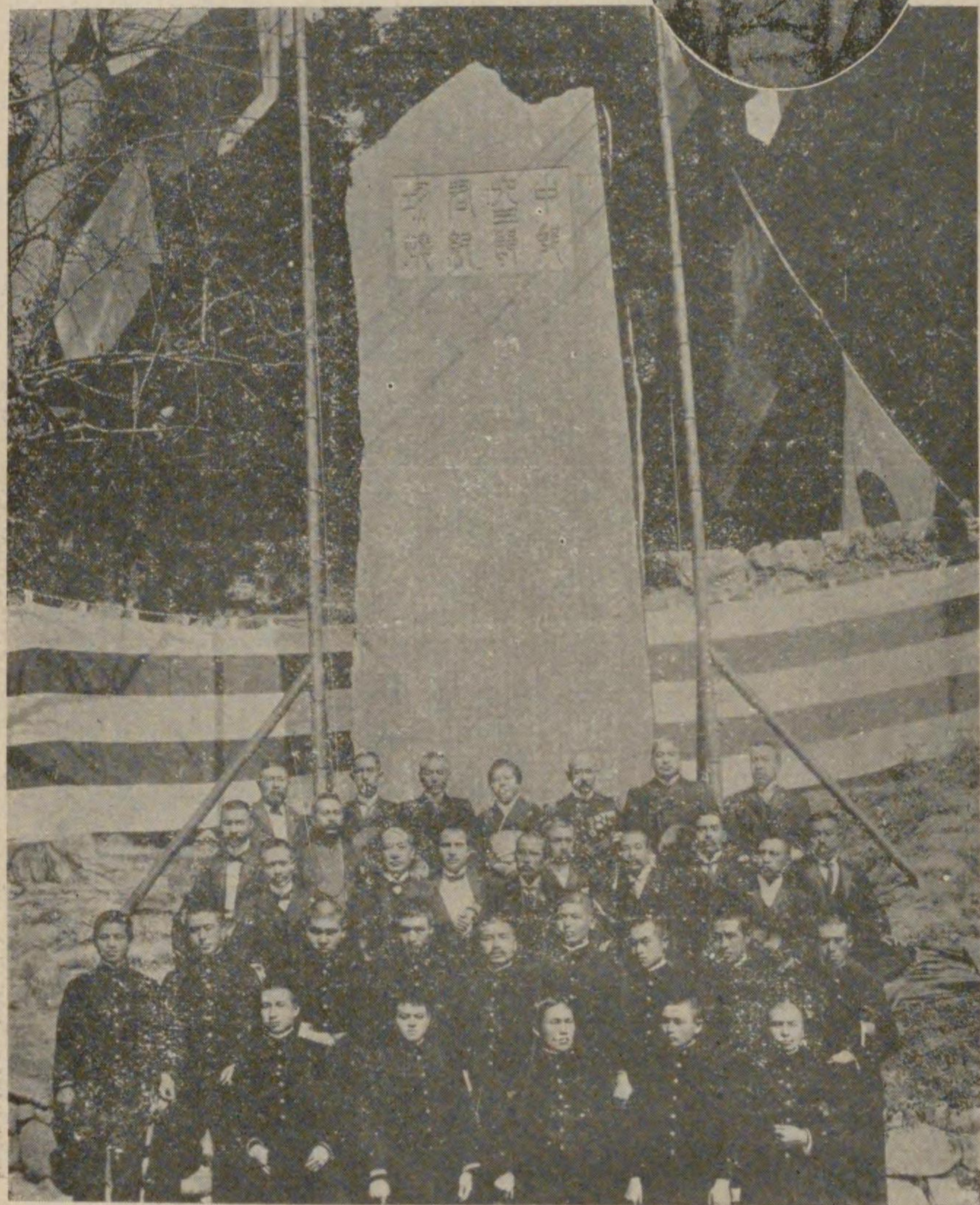
八軒家ドックマスター社宅  
二階左から 前庭左から  
著者 榮子  
病中の花子 用子  
看護婦 榮二  
妻 長男 子



商船學校初代校長  
中村六三郎君



後より第二列左から 竹下爲志君 服部寛司君 多ヶ谷勇三郎君 加藤勸之助君  
木谷東馬君 北川 保君 蛸子 康君 堀 保介君 前二列は實修學生諸君



諏訪公園に於ける  
中村校長紀功碑

後列左より

著 者

- 竹内 濟二郎君
- 椎名 清人君
- 大森 文子夫人
- 中村 松太郎君
- 吉澤 信吉君
- 野々村 雅言君

## 十二、長崎雜觀

見學の好機を逸した——造船所の工場は大體において造船工場及び機關工場に別れて、それが又鐵工、木工、製罐、組立、電氣、裝飾、塗裝等に別れ、生の本職たるドックマスターは造船工場所屬であつた、生が後年海員學校に教鞭を執る事が分つて居たならば、キールの据付から始めて何から何まで見様見真似に造船の概略を覺へて置く事は誠に容易で、斯んな好い機會はなかつたのであるが其當時は造船所に終身勤める積りであり、マサカ其處を止めて學校の先生にならうなどは夢にも思はたかつたから自分の關係以外の事には全く目を呉れなかつた事を後になつて惜い事をしたと思つた。

エキスペリメンタルタンクは其當時長崎以外には何處にもなく全く秘密で外來の參觀者にも之斗りは見せなかつたが、主任技師が度々見たければ見せても好いが内容を他言せぬ様にして呉れと云はれるので、生は遂ウツカリどんな事をシヤベラナイにも限らぬから見ない方が安全だらうと思つてトウ／＼見なかつた、之も後になつては惜い事をしたと思つた。

お九日と盆——長崎で名高いものは諏訪神社の祭典と盆である、是は幕府時代に外教信仰の氣を



紛らす政略から故らに奨勵して神佛の祭典を盛んにしたものであらう。

お九日とはお諏訪祭りの事で、毎年十月七日から九日まで續く處の年中行事の最大なるもの、此お九日と來たら公私總て皆休である、そして此お祭には各町から山車が出る、此山車になくてならぬものは藝者である、又各戸から就つて學齡兒童を山車の踊兒に出す、其山車の趣向、飾付は皆夫々極まつて居るそうなが其中で蛇踊りと云ふのが有名なものである、それは大きな蛇の頭に數十丈の長き蛇體が續いて、それが別に前の方で竿の先に付けた金の珠を追ふて町内をウネリウネリと練り歩くのである。

知事官舎では大きな棧敷を作り各國領事始め内外の紳士紳商を招待して數限りなく練り來る山車と其處に止まつて踊る踊りを觀覽に供する。

此山車を出す町を踊町と云つて、夫は全市残らずではなく毎年幾町づゝかゞ順々に回はつて來る、併し丸山町と出雲町の兩遊廓文は此順番を超越して毎年踊町たるの特權があり、尙夫斗りでなく三日間町内を練り歩く時でも、いつも此兩町の山車が先登に立つの特權がある、此習慣と云ふか仕來りと云ふかは以て如何に長崎で遊廓が幅を利かして居るかゞ想像せらるゝ。

併し踊町になると町費の負擔が中々重いのみならず町内で多少有福な家では子供を踊子に出すのを誇とする向もあるが又此方に希望がなくても町内から有福な家と見ると寄付を當て込みに勧誘に

來る、それが又或る意味の強制的で随分迷惑を感じる向も少なくないと云ふ事で、來年踊町に當る町では早く他に移轉するものが多くて俄かに、かしゃ札が殖へると云ふ。

夫からお九日に次で名高いのは盆祭りである。

生が帆船須磨の浦丸で長崎に行つた頃は、それは盛んなものであつた、先づ第一に驚いたのは各々自家の墓地を掃除して之に火を点する、長崎の地形は港灣の周圍が皆傾斜句配の山地であつて其山腹にある無数の墓に点火するので夜になると實に綺麗だ、夫から各家共に御馳走を拵へて墓場に行き互に呼んだり呼ばれたりして御酒盛が始まる、偶たま其處を通り合はすものがあると知るも知らぬも呼びとめて飲ませる、食はせる、生等も御馳走になつたことがある。

此習慣は段々すたつて來たと聞たが、明治三十六年生が大治丸乗船の爲に行つた時にもまだ少しはあつた様だが其後或年悪疫が大變に流行した時から墓地の飲食は警察から固く止められて以來全く其跡を絶つたと云ふが併し点燈は電氣になつたので以前よりは數倍の美觀を添へて來た。

斯んな風で長崎人は神社崇敬や祖先崇拜に熱心なのかと云へば中々そうでない、諏訪の祭りが遊廓と結び付けられて遊廓が幅を利かすと云ふ風に信仰とは全く没交渉で、長崎に多年傳道した人達から斯んなやり惡くい處はないと云ふ事を屢々耳にした。

此お九日と盆の三日續きの休日は造船所でも書入れ日であるがドツク丈は他の工場と異なつてど



うも實行の出来ない事が多かつた、それで造船所一般は休みでもドックと修繕工場のもの丈はあきらめて居た。

或年の盆に今年こそは休めると喜こんで居た處が盆の前日に俄かに佛蘭西の軍艦が来る事になつて盆の第一日にドックに入れて第二日第三日と三日間に終りそして盆の休日が名残なく没收された、其處であきらめの爲に一首駄句つた。

盆三日、とう／＼没收されにけり、

是が誠のボンデューモツシュー。

旗上げ——長崎では凧の事を旗と云ふ、そして五月の幾日であつたか年中行事の一つとして山の上で凧即ち旗を上げる、それが上げて楽しむのかと思へばそうではなくて、人の旗にからまして勝敗を争ふ即ち綱が切れて旗が落れば負けと云ふ事になる、そこで綱に硝子の粉末を塗り付けたりなどして其摩擦に依て人の綱を切斷するのである、我々が見ては格別興味を引かぬが、長崎の人は旗上げと來ると丸で氣違ひの様である、それが又實際上だ、旗が思ふ様に進んで行つて人の旗綱に搦まる處は實に手に入つたものだ、それで其日は又旗賣り商人の書入れ日で、切られた人が復讐の爲に買つて行く又切られる、又自分は上げないで人の勝敗に賭をする人もある、そんな工合で其日は大概の人が財布の底を拂つて歸る。

ペーロンレース——ペーロンは支那語の白龍（ペーロン）で競争用の船の名稱である、今日でこそ競争用のみ用ふるが昔時は多分漁業用にも又渡海等の實用にも供したのであらうと思ふ、船首を龍頭を以て飾り十餘挺のお玉杓子様の短かい擢をもつて操つる。

筋骨逞ましい若物が銅鑼と太鼓の拍子に合せて非常に短かい間隔を以て漕ぎ行く様は良や原始的な氣もするが兎に角勇ましい、是も年中行事の一つであつて造船所の職工中にも多數の選手もあり又應援者もありて當日は欠勤が多い。

體育奨励か共同作業奨励か將た人氣取りか、知事さん市長さんから賞品其他種々の奨励があると聞いた。

ペーロンレースは支那から來たものであらう、揚子江の龍宮祭に初まり外人は之をドラゴンフェスティバルと稱して相當に面白がつて見て居る様である、長江航路にある時に蕪湖（ウー湖）や九江（きゅうきやん）で時々見たが日本では長崎以外に餘り見られぬ競技である。

臘子（からすま）——是は長崎に限らず神戸でも大阪でも又東京でも賣つて居るが出来るのは長崎である、長崎と云つても實は五島で出来るのだそうなが長崎名物となつて居る。

臘子は臘の子を干し堅めたものだそうなが臘は何處でも捕れるから臘子も何處でも出来そうなのだが、臘は捕れても臘子は五島の臘でなければ出来ないと云ふ事であるから尊とい、尊といから



値段も高いと云ふ事になる、併し其味は實際何とも云へぬ風味を持つたものである、下戸にも上戸にも適する、長崎土産としては位好いものはあるまい。

生の郷里に興津鯛と云ふ名産がある、初めは東海道興津の濱で出来たものであらう、今は江尻でも清水でも出来て静岡の名産となつて居る、甘鯛を鹽に漬けて干したものである、あま鯛は何處でも捕れる、それを鹽に漬けて干せば興津、江尻、清水でなくとも何處でも出来ると云つて仕舞へば何でもないが、併し鹽加減、干し工合、又田子の浦沿岸の潮流、太平洋に面し、山を背にした地勢の日光などの關係に依る点などもあるかも知れぬ、兎に角實に味が佳い、何とも云へぬ風味がある、併し値段が高いから、とても我々プロ級の口には這入らぬ。

希くは臈子と云ひ興津鯛と云ひ、何處でも捕れるものなら又何處の漁師達も研究して、若し其鹽加減、干し工合等に秘密があるならば産業當局は宜しく之を一般に知らしむるの方法を講じ、之を獨りブル級にのみ占領せしめないで、モノポライズを開放して折角人功に依て出来る美味を安く出かして一般民衆の食膳にも安く供せらるゝ様になるならば大なる社會的貢獻であると信ずる。

カステラ——は菓子として可なり年代が古い丈に大阪にも東京にも大凡日本國中菓子屋のある處には何處にもあるであらう、そして東京には東京の特長があり又東京人の嗜好もあらう、京都にも大阪にも神戸にも皆夫々の特長があり又嗜好もあらうから必ずしも何處のが好いと公評的斷定は

下し難いかも知れぬが、何と云つてもカステラは長崎が本家本元丈に一番佳い様である、生は長崎を去る時にカステラに別れるのが惜いと云ふのも感想の一つであつた。

それで長崎を去つて後も知友から贈つて呉れたり又長崎に行つた人から土産に貰つたりして何時も長崎のカステラに舌鼓を打つて居た處が、造船所で豫算係主任でドックとは修繕船の關係で特に親密であつた荒木源四郎君が長崎で最有名な幅紗屋の職人を招いで大阪(本町通二丁目松屋町筋)に長崎堂としてカステラの製造販賣を始めてからは居ながらにして長崎カステラを味はう事が出来る様になつた、そしてカステラに接する毎に長崎に居る様な氣がする。

茂木枇杷——茂木は長崎より山を越えて裏手の島原海灣に面した處で、其處に出来る枇杷が長崎名物の一つとしてある丈に實に甘い、そして大きい、蓋し日本一であらう、生の郷里にも移植せられて長崎枇杷一名麥枇杷と稱して居る、麥枇杷は多分茂木枇杷の訛つたものであらう。

枇杷と琵琶、何れが元かは知らぬが長崎枇杷は琵琶の形をして居る處から見れば他の土地に出来る丸い枇杷は長崎枇杷の變化したもので枇杷の本元は長崎即ち茂木であるかも知れぬ。

眼鏡橋と天主教會堂——生等が初めて東京に出た時に神田に眼鏡橋と云ふのがあつた、眼鏡の形に橋の真中より兩方に二つ丸く空けて石を積み上げた、其形から云つたものであらう。

眼鏡橋は俗稱で本當はよろづ世橋、今では萬世橋と云つて主要なる汽車電車の停留所である斗り



でなく、軍神廣瀬中佐の銅像で名高いからどんなお祭りさんでも知らぬものはない。

生等は石橋と云へば大きな石を岸から岸へ渡すものだとのみ思つて居たのに、小さな幾つもの石を積み上げて真中を透かして能くも石が落ちて來ぬ事よと餘程不思議に思つた。處が須磨の浦丸で長崎に行つて上陸して見ると橋と云ふ橋は皆眼鏡橋だ、そしてそれが新らしいものでなく古色蒼然何れも苦むす石であるには全く驚いて是でも日本の國土であるか知らと思つた、以て古い日本唯一の外國貿易地であつた事が首肯された。

それから長崎に多いのが天主教の教會堂だ、之は古くからカゾリツクの宣教が許されて盛んに宣教したからであらう、長崎市街斗りでなく、伊王島、香焼島其他港外處々の山腹に見える、造船所の職工中にも先祖傳來のカゾリツク信者が澤山あつた、以て如何にカゾリツク布教の盛んであつたか想像される。

**長崎料理**——長崎名物を書く時にどうしても洩らす事の出來ないものは豚の角煮とチャンボンとシツボクである、豚の角煮は元は支那から來たものであらうが、今は純然たる長崎料理で却つて支那料理にはないので支那人も長崎の豚の角煮と云つて珍重する、豚の肉を一寸立方角位に切つて甘煮にしたもので其柔かい事は丸で豆腐の様である。

何處の土地でも名物に甘いものはないと云ふが長崎名物豚の角煮は實に甘い、どなたでも長崎に行つたら何は措いても豚の角煮は是非一度試みられん事を御勧めする、長崎の人は角煮は迎陽亭のゝに限ると云ふが富貴樓でも其他の料理屋のでも食つて見れば甘い、だから生は之を廣義に解釋して長崎の角煮として御紹介する。

次はチャンボン、之は極めて民衆的料理で饅餡の中に豚や葱や油揚げいろ／＼の物をマゼコゼに所謂チャンボンに入れたもので支那饅餡が本名であるが長崎ではチャンボンの方が通りが好い。

長崎にはチャンボン屋が非常に多い、支那人が多いからであらうが、日本人の間にも安くて甘いから相當に用ひられ、造船所の辨當にも毎日多數の井が持込まれ、生もチャンボンの愛用家として人後に落ちなかつた。

シツボクは一般には蕎麥、饅餡の調理の一種で、おかめ、天麩羅、きつねの類であるが長崎のシツボクは違ふ、刺身、酢のもの、吸物、口取り、甘煮、茶碗蒸、焼肴、煮肴等普通の料理を四人前乃至六人前と云ふ様にチャブ臺に載せて坐敷の此處彼處に配置して、客は其周圍に坐はる、酌婦も其中に交るから坐敷一杯空席なく利用さるゝので、會席風に真中を空けて正面と兩側に居並ぶよりは餘程場所經濟である。

個人の家でも客を招く時に何人前と注文すれば四五人なれば一臺、七八人なれば二臺と云ふ風に見斗つて食器物は勿論チャブ臺まで持つて來るから至極便利で、それが又何よりも御馳走であると



は餘所で餘り見られぬ例である。

中村校長の記念碑——長崎で名所と云へば何と云つて先づ指を諏訪公園に屈せざるを得ない、其諏訪公園に東京商船學校初代の校長中村六三郎君の記念碑が立てられた、何故に長崎に立てられたかに就ては既に校友會雜誌等にも出て居る通り、校長はもと肥前大村藩士であり早く江戸に出て幕府に事へたとかで赤松則良、江原素六等の名士と親交の間柄であつたと聞て居る、それで長崎は校長の郷里である。

年月は忘れたが其除幕式には生も参列した、建碑に就て斡旋されたのは當時の港務部長椎名清人君と掖濟會の講師多ヶ谷勇三郎君であつた。

當時参列された來賓の顔觸は荒川知事、秦内務部長、椎名港務部長を始め、海軍部、郵船、商船、三菱等の同窓者及び造船所派遣の實習生、又東京から同窓者代表として西下せられた吉澤信吉君であつた。

又主人側としては嗣子松太郎中佐、中佐の姉君故大森博士夫人ふみ子君等であつた。

太神宮さんとダイジングサン 長崎に限らず一體に九州の人のラリルレロの發音が我々の耳にはダヂヅデドに聞ゆる、前項ロバートソン氏の事をドバートソンと云ひ陸軍をヂクグン、蠟燭を下ウソク、人力をジンヂキ、露西亞をドシヤと云ふ様に聞ゆる、ドンより證據、ドクドク三十ドク、

ヨードツバ、ヒードヒードサンダイスなど能く聞た。

大村町に神宮奉齋會があつて御札や本曆を出して居た、長崎の人は之を太神宮さんと云つて居た、其隣にライジングサン保險會社があつたのを何かの話から太神宮さんの隣のダイジングサンと云ふのを聞たことがあつた。

稲佐町と露西亞の關係 長崎では職工でも町の人でも男で女でもチツトカソツト露西亞語を話さないものは殆んどない、稲佐のものが特に能く話す、露西亞の船は軍艦でも商船でも皆稲佐に上陸する。

稲佐に行つて見ると高大な露西亞のお寺がある、其處には露西亞人の墓が澤山ある、店の看板が皆露西亞字で書いてある、小さな子供達の遊び戯れて居るのを見ると混血兒が澤山居て皆露西亞語で話して居る、何だか日本の領土でない様な氣がする。

稲佐のお榮と云へば誰知らぬものゝない有名な女傑であつて曾ては戦艦ロシヤカリユーリックでベテロスボルグまで行つて同地で官民から非常な歓迎を受けて大に國民外交の實を擧げたと云ふ。

ニコラス皇帝が皇太子時代、彼の大津遭難の前、久しく長崎でお榮の家に滞在したと云ふ。造船所では露西亞の船は上得意で日露戦役後は軍艦は來なくなつたが義勇艦や商船は可なり來た其度毎に生は露西亞語の出來ないのに少からず不便を感じた。



お榮は最早や高齢で船には來なかつたが露西亞の船が來るとお榮の養女とか云ふのが能くやつて來た、そして或時には通譯の勞を取つて貰つた事もあつた。

生の見たる露西亞氣質 極東に不凍港を持たねば止まぬと云ふ野心滿々たる露西亞、帝都の眞中に高大な天主堂を建て、宮城を眼下に瞰下さんとする露西亞、三國干渉に依り日本を壓迫して遼東半島を支那に還付せしめて置いて其代償に旅順大連を占領した露西亞、曰く何、曰く何、數へ來れば實に氣味の惡るい事だらけの、蟲の好かない露西亞の國人、體軀長大、赦顔金髯、一見人をも喰ひ兼ねまじき獍猛人種と思の外、一人々々に逢つて見ると存外アツサリして居る、(但船員)併し口先斗りのアツサリで腹の中は矢張狼であるかも知れぬ、油斷は出來ない、其處で船長機關長など、應對する時でも大に腹を括つて掛かる、然るに彼等亦大に吞氣で、英米船々長の行届いた注意振に引替へて大概の處までドツクマスターに一任する處など割合に氣持の好いのが多かつた。

下級船員と來たら夫はく、無邪氣だ、彼等は命令を能く守る、一例を舉れば舷外の作業に従事するに當り身をステージ、ボースンチエヤー又はボーレンノットに置く時に別に用心の爲に一索を以て身體を縛着し置くべき事を一度命ぜらるれば必ず遵守する、或時は餘り必要のなさうな寧ろ馬鹿げて見ゆる時でも必ず守るのを常に見て居た、斯んな場合に英米のセーラーは上の人を見て居ない處ではやらない、日本のセーラーもマーやらない方が多い。

露西亞の船丈は碇泊中甲板上に沖賣商人の店を廣げる事を許して居た、そうすると船員が作業中行き戻りに南京豆、煎餅、鐵砲玉其他一寸摘み易いものを摘み出す、ヒドイのになるとハンケチ、手袋、靴下、シャツ等までだまつて持出す、處が勝手に取らして置ても決して喰逃げはしない、出帆前に月給を貰ふと好い加減に抛り出す、少し多いからとて返さうとしても一向に取らうともしない云ふ事であつた。

個人的に斯くも淳朴であるのに、國として何故にあんなに惡るかつたであらうか、或は少數野心家が國民の淳朴にして制御し易きを奇貨として勝手次第に振舞つたものではなからうか、然らば今のソビエツト露西亞の政策も亦多數國民が少數野心家の願使の儘に動かされて居るのではなからうか、それは兎もあれ無政府主義とか共產主義とか、そんな物騒極まる國人とはどうしても思はれなかつた。

宴會の苦痛 長崎と云ふ處は宴會の多い處で、殊に造船所に居るとお客を招待する、お客さんから招待される、何々慰勞の爲、何々の祝、社員又は監督の來任、轉任、洋行、歸朝等の歡迎會、送別會其他曰く何、曰く何、それはく、宴會が多い、場所は大概、上筑後町の迎陽亭、西山の富貴樓が主で其外にもチョイくしたのはあるが前の二者に比べると數流、格が下る様に見えた、造船所の宴會は大方前二者であつた、御馳走の名物としては豚の角煮など何時食つても惡るくなかつ



た、一體長崎の料理は何もかも好いのだそう。

故に酒を飲んで藝者とジャラクラするのが面白いなら長崎位好い處はない、が併し生の様な無粋者には宴會が一つの苦痛であつた、今其苦痛を並べて見るならば。

第一に終日立通してサンザ草くたびれ臥れた足を坐布團の上に折り曲げて端坐させられる事だ、次に主義を持つて飲まぬと發表して居るものに向つて入り代り立代り五月蠅うるさく盃を持つて來る事だ、時には若い藝者に云ひ含めて彼人に一盃飲ましたら何々を買つてやる、芝居見物、花見舟遊何でも褒美は望次第と煽てるから無邪氣な雛妓がやつて來て執拗ひつく勧める、どうか一口飲んで呉れと歎願する、怒る譯にも行かず、笑つて居れば中々きかぬのはホト／＼閉口した。

それから十時になつても十一時になつても歸る事の出來ないことだ、併し翌日の勤めには替へられないから、とう／＼逃げて歸る、斯んな工合で如何に料理がおいしいからとて有難いとは思はぬ、それよりも内に歸つて漬物で茶漬を食つた方が餘つほど好かつた。

**宴會で禁酒談** 造船所でお客さんと云へば大概船會社の監督其他の重立、其中には船長以下船員が必ず加ははつて居る、其處で生等船員出身のものは船員側の御相手として毎々呼出される、處が船員には若手が多い、左程若手でなくとも生の様な古狸から見れば大概の船員は若手だ、又何は出來ずとも先方では生を先輩として立て、呉れる、其處で立てられておとなしく御取持をして居れば無難であるが其處に黙つて居られぬのが飲酒問題だ。

先づ最初は紋切形で、どうぞユル／＼召上れと云へば、先方は一向不重寶でと來る、召上りませんかと云へば、先方は少しはやつた方が好いと思つて頻りに勉強しますが一向上達しませんで、少し頂くと此通り金時が火事見舞に往つた様に眞赤になつて仕舞ふので斯う云ふ席に出た時に困りますと云ふから、どうしても一言なかるべからずだ、少しも困る事はありません、好きな酒さへも廢める方が善いのであるから、嫌なものを強て飲む必要は少しもありません、どうぞ御自由に、どちらかと云へば若い方は、殊に船の方は召上らん方が善いのですとソロ／＼禁酒の講釋が始まる、後の方でコレ／＼お客さんにまで禁酒の講釋は廢めて貰はうと云ふから誰だと思つて振返つて見ると丸田所長だつたこともあつた。

斯んな風で生の禁酒主義は何時とはなしに名高いものになり、藝者等も段々と知つて來て、手を代へ品を代へ、どうかして飲まさうとすることも自然に止んで來た。

**宴會は職務だ** 宴會が生に取つて苦痛である事は前に陳べた通りであるが、それでも普通の晩ならマー辛いながらも辛抱するとしても試運轉の晩又は其前晩と來ては實にやり切れない、然るに公試運轉か又は何か特別の運轉が濟んだ時は殆んど極つた様にお客さんを招待する、又我々も終日御苦勞であつたと云つて呼ばれる、併し我々運用關係のものは朝早くから終日ブリツヂに立通して



又歸つて來てブイに撃いでも錨を入れても跡の始末をするから上陸するのは一番後れる、だから眞に御苦勞であつたと云ふ慰勞の意味であるならば家に歸つて自由に寛がして貰つた方が餘つほど有難い、がお客のお取持だから出て來いと云ふ命令なら辭する譯に行かぬ、一體ドチラだらうかとは我々の間に起つた久しい問題であつたが意志が疎通しないで、先方では慰勞の積りであり、此方では難有迷惑で居るのは誠につまらぬ事だから思ひ切つて工場支配人を経て所長で伺を出した處が船員に對する取持は矢張船員出身者が適當であると思ふから是非出て貰ひたい、慰勞か命令かと達而御尋なら命令と答ふるより外ないとの事で其後は何も云はずに出る事にした。

斯んな事も餘り穩かな仕打ではなかつた、能く考へたら、モット上手に要領を得る方法もあつたに違ない、後進の諸君に自重を希望する。

### 十三、長崎造船所の美風

三菱は同じ富豪と云つても三井、鴻池、住友といふが如き昔ながらの長者とはいへないかも知れぬが今の所謂成金でない事はいふまでもない、それで主家と使用人との間柄も自然溫情の濃かなるものがあつた、勿論他の富豪諸家にも夫々其家々の特長はあるに相違ないと信するけれども、そ

れは生の知らざる處なれば單に長崎造船所に就てのみ記して見よう。

一番古い造船所、主家と使用人の溫情　古い物が良いに極つた事はないが兎に角何か念の入つて居る事は事實だ。

長崎造船所は舊幕時代に出來て、それが明治初年に工部省に引繼ぎ、それから三菱の手に遷つたものである。

生の勤務時代においても職工の中に親子で通勤して居るものは澤山あつた、大工、鍛冶、造鐵、鑄物、組立等、親の職を襲で居るものもあり又其職は變つても親の代を一つ通り越して祖父の代から造船所の職工であつたものも澤山あつた、是なども主家と使用人との溫情を明かに物語つて居るものである。

それから大正初年歐洲戰亂の勃發に依て一時に各地に造船所が出來て職工爭奪戰が盛んに初まつてからは長崎からも大分方々へ出たものもあつたが夫まではトント他國へ出るものもなく又他國から這入つても來なかつた、是一つは長崎の地が九州の一隅に偏在して居るといふ地勢上の關係もあらうけれども、亦主家と使用人との溫情を度外に置く事は出來ない。

獨り職工斗りでなく技師其他の役員の中にも親が勤めて又其子が勤め又は親子一緒に勤めて居るものも澤山あつた、只役員にあつては近來三菱の事業が手廣くなつて造船所丈でも長崎、神戸、彦



島の三ヶ所になり、其外に商事、鑛山、銀行、倉庫、製紙其他種々の場所が内外各地にあるので、造船所にとは限らぬが同じ三菱部内に於いて異なる場所に親子二代は勿論、中には祖父より三代勤続のものも珍らしくなかつた。

夫から生は與からなかつたが使用人中相當勤務年數の古い連中には岩崎家老夫人御手織の反物を拜領したのも澤山あつた、是などは價額としては大したものでもないかも知れぬが、主家と使用人の間柄に溫情を濃かならしめた効果は少なくなかつたと思ふ。

斯んな例は昔ながらの長者家には珍らしくないかも知れぬが普通雇傭關係の間柄には見られぬ圖である。

### 三菱流の進歩

三菱家に幾等金があるからとて經濟關係をソツチノケにする事は出来る筈はな

50  
從來三菱の仕事といへば堅牢である、材料を惜まないで充分に使ふ、随つて工費が高くなる、然し工費が高くなつても、仕事は粗末にしないといふのが三菱流であつた様に思はれた、此流儀で多年養はれて來た職工達は人が見て居らうが居るまいが、そんな事に頓着なく只仕事に念を入れて苟くも手を抜くなるといふことは決してない、故に近來所々方々に造船機關の工場が出來てからでも安心して仕事を任かせることが出来るから、仕事が堅いからといつて少々金は高くても大會社處で

は態々長崎へ持つて來た例は澤山ある、だから材料は幾等かゝつても良いから、出来るだけ念を入れてやれといふ仕事には長崎の職工は最も能く當て嵌まつて居たが、少々ザツトでも良いから早くやれといふ仕事には不向だ、職工がそんな仕事を好まぬ、然し近來所々方々に競争者が澤山出來て來たから長崎獨り超然として三菱流を固守して居る譯に行かなくなつた、で、從來の念入り、監督者の有無に拘らず手を抜かないといふ様な美點は其儘存續して早く仕上げる、價額を廉にして顧客の爲に、又船關係斗りでなく陸上いろ／＼のものが出来る様になつたことは三菱流の進歩であつて國家社會の爲に喜ぶべき事である。

### ストライキ

歐洲戰亂の影響は日本には好景氣となつて現はれ、こゝにもかしこにも造船所が出來て所々方々から誘惑が來るので、さしも穩健着實なりし長崎職工も氣が強くなり終に造船所であつたか組立であつたか確とは覺えぬが飽之浦機關工場の一部から賃金増額の要求に依てストライキが起り他が之に和して忽ち立神造船工場に蔓延し、餘す處はドックと立神木工場だけになつた。

生は木工場主任技師と申合せ、ストライキの穩當なる手段でない事を懇々と説き聞かせ、それからストライキに加はらなかつたら責任を以て皆昇給させてやるから毎日出て來いと云渡した處が彼等は神妙に毎日出て來たから毎日増時間を與へて還へした、そうこうして居る内に木工場に飛火がして、とう／＼罷業に加はらぬものはドック丈になつたから此處ぞ大事と大に警戒獎勵に力め



た。

初めは船渠職の仕事をして居るのを山の上から見て居たが仕舞には瓦礫を投ずる様になつて屋外に居られぬから総員を屋内に收容したが、屋内の作業には限りがあるので、古網を解いてセンチツトを編んだり、道具の掃除や磨き方などをして又時には英國先進國でもストライキで成功した例の極めて稀なる事から同盟罷業など濫りにするものでない事など話して聞かせ兎にも角にも終に罷業せず押通した。

其處で罷業復舊の後約束通り一齊昇給を實行した、日頃兎角欠勤が多くて別に悪い人間ではないが、いつも昇給の詮議に預かり得なかつたもの迄が一齊昇給の恩典に預かり、以來餘り欠勤せぬ様になつたなどはストライキの副産物であつた。

ストライキは無論造船所の不祥事には相違ないがドックは造船所中の一番古い工場で祖父時代からの職人の一番多い處であつたなども主家と使用人の間に一沫の温か味が潜在して居たからではなかつたらうか、若しそうであるならば東洋第一とまで擴張せられた長崎造船所としては假令ホンの一小部分であるにもせよ、罷業に加はらずに頑張り通したことは矢張り美點として數ふるの價値があると思ふ、是は生が造船所生活中の一つの矜として忘れる事の出来ないものである。

**三菱氣質** 獨り三菱斗りでなく大會社殊に鞏固な會社にありては何れも一樣であらうとは思ふ

が、三菱の使用人には大正初年の争奪戦開始までは、行先を見付けて其方へ行かうと云ふ様なことはなかつた、又實際に其必要がなかつた様である。

或る老船長が、もはや高齢に達して外洋の航海は骨が折れるからとて社内にあつて衆人の尊敬を受けつゝ曳船の船長をして居たなどは誠に奥ゆかしく思はれた。

そんな工合で社内は割合に平穩で、頻繁な宴會も、酒を飲まぬ、宴會の嫌な生には餘り有難いと斗りは思はれなかつたが、併し一使用人同士の睦ましい處から自然宴會の度數も多くなり、時には主客顛倒の滑稽なども演ぜられたこともあつたが又是等も美はしい三菱氣質の發露とも見られぬこともない。

或時は斯んなチャメ氣タップリの物語りもあつた、場所は長崎停車場のプラツトホーム、其人は忘れたが誰かを出迎か見送りに行つて待合して居る時であつた。

揃も揃つて各自のかぶつて居る麥藁帽子の新らしくないことを誰か云出して終に何時買つたかと購入の年代調が始まつた。

昨年と云ふのが大多數、一昨年も可なりあつた、併し一等賞は當時の所長鹽田泰介君であつた、其時生は少し後れて行つた處が衆目の視線は上には、上があるものだ云つた様な風で生の頭上に注がれ、生の帽子の買入れ年代を調べられて鹽田御大の一等賞は取消されて、榮冠は終に生に歸し



た、斯んなことも三菱氣質の一つであつた。

### 昔の物は性が良い

天下の三菱だ其使用人たるもの餘り見つともない服装も出来ない、何れ使用人達も立派な風をして居る事と世間では思ふだらうが事實は必ずしもそうでない、前記麥藁帽の年代調に依て服装も大方は想像がつくであらう。そこで生の様な服装に無頓着なものでも氣が張らないで割合に勤め好かつた。

生は元來服の新調を減多にしないが作る時には値切り小切りして安物は作らぬ、品質は充分吟味する、だから能く持つ、流行は或週期を以て繰り返すと云ふ、果してそうであるならば生は或人からは常に流行を追ふものと見られて居るかも知れぬ。

生は三菱に於いて獨り麥藁帽子で一等賞を得た斗りでなく服装、身の回りにおいても一等賞であつた、今其一二を御披露するならば。

### 一、時計とその鎖

明治二十九年十月、生の生家で兄と姉が同時に大病で親族間で皆心配して居ると聞て北辰丸を一時下船して郷里に歸る途中汽車の中で時計を掏られた、初から持つて居なければなくても濟まうが、持ち付けて持たぬと不自由だ、そこで何れ東京に行つて買ひかへる積りで一時の間に合せて静岡で三井物産一手輸入の New York standard watch Co. と云ふ大袈沙な銘の入つた、分の厚い大形のニツケル時計を大枚五圓で又鎖は四分一赤銅製のものを三圓五十錢で買つ

た、處が其時計が非常に工合が好くて買替る必要がなくなり其後千代田丸時代、役人時代、大治丸及びドックマスター時代の終り頃まで二十年間實に工合が好かつたが時計も段々と老境に入つてか、直してもくモウ動かなくなつたので大正六年一杯で持主と共に退隠して今のもものと買更へ、大形の方は筐に納め二十年間愛用の紀念として保存し鎖は今も尙引續き常用して居る。

### 二、フロツクコート

生が明治二十五年船長になつた時初めてフロツクコートを作つた、其頃獨逸中興の名主ウイヘルム老帝が若い時からフロツク一枚で通して來たと何かの本で見たので生も一つ、老帝を眞似てやらうと思つて居た處が、三十二年審判官になつて其頃審判廷ではフロツクと定められてあつた、そして殆んど毎日着る、夫から脱いでは好い加減に丸めて机の曳出しに押し込んで置く、とうく一帳羅のフロツクを臺なしにして仕舞つて止むを得ず第二回の新調が現有のものである。

### 三、シルクハット

世界中でシルクハットを一番多く用ふるのが英國人だそうな、他の外國人はどうかしらぬが、兎に角日本人殊に民間では減多に用ひない、だから無くても差支がない位だから稀たま見ると變てこに見える、今でも年取つた方には御記憶があらう、生等の若い時に東京に團團珍聞と云ふ有名な滑稽雑誌があつた、其の表紙の畫にシルクハットをかぶつた妙な男がついてあつた處から團珍帽子と云つて居た、それに値段も餘り安くはないし旁々生はシルクハットを買はぬとき



めて居た處が神戸海務署長時代に今の兵庫縣廳の落成式に招かれて而かも服装がフロックコート、シルクハットと定められてあるから行きたくても行けない、終に生等が何かと云ふと御世話になる今の大阪商船神戸支店の鈴木六二夫人の嚴父山田毅君の、を借りて行つた、處が生の頭に少し小さいので風が吹くと飛びそうになるから戸外にある間は絶へず手で押へて稍く無事に濟んだ。

夫から間もなく關西地方に陸軍大演習があつて。

大元帥陛下行幸、須磨離宮御滞在中、大阪に開催の内國勸業博覽會に行幸の御事あり、神戸御通輦の際は行幸還幸共にブラットホームに整列して拜謁仰付られ、其外にも。

皇后陛下、皇太子殿下行啓の御事もありてシルクハットの入用が段々と頻繁になり、其度毎に山田君の、を借りて斗りも居れず終に奮發一番、一つ張り込んだ。

それが長崎に於いては、軍艦の進水式には、御名代として皇族中の何宮様か必ず御臨場になつた、式場御臺臨の時は勿論、御到着、御出發の時には、進水並に進水後繫留の作業に差支のない限り奉送迎申上る事になつて居り、そして其時は矢張フロックコートシルクハットと云ふ事で其度毎に天下の三菱の社長、所長、重役諸氏參列の中に此時代物が聊かも引けを取らなかつたなど三菱美風の一つかも知れぬ、此時代物今も新調當時と同じ新しさで、又別に流行に後れたとも見えす却つて高價の新調物よりも尊い様な氣がして相變らず愛用して居る。

## 十四、造船所の十一年

### 使用人の年齢規程

生は三菱に這入る前から居た、三井三菱共に這入る事は相當六つかし、いが這入つて仕舞へば兩者共に待遇は悪くはない、只兩者の異なる處は三井は敏腕家が重要せられ、三菱では温厚家の方が社風に適する、三井では役に立たぬと見たら若くても何でも出して仕舞ふ、併し大會社文に退社の手當は相當に呉れるから出された方にも不平はない、處が三菱では一旦這入つたら悪るい事をしない限り、社の方から暇を出す事はしないで一生使用する、所謂畜殺したと、誰がそんな事を云つたものか、果してそうであつたかどうかは勿論分つたものではないが、或はそうではないかと思はるる節もないではなかつた、去れば生の様な世渡りの下手な、蓄財の道に拙ないものには畜殺し主義は持つて來いだ、此處に居れば貯金だとか、老後の計だとかいふ心配は要らぬと思つたのは大變な間違だつた、餘り淺はかだつた、世の中は何時までも三菱だけをパラダイスにして置く筈はない。

大正六年何月であつたか勤務最高年限が職工は五十才、技師は五十五才といふ規程が出来た。

生は明治三十九年十二月大冶丸船長よりドツクマスターとして赴任した時にはまだクロウ氏が居



られて生は其アツシスタントで勤め、四十五年クロウ氏の隠退に依て其後を襲ぎ、初めてドック主任となつた。

最高年齢五十五才の規程の出来た時、生は既に五十九才であつたから何れ何とか申渡しがあるだらうと思つてはゐたものと別に沙汰がなければ明年の還暦を期して隠退を願出ようと勝手な考をしてゐた矢先であつたから聊か晴天の霹靂ではあつたが不服を唱ふべき筋合のものではなく、本年一杯といふ豫告に對し謹んで御受をした。

そして後任として木下恵作君が來たからドックマスターの職務を引繼いで、夫からは單に御手傳として約半年居つて、其年末に辭表を出した。

是も三菱なればこそ出來たので何處の會社へ行たつてフルベで御傳などといつて置いて呉れる處はあるまいと思へば今でも勿體ない事であつたと思ふ。

## 十五、長崎に於ける家庭の十一年

造船所勤務十一年間家庭に於いては四十一年に花子が生れ、四十五年には昌子が梅ヶ崎女學校を卒業し、踵で結婚し、大正三年梅ヶ崎女學校が下之關に移り光城女學院と合併して梅光女學院が出

來、潔子は學校と共に、用子は學校を追て下之關に行つて入學し、同六年には辰男七高を卒業して京大に入り、榮二は東山學院を卒業して大阪高工入學の準備に掛るなどの事があり其内の特に大なるものは。

昌子の結婚　であつた、其連合刈米省三は大阪高工出身の俊才ではなかつたが、大の發明道樂で、當時砲兵工廠の技師で、アルミニウムの接合法で專賣特許を得て工廠から重寶がられて居た、結婚は嚴肅なる意味に於いて極めて質素にやる積りであつたが、御親父が長崎控訴院書記長として頗る羽振りの好い時であつたから、控訴院長、裁判所長、兩檢事長及び判事檢事を招きたいから造船所の方も之に匹敵する方々を招待して呉れといはれ、何といつても此方は娘を貰つて貰ふ關係上先方の意に従はなければならぬので、所長副長各場所主任並に同僚小林、星野、北川諸君夫婦を招いたので、双方の來賓が大分の數になり其翌日には青年發明家の結婚と題して大袈裟に新聞に出たりした、式は馬町の組合教會で同教會牧師司式の下に、梅ヶ崎女學校長廣津藤吉君夫婦の媒妁、造船所購買課長にして組合教會の重鎮たりし梅田信五郎君司會にて施行し、式後西濱の町精洋亭に於いて酒拔きの披露宴を開いた、造船所側では生の平生を知つてゐるから別に不思議とも思はなかつたが、裁判所側では酒拔きの祝宴に少からず奇異の思をなした人もあつたといふ、斯んな工合で金は一斗斗り掛つたが主義を曲げずに押し通したことは愉快であつた。



榮二の入院手術——生來至つて無病なりし榮二が不圖足が痛いと言ひ出した、大した事はあるまいと最初の中は氣にも掛けず、本人も昌子結婚のゴタ／＼の後であつたから強て云ひもせなかつたが、其痛さが激烈と云ふではないが妙に變だと云ふから念の爲に心易いY先生に診て貰つた處が骨膜炎の疑があるとして親切にも縣立病院に連れて行つて外科の大家I博士に診て貰つて呉れた、處が數日の間隔に數回試験の結果骨膜炎に相違ない、而かも時期が大分後れて居ると聞て驚いて早速入院させた。

子を持つた親として幾分の御参考にもと思ふから茲に其成行を記載する。

最初骨膜炎と極まり大手術が必要と聞て之を何處でやらうかと云ふのが問題になつた、如何となれば誰に相談しても現今外科は福岡大學病院に若くものはないと云ふ、又生等兩親にしても出来る丈大丈夫に萬遺漏のない様にしてやりたい、それには福岡が一番好いだらうと思ふ、併し其處には第一に考へなくてはならぬ經費の問題があるが、其點は一時手元が差支ても何とかして呉れる人は澤山あるけれども我々兩親は日々の経過を知りたい、若し出来るならば暫らく経過を見るまでは何の役に立たずとも妻は付添つて居たいとも云ふ、そう云ふ點に假令經費の方は一時心配がないにしても福岡では思ふ様にならぬと種々考へて居る處に又別に斯んな話が持上つて來た、縣立の一外科醫師で近日罷めて開業すると云ふ某氏は其友人なる造船所の一技師を通じて、令息の手術はI博士

が只一途に大事を取つて、後れて居ると云ふので實際はそんなに差迫つては居ない、殊にI博士は既に老境に入つて手が振へるから大手術を托するには危険である、夫よりも近日自分が開業の上充分親切に御引受するから其時まで御待になつては如何と、斯んな話を聞くと又迷ふ、終にどうして好いか分らなくなつて、一夜妻と共に祈り、相談し、又祈つて稍く長崎縣立病院に入院して手術を受ける事に決した。

そして六月四日に入院して兩足共に膝と踝骨の間を切開手術を受け幸に経過良好にして十一月の初めに退院して其後もチョイ／＼病院に通ひ又自宅療養をなし全く恢復して翌年の學年には東山學院の元のクラスに復學した。

此五ヶ月の入院中初めの三ヶ月は雇付添の外に妻が付添ふた、故に妻は生よりも一層印象が深い。全快復學の後も常に足の事を心配して運動と聞くと直に足に障る様な事は止めてお呉れとそれは／＼八釜しく云つた、それから手術を長崎で受けた爲に生も時々行つて見ることが出来る、又時には泊つて妻を休ませることも出来る、又最初から心配して呉れたY先生も時々見に来て呉れたり又Y先生の親友でI博士付のO先生が始終我物の如くに親切にして下さつたなど思合はして能くも彼時に長崎に決する事が出来たと今も尙時々妻と共に祈に應へ賜ひし神の攝理を感謝する。

榮二は之に依て兵役は免ぜられたが示來健康は至つて良好である。



花子の悪性チブス——大正六年の夏花子が悪性のチブスに罹つた、是も最初は大した事はあつたと思つて居た處が前記Y先生の診断に、少し質が良くない様だからとて斷然二階に隔離して絶對安靜を實行した、熱は段々と昇つて忽ち四十度以上になつて中々下らない。

Y先生も普通のチブスならばモウ下降を示す筈だがと少からず心配して下さつたが何にしても四十度以上の熱が數日續く間に體力が次第に衰へて來た、花子の此大患に就て生は一の記録を作つて居る、其一節に斯んな事が書いてある「藥餌其他の手當に就ては殆んど人事の最善を盡して餘す處はない、今は病勢と體力との對抗である、體力勝つか、病勢勝つか、此數日が最大切だとY先生は云はれる、此對抗にして果して双方の力が互角であるならば、我には祈に依て加へらるゝ神の力があるから此對抗には必ず勝つ自信を得た」と又「Y先生は斯う云はれた、今度の全快は全く醫師の要求を容れて、一、絶對安靜を守つた事、二、見舞訪問者を絶對に病人に會はせなかつた事、三、本人が能く病苦に堪へて醫師や看病者の云ふ事を聞かされた事等を挙げられた、併し生はY先生の周到にして老熟せる醫療の効果を第一に數へ、そして總てが祈りの効果であつたと信する」と今も尙そう信じて居る。

花子が床を揚げたのは十月の末であつて、それから髪の毛が段々抜け始めたから仕舞には一旦丸坊主になるか知らん、そうなつては可愛そうだと思つて居たら、半分程抜けた頃には新たに濃厚なのが生へて來て、七年一月長崎を引揚げて清水に移つた頃は全く新陳代謝して非常に濃いザンギリ頭になつた、以て其病勢の如何に猖獗なりしかを察せらるゝであらう。

## 十六、長崎引上

前途の煩悶——大正七年一月十日愈々住慣れし第二の故郷長崎の地を去るの日は來た、つくづく過去を願れば明治十六年十二月帆船秀郷丸二等運轉士、月給貳拾五圓、(其時の貳拾五圓は薄給ではなかつた)の職に就てより鰻登りに登つて今日に至り、其間餘り休むと云ふ事もなく月給生活を續けて來たから少し上手にやれば相當の蓄積は出來て居なければならぬ筈であるのに理財の道に疎い生は實際の素寒貧であつた、併し終生畜殺しと聞く處の三菱に這入つたお蔭で餘り心配もせず來た處が晴天霹靂の年齢規程、而かも勤續年限の短かい生はどうせ充分の手當は貰へないものと思つて居た處が、會社は破格の恩典を以て規程計算額よりズツト以上のものが給與せられた、之で生等夫婦が餘生を氣樂に送るには充分であつた、此點誠に有難い、が併し子供は昌子が一人片付いた丈で、辰男、榮二、潔子、用子、花子の五人が在學中である、是等を成業させるにはとても足りない、如何にしようかと前途を考へると心細くて夜も寝られなかつた、と云つて外に使道のない此老



軀、併し幸に健康丈は壯者を凌ぐ、時恰かも歐洲戰亂、船舶激増して船員に不足を告げて居るの時であつたから、好し、いつそ海上に三度の勤をやらうと決心して之を妻に相談すると妻は不賛成、子供も辰男始め皆不賛成、若し我々の勉強の爲に老年の父が三たび海上に勤務しなければならぬならば我々は勉強を止めると云ふので別に名案はなかつたが兎も角も乗船の考は翻した。

行先の撰擇——そこで何か仕事をしようとするならば海運の中心點たる神戸大阪地方に若くものはない、併し船に乗るならばイザ知らず陸上勤務としては既に老朽用に堪へずとして暇を出された札付の老體を何處に持つて行つたつて使つて呉れる處はあらうとも思はれぬから、先づ郷里に近い清水に引上げ家庭の根據を其處に据へて、そして静岡縣は近來發動機船が非常に發達したと云ふから航海運用の寺子屋でも開かうか、又近來米國行きの茶の輸出の爲に外國船が入港すると云ふから、外國船専門の畫葉書賣り、富士山を背景に速製の寫眞でも撮つたり、碇泊中、久能山、龍華寺、三保の松原、清見寺、静岡などの見物案内もしたり（遊廓又は酒場に案内を望むものには意見する積りで）又謡曲羽衣を急速度に稽古して又それを英譯して美麗な小冊子を作り、物好きな外人客や船員に説明し又時には謡つて聞かせ、そして賣付けるも面白からんなど種々考へて兎も角も清水に行く事にした、そこで。

さして行く、カナンの里を人間はゞ、

田子の浦浪、三保の松原。

錢別紀念品——造船所では吉例として、會社を去る人には各自贖金して錢別の贈物をするの美風があつた、そして其品物は別に極まりはないが、大概、置時計、床の置物、金屏風等であつたが、生は常々俺が止めたら、どうせ貧乏するに極まつて居るからそんな贅澤品は要らぬ、折角呉れるなら賣つて金になるものか左もなくば生活必需品か現生で貰ひたいと云つて居た處が愈々生の貰ふ番が來た、さて發起人諸氏は平生、生の云つて居た事を知つて居るから何にしようかと大分相談したそうなる、その結果大體の金額を示して本人に希望を云はしたら良からうと云ふ事になつて生と最も親しい後任のドックマスター木下君から内意を聞かれたから、賣つて金になるものとか、現生とか云つたのは全くの冗談で、實は退隱後何處に行つても氣象には興味を以て餘生を送りたいと思ひ、是まで買ひたいと思ひながら力が及ばないで手に入ることの出來なかつたパロサイクロノメーターを所望した。

それから船渠職一同から、花瓶、香爐何れも紫檀臺付、桐胴切火鉢一對等を贈られた、是等も近き將來に貧乏生活を豫期して居る生には不相當の贈物であるから、若し前から知れて居たら厚意を謝して固く辭退する處であつたが既に調進して代表者數名が持つて來て呉れたので、強て辭退すれば厚意を無にする譯になるから喜んで受けた、そして禮狀には社宅の床の間に並べて生と妻と花



子(當時家に居るもの丈)との撮影に左の一首を添へて送つた。

末ながく、家の寶と傳へなん、

君がまことの、こもるかたみを。

出發準備——長崎出發の時間は誰でも午後十一時何分であつたか兎に角、翌朝門司に着くと云ふので出發者には至極便利だ、併し見送者には甚だ迷惑な時間だ、午前でも午後でも作業時間中なら心の中は兎も角も表面は執務中であるからと云へば立派に御免を蒙る事が出来る、又行くにして作業時間中なら大して迷惑を感じない、けれども午後十一時何分と來ては、夫から海を渡つて歸つて寝る時は一時近くなる、朝早く出勤しなければならぬものには實に迷惑であつた、故に生は出發を午前十時と發表して執務時間中であるから見送りは固く御辭退すると付け加へた、處が船渠職連中から出發を夜行に變更して呉れと請求して來た、生は前記の理由を以て懇々と見送り辭退の意を述べたが情誼に厚き職工達いつかな聞入れない、若し夜行に出來なければ當日は全部欠勤して見送ると云出したから是は大變と終に日頃の公言を嚙み潰し涙を吞んで夜行にした。

それから生は三菱で汽車旅行には一等旅費を給せられて居たから自然私用旅行にも會社の體面を重んじて一等乃至二等に乗つたが、會社の手を離れて今は鏹一文の収入もない身の上、體面も何も要るものか、三等の赤切符でも好過ぎる、若し其次があるなら夫にでも乗りたい處だと頑張つて見

たが、船渠職が皆見送つて呉れる時に己達の親分が三等の赤切符は情ないと思ふだらうと、諸氏の熱誠なる心中を察しては聊か焼け氣味の強情も頗に控けて、門司から先は兎も角も先づ長崎を立つ時は一等と極めた。

提灯行列の見送り 大正七年一月十日、日が暮れて夕食を済ました頃から職工達は三々五々、手にく酸漿提灯を持って八軒家の社宅を取囲み時々萬歳を叫び初めた、生は最初は一杯元氣で面白半分調子に乗つて來て居るものがあつては不本意と思つたが、どうしてく酒は一切嚴禁で、酒氣を帯びたものは仲間に入れないと云ふ申合せで全く眞面目に名残を惜んで居ると聞ては涙なしには居られなかつた。

愈々豫定の時間が來たから懐かしき八軒家の社宅を出て向島海岸より造船所から出して呉れた小蒸氣船に乗つて大波止に向つた、其前後左右は數隻の舢舨に職工達が分乗して造船所の小蒸氣船に曳かれて提灯と萬歳とで賑かな事であつた。

愈々大波止に着くと生は妻と辰男、榮二、潔子、用子、花子それから當時海事部勤務の遞信技師横山要三を伴ひ徒歩長崎停車場に向ふ、其左右は職工達が縦列を作り、先登の樂隊の音頭に和して、

あなうれし、よろこばし、戦ひ勝ちぬ。  
いさうたへ、いさいはへ、この勝ちいくさ。







船渠員一同  
より送られ  
たる紀念品  
を當時在宅  
の著者及び  
妻と花子



長崎引揚に際し實修生諸君より送別記念として撮影せられたるもの  
前列左より 小谷 正尊君 村上愛次郎君 柳 信夫君 山口 末次君 河本 通夫君  
中列左より 野々村五郎君 松浦智恵作君 清家 和市君 黒谷 捷次君 用子 榮二  
後列左より 堤 繁雄君 鈴木 永君 近藤 秀次君 田中利八君 小笠原武夫君

之が濟むと樂隊は（螢の光、窓の雪）の符で奏樂をはじめた、そして汽車が動き出した時に一齋に萬歳が叫ばれ、それから古い文句だが、汽笛一聲、長崎を發してはや我汽車は全速力で門司に向つた。



## 第六 陸 上 篇 (其二)

### 一、門司より清水へ

下之關滞在、熔岩採集 住慣れし長崎に暇を告げて汽車は豫定の通りに翌朝門司に着いた、その時梅光女學院長廣津藤吉君一家並に同地教會員諸氏に迎へられて下之關に渡り、廣津院長宅に落付いた。

我等一行七人の内辰男は長崎の要三方に遺り潔子と用子は梅光女學院在學中、年末休暇に歸つたのであるから直に寄宿舎に這入り妻と花子が廣津院長宅に泊り、生と榮二はお馴染の禁酒旅館錦波樓に宿泊する事になつた。

生は海上勤務中、下之關、門司には何十回或は何百回入港し其度毎に船用又は私用で上陸はするが、只の一度もユツクリした事がない、で今度こそはと一兩日滞在して附近を散策見物した、今一々此處に記載するの煩を避くるとしても、どうしても省く事の出来ないのは廣津院長自慢の同君發見の。

椋野村火山趾 である、同地は學校所在地丸山町より裏手の方へ小一時間行つた處で、アネモネ栽培で世間に知られて居る處だそうな、廣津君も最初はアネモネ見物に行つて計らずも熔岩を見付け、それから段々と故老の言や古書に依て一の火山趾である事が分つたのだそうな。

最初に捨得したものゝ内には可なり大きなのがあつて現に同校に保存してあるのを見た、又東京、京都其他の大學へも参考品として送つたとの事であつた、生等の行つた時は最早餘程世間の知る處となつて、大分拾つた跡であつたから大きなのはなかつた。

熔岩は岩石が地下の高熱の爲に熔解して液體となつて噴火坑より迸出して空中又は地上において固まつたものだと思はれる程そうかと首肯するゝ様な形をして居る、丁度薩摩芋を押潰した様に平たく、中央は巾廣く兩端は段々と細く、そしてつらゝの様に細くなつた奴が旋回する内に所々か自體の重みに依て拗ち切れたとでも云ふ様に兩端が尖がつて居る、礦物學上自然そうなるものだと聞た。

同地はホンの一寸した農村の様であつたが熔岩發見以來方々から學者、好事家が探見調査に來たり何かして當時大分地價が上つたといふ話も聞た。

犬島訪問 下之關に二日滞滞して潔子、用子は梅光女學院に遺り、妻と榮二と花子四人連で出發した。



それから昌子の婚嫁したる刈米省三は此時砲兵工廠を辭して藤田組礦山部技師として岡山縣犬島製鍊所にゐたので、其處を訪問する爲に岡山に下車した、其時生も生の家庭のものも皆懇意にしてゐる宮本富太郎君が宇野高松間連絡船の機關部に勤務して居り其日は特に都合して刈米と共に驛まで迎に来て呉れて、其夜は岡山の二旅館に泊り翌朝は輕便鐵道で宇野に行き宇野から島に渡つた。

其時刈米には長男正夫と長女靜子があつた、正夫は今既に中學を卒業して我が孫、年長者である、刈米親子四人に適當な社宅が與へられてゐる、其小さな技師の社宅へ我等親子四人が推しかけて行つたのであるから家の中は一杯であつた、狭いのは内輪同士であるから辛抱するとしても夜具の都合などから泊るのは無理であらうと思つたら差支へないといふから其譯を聞けば宿泊者のある時は會社から貸して呉れると聞いて流石は大處で、使用人を斯くまで厚遇せらるゝとは感心だと、安心して親子四人が上等の夜具にくるまつて寝た。

翌日は岡山に歸つて再び汽車旅行を續ける積りであつた處が是は又意外、瀬戸内海には時化はない、風が吹いても渡海船が止まるなんて云ふ事は全く考へてゐなかつた、曾て船長時代には夜も晝も相場師見た様に空とパロメーターから眼を離した事はなかつたが、お客さんとなると全く呑氣だ、それでも天候不良とでもいふならとに角、冬期西風が少し強い位で渡海が止まるなどは全く意外であつた、けれども船の出ないのは事實だから仕方がない、見物する處はなく、とう／＼此方が

四人、先方が四人、親子兄弟孫と合せて八人で積もる話に島流しの日を送つた。

犬島に於ける一つの印象は水の不自由な事であつた、けれども我々珍客の爲には會社の使用人が此方に於いて辭退するにも拘らずセツセと運んで呉れたのは勿體なかつた。

岡山より清水へ 神戸は生の一家に取つて長崎に行くまでの第二の故郷であり、教會關係、海員協會關係、三菱關係、役所關係等で生斗りでなく妻にも懇意な方が澤山あるから此處だけは三日斗り滞在の積りで各方面に豫報して置いた處が犬島の足止めでスツカリ番が狂ひ、神戸に下車する事が出来なくなつたので夜間停車中に驛まで来て呉れた少數の人に逢つた丈で直に清水に向つたのは返す／＼も残念であつた、是は清水着が少し位延びるのは差支ないが乗車券の有効期間が切れるので誠に止むを得なかつた。

中には會社から貰つた斗りでウンと持つてゐる癖に神戸清水間の切符を無駄にする位何であるかと怒つて手紙をよこした向もあつた、けれども其時の生は四人分の切符を棒に振る氣にはなれなかつた。

翌朝は前方に皚々たる白雪に包まれた富嶽が見へた、海上ならば先づコムバスでベアリングといふ處だが汽車のお客には其必要はない、只何時見ても氣持が佳い、是からは毎日之を見る事が出来るかと思ふと嬉しかつた、早速家人に之を紹介した、花子は本物の富士山は初めてなので一層興味



を引いた、そして島田、藤枝、焼津と各驛々で迎に來て呉れた親族の人達が乗込んで其日の午後江尻驛に下車して海岸の旅館潮陽館に落付いた。

## 二、清水住居の決定

生が長崎に於いて愈々退職の事が極まつた時には歐洲戰亂の最中であつたから船に乗るなら幾等でも口はあつた、生も亦それが一番好い分別だと思つたけれども家庭の事情が許さないので清水に止まることになつた。

生の郷里は清水より西方約十里の海岸、静岡縣志太郡靜濱村であり、親族も亦多くは皆其附近であり、そして其人達は皆郷里に歸つて來ると思つたかも知れぬ、併し生は清水を擇んだ譯を説明して、會社でこそ定年を超へたが、まだ働ける、又働かなくてはならぬ、働らくべき畑が船關係に限られてゐるので清水を選定したのである、清水ならば發動機船員の爲に航海運用の寺子屋を開いても好い、又内外航洋船の荷物積卸の世話焼や上陸船員の案内も好い、要するに生の出来る仕事と云へば皆船關係であるからどうしても清水が一番適當であると云つたら皆諒解した。

清水の住宅、赤色の富士

清水に落付いて先づ第一に着手したのは家さがしであつた、何れは

適當の土地を求めて小規模に永久の住居として一軒の家を作りたいとは思つてゐたが、それは急の間に合はぬから差當り借家を探さなくてはならぬ、其借家に就ては、日當り、風通し、飲料水、前住者の健康等は第一の條件であつたが其外に些と贅澤の様だが富嶽の眺望と云ふ事を度外する譯に行かなかつた。



先づそんな條件で何處を宛てともなく探し回る内に三保附近で或一軒が見付かり家賃其他の交渉から前住者の健康の段に及んで一つの面白い物語りがある、家主のお婆さん曰く「わしらんここでは、おまいたつちようみたいな、づなそうな人でなけりやあ、貸しやせんで、病人なんざあ這入つたこたあないだに、殊に和田先生がお富士さんを書く爲に永く這入つて大變氣に入つた家だ」との言葉に思出したのは、長崎に居て大阪毎日新聞の元且繪附録に富士山があつた、そして其富士山が赤かつたので、生は富士山の中腹から上は雪だから白いに極まつて居る、赤い雪なんてあるものか、全體誰が書いたんだと調べて見ると和田英作畫伯だつた、それでお婆さんの話が首肯された。

それから清水に落付いてからと云ふものは兎も角も雨さへ降らなければ毎日富士を見る、生は子



供の時から富士山を見て居たけれども、上の方が白くて下の方が青いと云ふ位より外に印象はなかつたが今度清水に来ては前の様な關係もあり富嶽を望む毎に多少注意を拂つて居た、處がある、赤く見える時がある、中腹から上の方に積もつて居る白雪が朝日を受けて赤く見える事があるので、曾て赤い富士があるものかと嘲つた無禮を心の中で私かに和田畫伯に謝罪した。そして其家ではなかつたが一軒の借家に這入り尙心掛けて居る内に理想的の安い地面が手に入り兎も角も一軒の家を新築した。

### 三、戸田の講習會

**講習開始** 清水に落付いてから遊んでも居れず、と云つて百姓も漁業も出來ず、矢張船關係より外に使道のない男、しよう事なしに海事思想宣傳の積りで新聞に少し斗り船關係の事を書いたのが廣告になつて、沼津の水産組合で伊豆の戸田に講習會を開くから講師に來て呉れと云つて來た。此方は遊んで居る時であるから自分で好ければと早速行く事にした。

さて行つて見ると講習は乙種二等運轉士と發動機三等機關士で、機關部の講師は東京池貝鐵工所から高工出身の技師が來た、そして機關部は小學校の一室で、甲板部は村會議事堂で開く事になつた(議事堂と云つても大した大建築ではなかつた)。

**講習生並に講習** 講習生は永年無免狀の儘船長をして居た連中であるから皆大人だ、そして商賣取引に慣れて居る丈に詞語と算術はお手のもので教ゆる必要はない、船の操縦は更にお手のものではあるが、それが衝突豫防法や運用術の理解があつてゝないから試験を受ける爲には矢張學ばなくてはならぬ、そこで先づ一番大切な衝突豫防法を初めから終りまで棒讀みに輪讀させて字句文は殆んど暗誦が出来る位にして、それからボツ／＼解釋を授ける様にした、此教授法は大に成功して試験の時に豫防法文は皆フルマークであつた。

それから運用法としては右旋暗車、左旋暗車、舵の作用、測程器、測深器など極簡単に要領を授けて試験は先づ無難であつた、海上氣象の段に入つては朝夕の軟風、冬季の西風、颯風の發生、進行の方向、風位の變遷、日本近海に襲來する順序移動等を説明した處が一同が大に興に乗り、其講習が始まると講習者以外に役場の連中までが傍聴に推しかけて來たなど中々面白かつた。

教場と旅館とは一丁斗り隔たつて居た、毎朝八時に始めて晝は食事に歸り一時間休憩、午後は四時までやり、夜分は宿で坐談的にやつてやると云つたが皆閉口して晝文で結構と云つて宿には來なかつた。

**旅館**

其構造などは戸田の旅館であるから多く云ふを要せず、食物としては第一魚が實に新ら



しい、漁村ではあるが野菜は何でもある、そして皆新鮮で魚類にしても野菜にしても調理が實に豊富で氣持が好い、宿の主人やお神や女中達が質朴で親切で心易くて、とても居心地が好かつた。生は永い海上生活から習慣付けられて常に洋服を着用し和服はホンの自宅でくつろぐ時の外は着なかつたが、今度は一丁あるかないかの處で教場も宿屋も疊敷である關係上浴衣がけで出掛ける事にしたが和服の外出は自分ながら何となく氣恥かしい様な氣がした、けれども宿の女中達は能く似合ふと云つた事を長崎へ書き送つた處が、生の和服姿を見た事のない連中が想像して圖の如き畫はがきを合作して送つて來た、自分はマサカ、モウ少し風采が好かつたではないかと思はれた、嗚呼犬が欲しいと書いたのは後に聞くと上野の銅像の西郷に似て居るからだとは光榮の至り。



宿の裏は直に海で泉水は水族館になつて其中にはあらゆる魚族が游泳して居るのも贅澤なものであつた。

坐敷からは、はだかになつて海に飛び込んでサント泳いで上つて來ると直に風呂に這入れるなど到底都會の一流の宿屋でも見られぬ圖であつた。

生は從來船に居ては尙更の事、陸上勤務の時でも避暑避寒などした事がなかつた、しようとも思はなかつた、又それは非常な贅澤な事だと思つた、然るに戸田の旅館に居る時丈は又格別で、朝起きて先づ一しきり海水浴、晝飯に歸つて來て又ドンブリ、そして晩は八月の永い日を暮れるまで泳いで風呂に這入つて浴衣がけで跌坐を<sup>おち</sup>かいて先づ一杯と云ふ處であらうが生には其御用がないから夕食後新聞雜誌を読む、手紙を書く、睡くなつて寢に就く、此講習の味斗りは今でも忘られない。

試験 二ヶ月の講習が終つて東京から試験官が來た、其時の試験官は甲板部は今の高等海員審判所審判官鈴木七郎君で、まだ試験官としては若手の方で、生は長崎時代に同君が三井物産の汽船に船長として來られた時から 知合であり、機關部は今の東京高等商船學校長島谷敏郎君であつた。

試験は矢張海事部ですると同じ様に體格検査、筆記試験は一齊に施行し、それから順々に口述試験と云ふ順序であつた。

試験の成績は前にも書いた様に衝突豫防法は上出來、運用法、海上氣象、海上法規の須知事項等



は先づ普通で大部分は合格したが十二分の期待を以て居た國語算術が試験の様式に慣れない爲か存外不出來で、とう／＼國語で一人、算術で一人而かも優秀と思つて居たものに落第者を出したのは呉れ／＼も講師の不覺であつた。

ブーチャーチンの下田形——戸田にどうしても書洩らす事の出來ないものがある、それは嘉永安政の頃伊豆の沿岸で露西亞の帆船が難破した、其船長ブーチャーチンが幕府の許可を受けて代船を戸田で作ることになつて船大工を下田方面から募集し、ブ氏が指揮してスクーナー一隻を作り上げて其船で歸國した。

其時に作り覺へた大工が其後下田で盛んに作つた、それが下田形スクーナーの嚆矢であると云ふ、其造船場の跡に石標が建つてあるので、生は屢々其處に往つて知らぬ昔を偲んだ。

#### 四、清水の生活

養鶏と園藝——清水に落付いて先づどんなことを始めたかと云ふと第一に養鶏であつた、鶏の長閑な鳴聲、ヒヨッコがピョ／＼と走り廻る處、何とも云へぬ可愛らしい、楽しいものであり、殊に自家産出の新鮮な鶏卵を食膳に供する時の愉快さ、王候貴族には逆も味ふ事の出來ない圖であらう、

けれども愈々我仕事としてやつて見ると鶏舎の掃除、鶏糞の始末、野菜が欠乏すると便秘する、ヒヨッコを猫が覘ふ、夜分は犬が襲來する、掃除を怠ると羽虫がわく、イヤハヤ斯うなつて來ると養鶏も餘り樂なものでない、船長やドックマスターで號令をかけて人を使役して來たものには逆も不向だ、併し折角初めたものだから放棄するのも惜しい、それに少し斗りある畑も自分では出來ないから老爺を一人雇つた、そして行く／＼は自分でやる積りであるから力めて養鶏の仕事をやつた、そして稍く覺えたのが家禽の種類だ、先づ産卵用にはホワイトレグホン、此奴は羽根が達者で身が輕くて始末に負へない、素人向には名古屋コーチンで此奴は鈍重で病氣にも罹らない、卵用肉用兩方に適するがレグホンに比べると産卵が少ない、其外にアンデルシヤン、ブラマ、プリモズ、アンコナ杯があつたが養鶏家としては成功しなかつた。

次は畑に苺やトマトを作つた、苺は久能の石垣作りの眞似は出來ないが土地が適して居ると見えて中々良く出來る、とても内では食切れぬ程出來る、と云つて賣る程もない、折角出來た物を捨てるも勿體ないからジャムを作つて方々へ送れば重寶がられるけれども砂糖が澤山要つてやり切れないと大藏省から苦情が出る、是も成功の方ではなかつた、黄瓜も茄子も大根も蕪も皆同じ事で出來始めると逆も食切れない、近所の人にやつても田舎の事で餘り有難がられない、青物市場へやつた事もあるが車の借賃と持つて行つて貰つた日雇賃文にはならなかつた。



田園で生活して園藝で儲けようなど我々の到底企及すべき處でない、けれども自家の畑に作つてそれが出来ることと云ふことの楽しさは又都會生活者の味ふことの出来ない處である、去れば田園生活は我々に取つては安くない一種の贅澤な楽しみと解すれば好い。

清水で初めて借りた家は波止場に近い處であつたが下清水に自分の地面が出来たので高い家賃を拂つて居るのも馬鹿らしいとて一軒建てる事にした、そうなると波止場から下清水まで約廿分毎日ナツバ服を着て出掛るのが何よりも樂であつた、それを長崎に云つてやると例の連中が又其有様を想像して畫はがきに合作してよこす。其度毎に生を大西郷に見立て、呉れるのは恐れ入りながらも嬉しかつた。(二二五頁挿畫参照)

自宅講習——戸田の講習で落第した落武者二人を氣の毒でたまらぬから内に呼んで教へた處が、段々と聞傳へて習に来るものが出来て一時は中々賑つた、併し臨時試験を請求して試験官に清水まで来て貰ふ丈の人数に達しないので東京へ試験受けにやつた、そして大概は一度でパスして来て今でも清水で小蒸氣船や浚渫船の船長をして居て生の事を先生々々と云つて寒暑の音信を絶たな

50

此仕事は養鶏や畑作りよりも成功の方であつた、之に就て一つの面白い談がある、東京へ試験に行つて、成田の不動尊に信願して幸に合格したから早速御禮参りに行つて序でに先生の家内安全の護摩を焚いて守札を受けて来たとして大きな箱入の不動尊の守札を持つて来たには驚いた、吹出しそうになつたが其心根のやさしさには感心した、又うれしかつた。

## 五、廻漕店勤務

造船監督——自宅講習もそれ／＼片が付いた時に生徒の一人で一廻漕店の小蒸氣船に乗つて居るものが其店主の命を受けて、生が造船所に居たことを聞て、目下新造中の發動機船の監督に来ては呉れまいかと頼みに来た、生もどうせ遊んで居る身であるから行く事にした。

そして行つて見ると船體は伊豆の土肥(どひ)(前掲戸田の隣接地、温泉のある處)で作り既に清水へ曳て来て居る、機械は大阪の清水鐵工所とかで製造し近日送つて來るとの事であつた。

造船所に居て多數の新船を取扱つたが設計に關しては全く與つた事がない、又有り得ないのであつた、けれども設計など云ふものは新式や舊式や又上手下手はあるにしても一旦方針を極めて着手する以上寸法などは違ふものであるまいと思つて居た、現に大形驅逐艦海風の機械を長崎で造り艦體は舞鶴で造り立派に出来上つた事を知つて居るから船體を伊豆で造り機械を大阪で造ると云ふ事は餘り驚かなかつた。



夫にしてもマア念の爲にと、造船棟梁に機械製造所と作業進行上の聯絡は取つて居るかと思つて見たら荒ましは打合せして居ると云ふ、スターンチューブの這入るべき穴が餘り大きくない様だがシャフトの太さなど分つて居るかと思つたらハツキリ分つて居ないと云ふから、若しシャフトが太くて這入らなければどうすると思つたら、其時は穴を繰り廣げると云ふ、穴を大きくすれば船尾材の肉が減るが強みの上に差支はないかと思つたら、其時はシャフトを削ると云ふ、シャフトを削つても契約の馬力に差支ないかと思つたら、多分差支あるまいと思ふと云ふ。

何だか設計に全く経験のない生にも甚だ心許なくなつて來たから之を店主に話したら、店主も氣を揉んで一度大阪へ打合せに行つて來て呉れと云ふので早速大阪へやつて來た。

其頃の大阪は今と大分違つて居た、市岡町の殆んど草原の様な處に中山海士學館がビヨコンと建つて居た、機械の製造を托した清水鐵工所は難波櫻川町で、プロペラは立場町邊の鑄物工場で造つた。

取敢へず工場の主任に會つて造船棟梁の云つた通りの事を話したら、それは以ての外で、這入らなければシャフトを削るなんて出來るものでない、此方はチャンと契約通りの寸法に基いて作つて殆んど出來上り近日發送する事になつて居ると云ふ、生は機械の事は解らぬが寸法丈は調べて見ると契約通りになつて居るから兎も角も早く發送する様にと云つて清水に歸つた。

それから間もなく機械も届き、取付け組立ての爲に職工も數人來たから船は前部にバラストを積んで後部を持上げ稍くシャフトを嵌める處が水上に出て來たから栓を抜いて穴の徑を測ると果して小さい、シャフトを削り細める事は出來ないから穴を繰り廣げると云ふから、夫は船尾材の強みに關係するから検査官に聽た上でなければ出來ぬと云つて居る時に偶たま外の船の検査で東京から検査官が來たから早速見て貰つた處が辛ふじて一杯く繰り廣げる餘地があると云ふので遂に繰り廣げてシャフトを嵌めた機械も組立て、試運轉と云ふ處まで漕ぎ付けた。

新船航運開始——時は歐洲戰亂の末期で變態的好況の時であるから船長以下職員が中々安く得られない、否安くも高くもテンで人がない、否あつても來ない、そして尻馬に行く時には何事も斯んなものか知ら、船は補助機關付帆船で船長は丙種運轉士免狀で行ける積りの處が僅かの噸數の差で丙種船長の免狀でなければ行けぬ事になつた、處が丙種船長と云つても今の甲種船長より以上の高給を拂はなければ來ない、生は愈々となつたら、船長には自分が行く覺悟で運轉士と機關長を頻りに物色して稍く乗組員も揃ひ、試運轉も済んで、愈々航海を始めた處が、第一に船長以下の人件費が最初の目算よりも遙かに高い、處に持つて來て機械用の油が又豫算よりも餘計に要る、艙内は船を丈夫にくと云ふ方にのみ力を注いだのと、造船と造機との打合せが不充分であつた結果は機關に多くの場所を取られて、荷物か思つた程這入らない、船を丈夫にと云ふ方に力を注いだ結果は船



體の重量が増して速力が豫定程出ない、どう勘定しても算盤が持てない、サア困つたと云つて見た處で仕方なかつた。

生も最初設計の時から携はつて居たなら實際腹でも切らなければならぬのだが、船體も機械も出來上がつた處に來て組立てや取付を監督した丈であるから、結果が悪るいからとて理屈の上からは責任はないが、何としても氣の毒でたまらなかつた、そこで船員を成るべく機會ある毎に安いものと取り替へ、航海には出來る丈風を利用し帆を張つて以て燃料を節約すると云ふ様な消極的方法を講じてマアやれる丈やつて見ようと云ふ事になつた。

回漕店の番頭——發動機船は先以て出來上り航海を始めたから約束の監督の役目は濟んだ、處が生は引續き其店に勤めて、主として該發動機船關係の用務を擔任し、云はゞ船舶課長、兼課員、通信係、書記となつた譯で、外に該店取扱の内外汽船入港の時は本船に行つて荷役の世話焼きをする、當時清水には該店の外に二軒の回漕店があり、どの船でも入港すれば三回漕店から荷物を積出し、只入出港の手續、貨物積入に關する書類整理等を取扱店とする丈で實際の積込は何の店も別に變りはない、それで生もどの船にでも行く、郵船、商船、東洋汽船、大洋海運其他どの船に行つても必ず知つた顔が居る、外國船でもブリュールファンネル、プレジデント、エムプレツス其他長崎でドックに來た船は勿論、そうでなくても轉船して乗つて居るものもありて知つた顔がチヨイ／＼居る、

そして呼ぶにドックマスターの稱を以てするも面白かつた。

是まで外國船では言葉の解らない爲に意志の疎通を欠いて、つまらぬ事から物言を起したりすることもあつたのが、生が行く様になつてからそれがなくなつたとて三回漕店から重寶がられた。

内外各船共に清水は入港直に荷役、積切直に出帆で時間構はずだから、日が暮れて歸ることや、未明から又は夜半から出て行く事は常にある、斯んな事は海上又はドック勤務の時に常にある事で外の人が億劫がる程生には感じなかつた。

小蒸汽船の船長 其店に小さな綺麗な小取回しの良い小蒸氣船があつた、其船長が何かの都合で暫らく欠勤することになつて、實際の操縦には船員が慣れて居るから差支はないが船長なしでは置かれぬからとて、生が名義丈の船長となつて定期検査を受ける事になり、東京から検査官が來た、普通運轉士の居らぬ小蒸氣船では船長が先に立つて狭い處もモグリ歩いて検査官の御案内をすべきだが生には夫が出來ない、検査官は生と知合の年の若い身の軽い方で案内なしにズン／＼狭い處を検査して呉れる、生は其間デツキで見て居る、検査官は上つて來て横山君は矢つぱりグレートキヤビテンだなあと云つて笑つた事がある。

或る時に一つ閉口した事は静岡縣知事が清水港を見に來て其小蒸氣船で港内を巡覽することになつた、此日斗りは船長自身船を操縦して貰ひたいと店主が云ふ、やつて見る處がどうも中々骨が折



れる、曾ては二萬噸の巨船を見事やつて退けたグレートキャピテンも二十噸未満の小蒸氣船を甘く操縦しようと思つて大汗をかいて辛うじてボロを出さずに済んだ。

港の秋風 茶の輸出時期には内外の汽船が中々頻繁に来て舂人夫の世話焼き兼通譯さんも得意であつたが、秋風の立つ頃から段々船が減つて来て仕舞には殆んど來なくなつた。そんな時に他の店員は平素手の回り兼ねた自分の擔任の帳簿を整理する、或は倉庫を片付ける、皆夫々に仕事がある、手持不沙汰なのは生斗りで、朝出て來て、新聞を讀んで歸るのも餘り勿體ない、店主は構はぬから居る様にと云はれたが何としても相濟まぬと思つて居る處に大阪から海員學校長にと相談があつたので暇を貰つて其方へ行く事にした、店の方は夫で良いが跡に氣掛りは例の發動機船であつた。

## 六、大阪府立高等海員學校長

海員學校の成立 原田汽船會社の先代重次郎翁が身を海員に起し成功して今日の大をなしたる關係上、學校の系統を踏まないで實地から出て試験を受けて高等海員となるものゝ苦心の一通りでない事に同情し何とかして是等實地出身の海員に發展の道を與へたいと常日頃云つて居られたが其

實現を見ずして世を去られたので孝心深き現代社長六郎君が先代の素志を襲で之を建設し大阪府に寄付せられ、大正八年五月三日盛大なる開校式を擧げたもので最初は高等海員養成所と稱したのが後に商船學校令に依て公立實業學校に編入せられ高等海員學校と稱するに至りたるものである。

本校の創立に就ては時の遞信局海事部長石川武之君が何かの相談に與り同君より少からず斡旋援助を與へられし事を聞て前年海事官時代より同君を知れる生は一層嬉しかつた。

校長職員及生徒 學校は府立であるが原田家は寄附者即ち産みの親であるから校長の事をも常に心配せられた、生は先代重次郎翁が既に機關長に成功して陸上に素地を作るべく會社の監督時代に大阪海事局に勤務して相知るの仲であつて現代社長六郎君から招かれて來た時は大正九年三月丁度學校創立より一年立つた時であつた。

初代の校長西尾英次郎君が創立間もなく急病にて逝かれ、其跡を教頭加藤正直君が襲がれ、加藤君亦病氣の爲に職を辭して其跡へ生が來たのである。

職員は今の校長黒河内君を筆頭に機關部に手塚君、數學に後藤君、馬場君、英語に岡田君等が居られた、そして甲板部には生が來てから戸井田君それから少し後れて青木君に來て貰ひ、青木君が止めて其後に酒井君に來て貰つて、生徒も益々殖へて最初五十名前後の處が間もなく百名を超し、百五十名を超し、二百名を超し一時は二百四十名位になつた事もある、本校の生徒は最初より機關



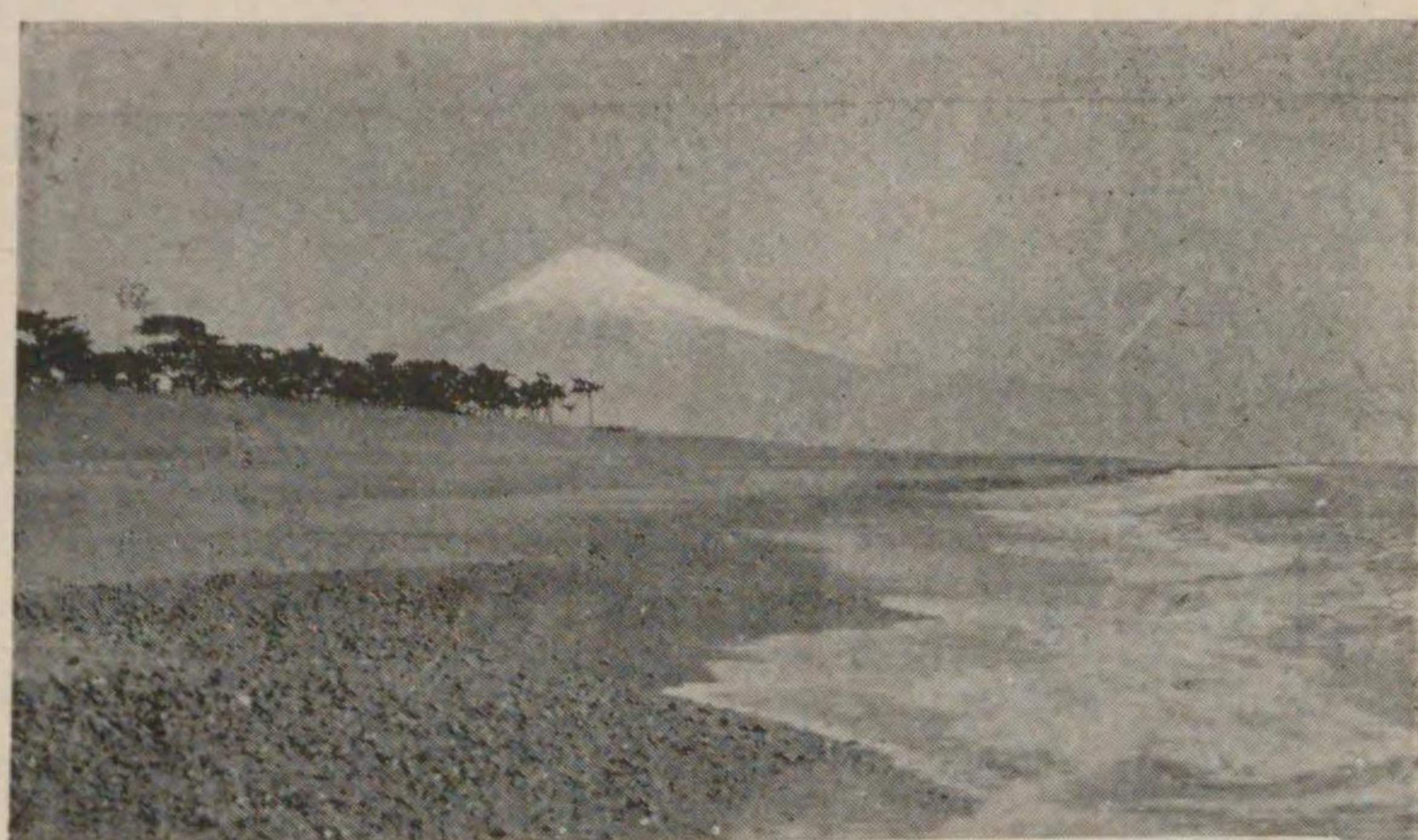
部が甲板部より常に優勢であつた。

其後手塚君が去つて其跡へ小原君、馬場君が去つて其跡へ藤井君、後藤君が去つて其跡へ釜谷君、更に試験規程の改正、科目の増加に依て隅田君、田所君、窪田君に来て貰ひ、小原君が去つて其跡を窪田君が襲ぎ、窪田君の跡へ守田君に来て貰つた。

事務は創立以來佐治君は終始一貫、妹脊君が去つて吹田君、吹田君が去つて川北君、専任舎監は松山君が大正十年三月に來られて同十五年五月在職中に逝かれ、其跡へ築地君が來て數月にして去つて其跡へ今の須田君が來られたのである。

そんな工合で勿論學校が小さいから職員の数も多くはないが、夫にしても職員の変替の少かつた事は此學校の一種の誇であつた。

**授業の受持** 甲板部の生徒も段々と殖へて來たので、授業は戸井田君、酒井君に主もにやつて貰つて生も出来る丈の時間を受持つ様にした、それで六十の手習式に種々の参考書を引張り出して實際の経験と照合して教材を作つたが、何しろ曾て習つたことは皆忘れて仕舞つたし、よしんば覺へて居たにせよ皆古いし又實地の経験と云つても今日では最早皆舊式に屬するものが多いので此點は相當苦心であつた、それで先づあぶなげのない修身、國語又極簡易な救急醫療などで責を塞いで居た。



三保の松原羽衣海岸より  
富嶽を望む

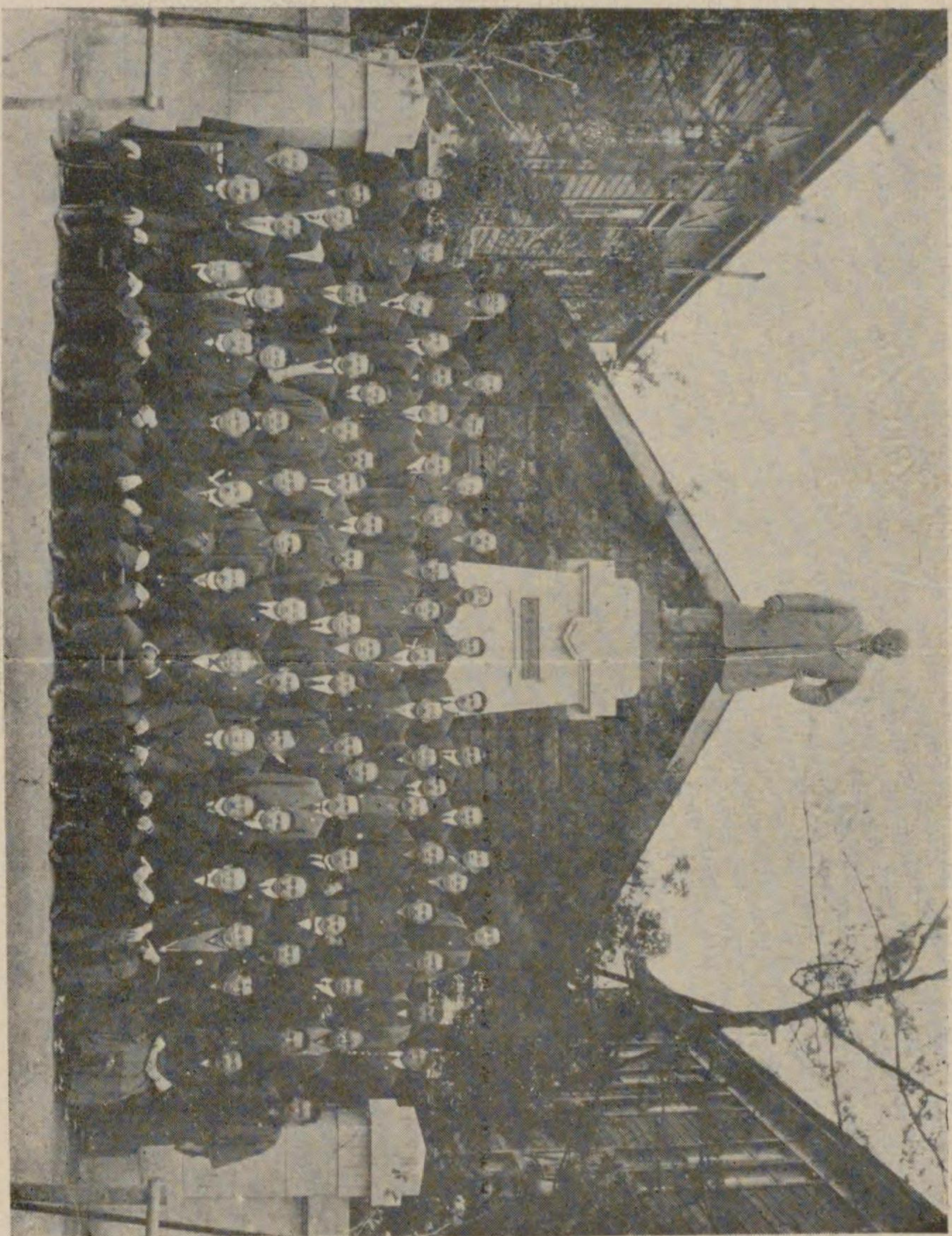


清水自宅南側  
中後列左より  
榮二 粟飯原梧樓君 著者  
川崎義敏君 用子 花子 辰男  
前列左より 潔子 妻



豊橋入營中の 辰男 後列 著者  
榮二 前列左より 用子 妻 花子





大正九年五月三日高等海員學校創立第一週年紀念式來賓職員生徒  
前列 銅像眞下 著者  
著者より右へ 府學務課 吉村君 全 西田君 岡田君 長谷川君  
著者より左へ 原田汽船 長崎君 全 林君 黒河内君 後藤君  
馬場君 佐治君 其他在校生諸君

**学校内の起臥**——生は單身赴任して校舎の一室に起臥して居たが生徒が殖へて来るに連れて教室の不足を告ぐる様になり寄宿舎の職員食堂の一部を仕切つて其處に移つた、人は之を見て、さぞ不自由であらうと憐らつて呉れたが實は船内の生活に慣れた生には食事と入浴は寄宿舎の御蔭を蒙り、起床就眠、讀書運動總てが定めた通り何等の妨もなく行はれて聊かも不自由はなかつた。

日曜日の禮拜は初め中の島の北教會に行つたが是は少し遠いので學校と川一つ隔て、築港公園の脇に福音教會があるので其處に行き始めて、其處の宣教師とも心易くなり、生の狭い部屋に遊びに來てベリーナイスルームと云つた。

**家庭との連絡**——生は單身赴任して家庭は清水に置き、時々都合を付けて金曜日の夜行で歸り土曜日曜と居つて日曜の夜行で歸校する様にした。

其頃辰男は京都大學に、榮二は大阪高工に、用子は神戸女學院に居たので榮二とが一番接近して併し時には三人落合ふ事もあつたが、潔子は東京女子英學塾に居たので休暇の時でなければ會へなかつた。

それで家には妻と花子と夫から雇人の老爺とで平素は誠に寂しいものであつた、けれども年末、春休み、暑中休暇となつて皆集まる、其處へ夫々各自の朋達が交るゝ訪ねて來るので夫はゝ賑かであつた。



辰男が豊橋へ一年志願で入營した時に西から生と榮二と用子と、東から妻と花子と落合つて五人で訪問した事もあつた。

其後用子はアメリカに行き、潔子は安東洪次と結婚し、榮二は横濱淺野中學に、辰男は大阪市岡商業に奉職する事となり、花子は静岡英和を卒業して神戸女學院高等部に入學し、清水は愈々妻一人となつたので、大正十五年の夏、用子がアメリカから戻り女學院に奉職する様になつた時を一期畫として、清水の家を櫻井春子姉に預け、西の宮へ移轉し、生も學校の起臥より引上げて久し振りに家庭の人となり、毎朝生と辰男は大阪へ用子と花子は神戸へ東西に別れて出掛ける様になつた。

## 七、海員學校の性質並に使命

學校創立當時は府立高等海員養成所と云ふ名稱で、文部大臣の認可は受けたが、扱、合法的に何處へも持つて行き處がないので無理に、明治十四年太政官達第十四號、小學校、幼稚園、圖書館其他各種の學校と云ふものゝ中へ組入れられたから學校の資格は甚だ低いものであつた。

入學資格——學則中に何々卒業と云ふ事がなく船舶職員試験規程に定むる受験の履歴を有するものとあるので、小學校も卒業して居らんでもよいと云ふ様に解せられ其説明には少からず努力した。

其學校で勉強して遞信省の試験を受けて免狀を得れば世界何れの地にでも大船巨舶の船長機關長運轉士機關士として行けるのだと云つても皆本當にしない、是は何とかして學校の資格を合法的に名實相伴ふ様にしなければいかんと文部省方面に運動した。

今の神戸高等商船學校長小關三平君は當時文部省督學官で商船學校規程の改正を擔任して居られ、本校の資格をも考慮せられて、其規程發表に依て公立實業學校となり、校長並に職員若干名は奏任待遇となつた。

そこで資格さへ付けば名稱はどうでも好い様にもあつたが序に改むるがよからうと云ふ事で養成所を改めて學校とした。

國庫補助——本校も公立實業學校となりて文部省から國庫補助金を交付せらるゝ様になつた、勿論學校から請求する丈のものは、とても貰へないが、幾等でも貰つた金で買へるものを買ふ様にし、それでも發動機械其他種々有益な参考品が買へたし、又多少に拘らず國庫補助金が交付さるゝと云ふ事が大に職員生徒の氣分を引立たせる事は出來た。

地方商船學校出身者の入學——本校は元々實地出身者の勉強を主眼として建てられたものであつたが、地方商船學校出身者が受験準備の爲續々這入つて來て何時も總數の三分の一、多き時は半數を超ゆる事もある様になつて最初の主眼以上其使命の範圍が廣くなつた。



**學校の特色**——本校の生徒は實地と云はず、地方商船學校出身と云はず、一度入學すれば實地と學校の區別なく本校獨特の一種の校風になづむ様であつた、それは學校で習つた事を基礎として物を研究的にやる、仕事の撰り嫌をしないなんて云ふ事は既に定評があつた、であるから學校を修業して出て行く時に大概は前の船主に行くと云ふのが多かつた、今日でこそ學校出身者にも大分失業者が出来たが、遂近き以前まで殆んど失業者はなかつた。

そんな風に實地出身者の爲に出来た學校であるのに地方學校出身者が續々這入つて来る、學則の上では學期を設けて居るが入學志願者は何時でも入學を許す、在學中でも遞信省の試験を受ける事を拘束しない、それで實力があつて合格すれば或期間在學したものは學校は之を修業者とする。

斯う云ふ學校であるから、今日失業者救済對策として其製造元を制限すると云ふ問題が起つても本校の教授は只海員の資格が上がる丈で、海員が新規に殖へるのでないから、本校には關係はない、斯う云ふ一種特別の學校であるから一寸人に話しても分らない、然し能く説明して能く諒解すると誰でも成る程面白い學校だ、必要な學校だと始めて云つて呉れる、此説明には生も随分苦心した。

## 八、帆船帆走練習、商船學校

久しく生の頭腦から離れて居た帆船並に帆走練習問題が本校に来てから又擡頭して來たから左に

少し述べて見よう。

**帆船** 船は最初は櫂で動かし、櫂が進歩して櫓になり、櫓が進歩して帆になり、帆になつてから其形が段々と進歩して所謂帆前船になつたものであらう、そして帆前船の利用された期間は可なり永いものであつた様だ。

生等が初めて帆船に乗つた頃は最早蒸氣船全盛の初期で帆前船の末路であつたけれどもまだく末路とは云つても西洋にも日本にも帆前船は澤山あつた。

帆前船の航海は實に愉快だ、實際骨は折れる、又汽船の航海に比して技倆が要る、熟練が要る、だから巧拙が的に現はれる、だから又それ丈勇壯で面白味もある。

**帆船の利** 帆船は石炭なしで走るから經濟的だ、又清潔だ、デッキの上にも衣服は汚れない、デッキに落ちたものを口に入れても不潔でない。月明の夜、滿帆に風を孕まして走る時の詩的な心持は到底帆船に乗つたことのないものゝ味ふことの出来ない處である、希くは罪なうして廢所の月を見んと云つた人がある、併し罪どころか國家經濟の爲に働らきながら而かも廢所の月以上の趣味を常に恣にする海員の果報如何斗りぞや。

帆船に荒天は眞平御免の大禁物ではあるが、科學の進歩は海上の氣象觀測にも大進歩を與へ精巧なる測器も出來又幸に極東地方にありては颱風襲來の時期、進行の方向、風位の變遷等を豫知する



事は年と共に正確を加へ來り既に之を利用して迅速の航海をなしたるの例さへあれば炭油の助を借らず風に依て航海する帆船の復興は決して空想ではないと思ふ。

生は帆船には少からず憧憬を持つて居る、けれども世の中は世智辛くなり、手つ取り早き汽船に壓倒されて年一年に其數を減じ今では補助機關を持たぬ純粹の帆前船と云ふものは少し大形のものとしては殆んど全く跡を絶つた事は誠に惜い、若し金持が理想的の帆前船を作つて呉れたら思ふ存分に世界中を乗り回して見たいとは生の常に妄想する處である。

**帆走練習船** 帆船で練習したものは帆船は勿論汽船にも乗れるが汽船斗りで育つたものは帆船に乗しても役に立たぬ、だから練習船としては帆船が最適當である、けれども夫は幾昔か前の事で、海軍でも既に帆走練習を廢して二十餘年、航洋船としての帆船が殆んど一隻もなくなつて、商船學校卒業者の全部が汽船に乗る世の中に帆走練習船は何としても要らぬ様に思ふが、今まであつたものはまだしもとして、新たに又二隻も新造して堂々四隻の練習船を持つて居るなどは決して誇ではない。

重箱の隅を揚枝でほぢくる様な細かい處まで兎角論難攻撃したがる世人も新聞紙も、どう云ふものか此点に就ては頗る寛大であるのが實に合点が行かぬ。

#### 商船學校

東京に三菱商船學校を作つたのは海上王三菱が時の政府の意を受けて時世の必要に

迫られて出來た事は云ふまでもない、それから船舶職員試験規程が出來て實地出身者採用の道が開けてからは之が勉強の場として海員救濟會に養成所が出來、大阪に中山海士學館、それから府立高等海員學校等が出來、地方商船學校としては鳥羽、函館、弓削位までは海運の發展に伴ふ需要供給を順調に保ち得たかも知れぬが、其後段々と流行の様な風に廣島に山口に佐賀に鹿兒島に富山に島根に、夫から高等商船學校が神戸に、今は全國に高等が二校、地方が十一校商船學校の多き恐らく世界一であらう、商船學校が多いから練習船も多くなる、堂々四隻は亦蓋し世界一ではないか知らん。

それでも卒業者が着々需要に應じて消化されて行くなれば海國日本として誠に結構であるが、今は高級船員の過剩失業者の數は驚く勿れ二千何百人と云ふ多數に上り尙益々増加せんとする傾向を示して居る一方には各商船學校からの巢立者が年々何百人とは由々しき社會問題ではないか、去れば海員協會では同業相救の意味を以て各自贖金して各地に無料宿泊所を設け（普通船員の方は又別に對策を講じて居る）海事協同會では其筋の援助を受けて海員授職部を設けて以て焦眉の急を救ふて居る、けれども是以て窮餘の一策のみ、到底永く續くべきものでない、此時に當り商船學校を廢合調節して以て其濫出を防ぐは誠に當然の措置である。

#### 帆走練習船と商船學校の關係

船舶職員試験規程に横帆装置の帆船云々と云ふ幾昔以前からの



一項が遺つて居るので、東京と神戸は練習船を持つて居るから先づそれで好いとして、十一の地方商船學校には練習船がないから北前筋の船主に頼んで乗して貰ふ、船主は帆船が引合はぬから廢める、其處で學校が練習船を持つて必要が起つて來る、中には使ひ古るしの縦帆船を買つて之に横帆を装置するから重力の中心點が高くなつて甚だしく船の安定が悪くなつたのもあつたと云ふ事である。

其處で過去十數年間に地方商船學校所屬練習船の難破と來たら大變なものであつた、難破の原因が皆一々前記の理由に起因して居るか否かは分らぬが調べれば直に分かる、蓋し當らずと雖も遠からずではあるまいか。

そんな工合で練習船がなければ十一の地方商船學校の存立があぶなくなつて來た處に當局は生等の主張よりも學校の存在に重きを置いてか、試験規程中の陳腐な一項を削除しようともしないで最近に二隻の練習船を新造した。

獨り商船學校斗りではない、全體に我國には學校が多過ぎる様だ、けれども船乗として教育したものを人が餘つたからとて外に持つて行つても甚だ融通性に乏しい、それでも他が手不足で誰でも良いから來て欲しいと云ふ場合なら兎も角も何處に行つても失業者の洪水の時に融通の利かぬ船乗に仕事の得られないのも決して不思議はない。

#### 商船學校と高級船員の失業

歐洲戰亂の當時變態的好景氣に遭遇して全儲に抜け目のない船主は俄かに多數の船を作つて(或は買込んで)海員はあちからもこちらからも引張り帆であつた、其時に海員の報酬俸給の問題に就て船主が少からず惱まされた事は生も知つて居る、そして苦々しく思つた、けれども是れ畢竟船主間の爭奪戰から來るもので、若し船主が設令如何に差支の場合でも他を不義理に暇を取つたものは使はぬと云ふ風にしたら決して彼が如き失態を演ずるには至らなかつたであらう、然るに之を獨り海員の背德行爲とのみ斷ずるは決して公平の判斷ではない。

それから時の政府は一時試験の程度を低下して高級船員を濫造してまで船主の便利を謀つたのに、船主は不景氣になれば船を繋ぎ又は賣却して手を締めて仕舞ふから、餘つて行場がなくて困るのは海員だ。

當時海員の要求に或は不當のものもあつたであらう、併し船主が何十割の利潤を收めて居る時であつたから不當と見られても不當でなかつたのも多分にあつたであらう。

又當時試験程度を低下してまで海員を濫造する必要はなかつたので、要するに船主が安い人間を國費又は人の禪で拵へさして置いて其中から撰り取りしようとしたに過ぎないで、實際は當時でも人は餘つて遊んで居たものはあつた。

極近い例は生自身並に生の知人中にも愈々差支たら乗つて呉れるかと云つて來て、此方からも愈



々の場合は乗ると答へて居たにも拘らず乗らずに済んだ處を見れば、他にもそんなのはあつたに違  
ない、そんな實情であるのに年々何百人づゝの餘剩海員を作る處の十三の商船學校は何としても多  
きに過ると云はなくてはならぬ。

戦後に不景氣の來ると云ふ事は至つて平凡事で必ずしも先見の明あるものにして初めて知るべき  
ものではない、生が會て、今にして商船學校の廢合を行ひ高級船員の養成を調節しなければ失業者  
が殖へて來てどうすることも出來なくなると叫び始めたのは實に一昔前即ち歐洲戰亂終熄後海運界  
がソロノ、不景氣になりかけた時であつた、生の口から斯く叫ぶのを商買響からと思ふ人もあつた  
かも知れぬが決してそうでない、我が高等海員學校は普通船員を高級船員となし、二等運轉士機關  
士を一等運轉士機關士に進め、運轉士機關士を船長機關長に進めるものにして、普通船員の昇進發  
展を助け、高級船員の資格高上に資するに止まり、一も新規に海員を殖やすものでないから商船學  
校の多少と關係はない、故に生の叫ぶ、敢て高等海員學校長としてゝなく、日本海員の一員として  
又日本國民の一員として云ふのみ、此輩黙さば石叫ばんの意氣を以て云ふのみ。

斯かる明々白々の事實を目前に扣へて、而かも十年一日の如く叫び續けて居るにも拘らず中々世  
人の耳を傾けしむる事の出來ないのは、まだく我等の力の足らぬのであらうか、叫び方の拙なる  
に依るであらうか嗚呼。

## 九、二食、徒歩、薄着

前項が餘り理窟つぼかつたから今度は少しアツサリした事を書かう。

二食 三度の食事と云ふ事は何れの職業を問はず日本國中殆んど共通の習慣で、假令其外に季  
節又は作業の種類に依て、茶の子、晝茶、夕茶、夜食等があるにしても普通朝晝晩の三度丈はどう  
しても欠かす事の出來ないものと先天的に頭に泌み込んで居た處が、近來三度は多過ぎる、獨逸は  
三度でも一度はホンの簡單なものだ、日本人は世界中で一番多食だ、だから胃腸病が一番多い、大  
概の人が胃擴張に罹つて居ると否やな談斗り聞かされる。

生は元來食慾は旺盛で、鰻井は二つ、鋤焼は三人前を欠かした事はない、又それを自慢にして居  
た、日露戰役當時、或人が禁酒會長安藤太郎さんに、斯る國家多難の時には三度の食を一度減じて  
二度にしては如何と相談した處が、安藤さんは一言の下に、馬鹿な事を云ふな、腹が減つて戰爭が  
出來るものか、夫よりも年々五六百萬石の米を潰して作る處の酒を廢めよ、飯は三度のものは四度  
にでもして大に食つて大に働かなければならぬと云はれたとか、生は之を聞て實に痛快に感じた。  
併し頭腦は大食に依て遲鈍になり易く、頭腦を鋭敏に働かせようとすれば、どうしても大食をし



ては行かぬだらうとは合點して居たが又一方に食を減じ、或は菜食主義、果食主義の人が多くは顔色蒼白にして體軀瘠瘦なるを見てはどうも食を減する氣になれなかつた、處が海員學校に来てから、直向側に日本禁酒同盟の講師として有名な濱谷理吉郎翁が住んで居て、互に往來して居る内に翁は多年の二食實行者で而かも大の運動家で赭顏堅肉、元氣潑刺、老て益々盛なるを見て居る時に、下之關梅光女學院長廣津藤吉君が見えて濱谷翁と落合ひ、談は二食の事に及んだ處が、廣津院長亦久しき以前からの二食實行者であると聞き、而かも同院長が植物採集の爲に熱心に山野を跋涉して居られた事は前より知つて居た、當時海員學校の航海術の先生で海軍大尉青木秀利君が二食の良い事を久しく聞て居ながらまだ實行しなかつたと云ふので其時から青木君と共に二食の實行者となつた、處が實に工合が好い、それから段々聞くと二食が敢て新らしい事ではなく二食の禮讀者で體軀の強健な人は澤山あつた。

徒歩——濱谷翁と云ひ廣津院長と云ひ、揃も揃つて健脚の登山家で、濱谷翁は時々京都、六甲、比叡山等に遠足登攀を試み又人にも勧め、或人は翁から徒歩を勧められて夫婦共に規則正しく毎朝徒歩運動を初めてから健康が著しく増進して終に多年祈り求めて居た玉の如き男子を授けられて其名を徒歩太郎と付けたと云ふ話さへある。

生も從來から好んで徒歩運動を實行して居たが此時から更に主義として、急用でない限り又人に

迷惑の掛らぬ限り徒歩を實行して居る。

薄着——濱谷翁にはモ一つ羨やましい事がある、翁は大變な薄着主義でシャツ下のメリヤスは夏冬通して薄手のもの、服は夏服乃至あい服、外套は持つては居るが着た事なし、翁の講演中に自分は二十年前に作った外套を持つて居る、それがまだ新らしい、如何にすれば二十年間も新らしくして置かれるか、其方法を御傳授申そう、夫は着ないで仕舞つて置く事と云つて笑はした事が度々ある、處が此薄着斗りは實に結構で羨やましいが生には多年海上生活の習慣からどうしても出来ない、其處で生も負け惜しみに、夏丈は出來ると云つて時々人を笑はせる。

## 十、海員學校の十一年

學校の經營——大正九年三月赴任した時は前年度の決算は不足額を原田家からの追寄附に依て補はれ、其年の分も不足額は原田家から寄附して貰ふ事に談が付いて居た、そして次の年も、次の次の年も結局そんな風にして行く事に府の方ではチャンと極め込んで居る様であり原田家にも略ぼ諒解はある様であつたが、何にしても海運界は段々と不況になり出して來たから其度毎に餘り好い顔をしなない。



元來府立の學校で、寄附當時は兎も角もとして年々歳々足らぬ處は寄附者に出させると云ふのが抑々間違つて居る、是はどうしても寄附を仰がずにやらなくてはならぬと我々同人は必至協力して經費の節約を行ひ、一方には生徒の吸収に力め幸に收支一杯々々にまで漕ぎ付けて暫らくは追寄附を仰がずにやつて行つた、處が會て好況時代に低下した試験程度を遞信省は最早其必要なしとして舊に復し、或科目は却つて低下前よりも六かしくなつたから之に適應して行く爲には職員を増加しなければならぬ、そうなるに豫算に不足を生ずる、原田家でも中々出さうと云はぬ、文部省に經常費補助の運動もしたが甘く行かぬ。

其事情を我が海運界の事情に就ては政府側にも民間側にも能く通曉して居らるゝ内田嘉吉君に話した處が、府が相當の理由の下にどうしても不足補助が出来ないと云ふ事になれば又他に考ふべき道もあらうとて原田社長とも懇談した上に、時の大阪府知事中山望君に面談して呉れた結果、府立の學校であるから足らぬ處は府から補助するが當然と云ふ事になり、示來年々府の補助を受け、學校側では極力節約しても尙補助額の増加するには生も少からず頭を痛めた。

紀念會、遠足會——生が赴任して來た時は丁度一年立つた時で其年の五月三日に第一週年紀念式を擧げた、其時には來賓として大阪府學務課からも原田汽船會社からも臨場せられて中々盛大であつた。



(圓内)  
校旗受領式に於ける校長著者と生徒總代甲種船長科高島助次郎君

昭和四年五月三日高等海員學校創立十週年紀念式來賓並に職員生徒

前列銅像眞下 著者 夫より左へ 原田汽船津村君  
黒河内君 窪田君 釜谷君 隅田君 石渡君 川北君 須田君  
著者より右へ 戸井田君 酒井君 田所君 藤井君 守田君  
長谷川君 佐治君 其他在校生徒諸君

昭和四年秋季遠足會甲山神呪寺門前に於て  
中央著者 夫より右へ 黒河内君 佐治君  
左へ 戸井田君 酒井君 藤井君 窪田君  
隅田君 川北君 田所君 守田君  
前列選手諸君 其他在校生徒諸君



其後第五週年と十週年に記念式を擧げ、府井に原田汽船會社からも來賓として臨場して呉れた、式後食堂で簡単な會食をするの例になつて居た其時には自作の裝飾や餘興があり、生徒が大人である丈には黒人はだしのものもあつた。

或時夜間、生は學校の一室にあつてソロ／＼寢に就かうとして居ると婦人の聲がする、而かも相手が男で女は將に悲鳴でも上げ兼間じき様子にはは只事ならずと潜かに松山舎監の處に行つて話すと舎監は笑つて、あれは紀念日の餘興の稽古だと云つたことがあつた。

それから春秋二期に遠足をすることゝなり春の分は紀念日に、秋の分は体育日若くは其前後に施した。

生は船に居る時は所謂蒲鉾主義で實に阪神附近の名所を些とも知らぬ、京都も汽車で通つた丈であつたが、春秋の學校遠足の御蔭で京都、奈良、嵐山、琵琶湖、比叡山、六甲、有馬、廣田山等に行き大分話せる様になつた。

**茶話會、校友會、海燈**——本校では先生と生徒又は生徒相互間の親睦を謀る爲に時々茶話會を開いた、其時は互に隔意なく茶を飲みながら話す、是にも簡単な餘興の出る事もあつた。

本校の生徒は一種特別で、二等運轉士、二等機關士で修業して出たものが船に乗つて海上の實歴が付くと一等運轉士一等機關士の生徒となつて這入つて來る、一運一機で出たものが又船長機長の



生徒となつて這入つて來たものも澤山あると云ふ工合で茶話會の時など他の學校で見られぬ回顧談などもあつた。

それから修業者の數も段々と増加して來て大正十四年三月校友會を組織して雜誌海燈を發行することになつた。

此貧弱なる雜誌海燈が江湖名士の同情眷顧に依て、容易に得られない諸君の玉稿を載する事が出來て其内容には聊か誇るに足るべきものがある。

**禁酒主義** 生の禁酒主義は今可なり廣く知られて來たから本校の生徒の如き大人斗りの中へそうまで八釜しく云はずとも亂に及ぶ様な事はないと初めから安心して居た、けれども不斷酒に就て餘り世話の焼けることはなかつたから、紀念會、遠足會其他共に會食する時など酒を用ふる事もあつたが皆生の主義を知つて居るから酔ふまで飲むと云ふ事は全くなかつた、そして夫が段々と少なくなつて仕舞には全く酒を用ひない様になつた事は誠に嬉しかつた。

**校長會、金曜會、海員協會と酒** 校長會は大阪府市の中等學校長の會で、會合の度毎に生は力めて出席はしたが何しろ一種特別の學校で他の學校と共通の問題がないから、初めから仕舞まで殆んど無言で通したことは珍しくなかつた、會食の時は酒が出る、或時其席上で、我々が各自銘々自宅に於いて又は友人同士で任意に會食する場合は別としても今日の如く校長會の名の下に集まる時

は是は公會である、各校長が公會の席上で酒を用ふると云ふ事を生徒が聞たら果して何と思ふであらう、今後公會に準すべき斯かる會合には酒を用ひない事にしたいと述べたが別に反對意見も出ず、只個人的に二三賛成の意を洩らした人はあつたが相變らず酒は廢まなかつた。

校長會斗りでなく、生徒の思想善導の方法として知事から諮問を受けた時にも述べたが矢張別に反響はなかつたらしい。

金曜會は大阪に於ける商船學校の同窓會であつて約三ヶ月位毎に又は何か特別の場合に適宜な場所に會合して互に親睦を謀ると云ふので、校長會の様な教育者の集團とは違ふから、生も之に對して禁酒は叫ばなかつた、併し座談的には何時も例に依て例の如く禁酒を説いて居た、そして皆生の主義を知つて居るから無理に飲めとく、五月蠅く益をつき付けらるゝ事もなく極めて愉快な會であつた、只時には、何かやれくくと云はれて、立つて自作の禁酒の歌を歌つたこと位はあつた、其禁酒の歌と云ふのは斯んなのであつた。

#### 軍歌勇敢なる水兵の譜

- 一、粒々辛苦の功に依る、我が日本の本の特産の、米は我等の命なり、などで粗末になるものぞ、米をつぶして酒となし、其酒飲んで酔まはる、友よ今より酒をやめ、清きまじめの人となれ。
- 二、酒が藥になると云ふ、其たわ言にだまされな、瘋癲白痴もとは皆、酒飲む親の遺傳ぞや、喧嘩



口論不品行、元は僅の酒からぞ、友よ今より酒をやめ、清くまじめに世を渡れ。

三、花は櫻木人は武士、朋は誠が第一ぞ、三々九度や神祭り、月雪花の四季の景、酒はなくともうるわしき、我が日の本を今日よりは、絶対禁酒の國となせ、帝國萬歳萬々歳。

#### 軍歌守るも攻むるもの譜

一、初めに人が酒を飲み、中頃酒が酒を飲み、終に酒が人を飲む、あな恐ろしや酒の害、あなすさまじや酒の毒、分りしならば禁酒せよ。

二、昔は酒を百薬の、長とて人が用ひしも、人智は開け衛生の、進みし今日かくのごと、馬鹿げたたわ言眞に受けて、信ずるものは世にあらじ。

#### ジョージマーチの譜

一、次郎さんも太郎さんも皆おやめ、酒飲んぢやからだが悪くなる、酒飲んぢや仕事が遅くなる、酒飲んぢや何でもだしめ、やーめやーめ酒をやめ、やーめやーめ酒をやめ、まじめに愉快に世を渡れ、世間の模範となーれ。

二、次郎さんも太郎さんも皆おいで、禁酒運動するから皆おいで、我等の主張は我國を、絶対禁酒のくーに、やーれやーれ何處までも、やーれやーれ何處までも、酒飲んでくだ巻いて貧乏する、酔つばらいのなくなるまーで。

海員協會と酒 生は協會とは切つても切れぬ間柄であるから海員學校に居ても何かの會合毎に殆んどかゝらず神戸まで出掛けて行つた、そして機會ある毎に禁酒主義を鼓吹した。

禁酒主義は今日各方面に相當優勢に唱へられて今は全船禁酒を實行せるもの既に二十幾艘に及び、又別に海員組合有志に依て海上禁酒會が組織せらるゝの形勢に鑑み、會の中にあつて會と經歷を同ふして來た酒舗が廢せられた、只それ丈でも禁酒主義者の大に意を強ふする處である。

教化委員會 大正十二年十二月大阪市長より國民精神作興の詔勅の御主意に基づき教化委員會が組織せられ、生も其委員に選任せられ、學校が築港にある關係上、港區において數回其委員會に出席した。

其第一回會合の時に、午後正六時(時間勵行)として築港小學校へ集合すべくと通知が來た、生は正六時に行つて見ると誰も居ない、主催者も居ない、それから主催者は間もなく來た、そして六時十五分に一人來た、示後十分乃至十五分置にポツリ／＼來て其連中は大方知つた顔であるから互に世間話に花が咲くけれども生は一人も知つた人がないから無言だ、七時になつても七時半になつても始まらない、稍く開會したのが七時四十五分であつた。

世間話の間は中々賑つて居たが、イザ開會となつたら皆沈黙した、暫らく立つても發言するものがないので、生は立つて坐長に議題を尋ねたら、今夜は初めての事であるから、詔勅の御主意に基



き教化運動に就て皆さんの御心付の發言を求めて夫に依て議題を作り漸次纏めて具體化して行く様にしたいと云ふ様な事であつたと記憶する、けれども誰も發言しないで相變らず沈黙が続くから、生は發言して(詳しい事は省略して)大體左の様な事を陳べた。

一、禁酒を奨励すべし、關東震災當時金側時計を提供して握飯一箇と交換を求めたが得られなかつたとは當時の代表的な一つの實話である、その大切な飯の原料が酒の爲に年々五六百萬石づゝ潰されて、そして酒に依て金銭が浪費せられ、風俗が紊され、健康が害され、どの方面から見ても善い事は一つもない、詔勅の御主意を奉體する教化運動の第一着に先づ市民一般に禁酒を奨励すべし。

二、淫祠を廢すべし、神佛祭祠、祖先崇拜は須らく誠意誠心を以てすべきである、若し面白半分の調子に乗つて、運動でもなく、體育でもなく、只矢鱈に不謹慎な、不衛生な、不經濟な所謂お祭り騒ぎ即ち、可憐なる就學兒童の稚子行列、藝者までが加はる祭典行列は神威の冒瀆であるから廢止すべし。

三、公娼を廢止すべし、生活に窮したからとて貞操を弼ぐが如き不善の業をなすは決して宜しき事でない、然るに國家が之を認めて營業させ、帝國政府を支持する財源の中に是等不淨分子より取立てたものが少しでも這入つて居ることは甚だ潔くないから、先づ公娼を廢止し同時に之と

類似の醜業者を公人私人共に宴會其他多人數集合の場所に侍らしめざる事。

四、時間を尊重すべし、今晚の如き、正六時(時間勵行)の招集に開會は七時四十五分などは甚だしき失體である、其中の一人二人は據ない、止むを得ない用事があつても云へようが揃も揃つて二時間近くの遅刻は今後嚴格に更めなければなるまい。

等であつた、其晩の集會者は四十名位であつたらう、そして生の發議に對して賛成もなければ反對もなく大多數は沈黙で、其内の一人二人から、議論としては立派だが實現は六かしからう、多年の習慣だから今俄かに更められまいと云ふのがあつた、仕舞に一人斯んなのがあつた、天神祭、住吉祭其他の祭典や各遊廓の演舞等は大阪の繁榮を助くる事多大である、之に反對する運動は大阪を衰微せしむるものであるから絶対に反對だと、併し何等決する處なくして閉會し、其後二三回會合があつたが其度毎に前會より持越の議題として生の提案が議せられ、其度毎に生は辯論頗る力めたけれども何等反響もなく遺憾ながら龍頭蛇尾に終つた。

**學校の美風** 學校が原田汽船先代の同情と當代社長の美擧に依て出來たので職員生徒の頭には常にそれが宿つて居るからであらう、曾て物云ひが起らぬ、生が赴任して當分は隣りの築港警察署から、船の人は氣が荒いと聞て居る、そう云ふ人達の集合だから自然何か面倒な事でもあつた時は一寸知らして呉れ、ば直に來るからと度々云つて來て呉れたが遂喧嘩して御厄介になつた事もなか



つた。

#### 校旗受領式

職員間、職員生徒間、生徒相互間の美はしい現はれは一々枚舉に違はないが、茲に代表的一事を擧るならば、本校は常に出来る丈質素節約を守り其結果、未だ校旗を作らず、遠足の時など只校名を記した白旗を押立て、歩るものであるが、先頃、行幸奉迎の砌、各校皆立派な校旗を立て、御通路に整列した時に本校のが著しく貧弱に見えた處から愛校心に燃ゆる生徒達は遂に各自贖金して校旗を作り學校に寄附する事となつた、其處は大人で、父兄の世話にならず、自ら働いた學資で來て居る生徒達であるから、やるとなつたら思切つてやる、學校では氣の毒なやら、面目ないやら、併し嬉しき喜ばしさに満たされて盛んなる校旗受領式を擧げた。

#### 隱退

昭和六年三月の或日府學務部長より呼ばれて出頃した處、教育刷新の意味において年長順に隱退して貰ふ事になつたから自發的に辭表を出して呉れとの事であつた、其間言外に何等職務上忌はしき事でもあつての故ではないかと思はるゝ様な様子もなし、殊に年齢と云はれては返す言葉もなく、謹んで御受した、但後任校長の推薦丈は御委せを願たいと云つた處が後補者はハッキリは言はぬが其言葉振りから察するに知事の手元に天降り後補者があるらしいので、是はウツカリ辭表は出せぬぞと思つて、我が推薦者を後任校長にすることを條件に辭表を出しましょうと云つた、部長はそれは誰かと云ふから、黒河内現教頭だと答へたら、適任であるかと云ふから、無論の事、

不適任者は推薦致しませぬ、我校は一種特別の學校であるから誰が來ても甘く行くとは限りませぬ、黒河内君は創立以來の教頭で學校の事情、生徒の氣受、取扱振、職員間の折合等總て此人を措て外に適任者は恐らくありませんまいと云つたら、部長は職員履歴綴を取寄せて頻りに見入つて居たが、是でもかと云はぬ斗りの句調で黒河内君は機關部出身ではないか、機關部出身で校長はどうだらうと云ふから、然り機關部出身少しも差支なし、現に東京高等商船學校の島谷校長も機關部出身であると答へたら、部長暫らくして何れ其内何分の通知あるまで引取つて居つて呉れとの事で其日は別れた、其後一週間程して、部長から御希望に添ふ様にするから辭表を出す様にと云ふて來たから辭表を出した。

そして三十一日の官報で生の免官と黒河内君の任官が發表された、引繼は辭令が來てからと云ふのであつたが中々來ぬので四月九日に府の指圖に依り引繼をした、そして職員諸氏からと生徒一同からと別々に送別會を催され、過分の讃辭を受けて惜しき海員學校を去つた。

## 十一、西宮から神戸へ

生は最初單身赴任して學校内に起臥したが家庭を西の宮に遷して後は西の宮から通つた、家庭か



らは娘が二人神戸女學院に通ふて居たが生が大阪に用がなくなつてからは家を西の宮に置く必要がなくなつたから早速神戸に引遷り今の寓居に落付いた。

## 第七 處世篇

### 一、清貧と濁貧

四百四病の其中で貧の病ほど辛いものはないと昔の人も云つた、實にそれに違ないと思ふ、併し誰しも好んで貧乏になるものはないが、何事も思ふ様にならぬが浮世の習で、兎角貧乏には陥り易い、世俗に、有りそうに見えて、無いが金で、無さそうに見えて有るのが借金だと云ふ、眞にそうかも知れぬ、之斗りは何と思つても仕方がないが、茲に同じ貧乏するにしても清貧でありたい、處が世間に清貧は少なくて濁貧が多い様に見える、其意味に於て生は同じ貧でも清貧に近い方であらうと自ら喜び且誇として居る。

長崎時代に同僚間に貧連があつて生が何時も云つた、同じ貧でも貧が違ふ、僕は清貧で君等は濁貧だ、若しそうでないと云ふなら最近半年か一年の間に得た處の收入から支拂の大略を云つて見給へと云ふと皆閉口した。

生は明治十六年十二月初めて帆船二等運轉士の月給貳拾五圓を初筆として爾來五十年殆んど休み



なしに月給生活を續けて來た、其間に收受したる金額も勘定すれば大體は分る、敢て莫大として驚くには足らぬにしても若し之を上手に收支したならば敢て金持とはなり得ずとも所謂貧連の仲間からは脱し得たかも知れぬ、其點において決して上手な處世家ではなかつた、だまされた事もある、人の借金を背負い込んだこともある、良い積りでやつた事が思はざる災難で水泡に歸した事もある、人に話して笑はれる様な事は澤山ある、けれども其多くは人から氣の毒がられ、同情せらるゝ方であつた、中には馬鹿々々しがられる位まではあつたかも知れぬが濁貧とまでには行かなかつたと自から信じて居る。

**富貴必ずしも幸福ならず** とは福澤先生の言であつて、生は曾て一度讀んで能く感銘した、貧苦か不幸であるならば其反對に富貴は幸福でなければならぬのに事實は中々そうでない。

カーネギー翁は富を作らんと欲せば須らく先づ富の使用法を講ぜよと云ひ、富を子孫に遺すは慘酷の極であると云つた、大西郷南洲翁は子孫の爲に美田を買はずと云ひ、疏食を飯ひ水を飲み脰を曲げて之を枕とす、樂亦其中にありと云ひ、貧にして俵はず富んで驕らざれば如何との間に、貧にして樂しみ、富んで禮を好むものには若かずと孔子は曰はれ、狐は穴あり空の鳥は巢あり去れど人の子は枕する處なしと主耶蘇は曰はれた、風流畢竟貧家にありと云ひ、聖人君子には貧富の別など眼中にない、金が敵の世の中と云ひ、富豪の子弟に不良を生じ、さまざまの不幸に陥るものゝ實例

は枚擧に遑はない。

故に生は自ら富貴を羨まない斗りでなく我子女にも羨むべからざる事を訓へて居る、と云つても富んで禮を好むものを心から尊敬し、敢て富豪を詛ふものではない。

去ればカーネギー翁の言の如く、富者は其子弟に富の使用法を教へて後に非ざれば富を讓るべきでないと堅く信ずる、世の風俗壞亂其他の不祥事は多く富の使用法を知らぬものが富を攫み或は富を得んと企らむに因て起る、不義の富貴は浮べる雲、仁義忠孝の道さへ立たば物相飯の切米も百萬石に優ると光秀の母は訓へて居る、實に慎むべきは徒らに虚榮に憧がるゝ野心である。

## 一、社 交

**禁酒と社交** 酒を飲まなくても社交上少しも差支ない、社交上止むを得ないからと云ふのは左黨の口實に過ぎない、生は之を立證する爲に成るべく多分の金の掛らぬ限り、又それが花柳界又は之に類する場所でない限り宴會其他の社交には力めて出席する。

只併し生の見る社交と世の所謂社交とは異なる處があるかも知れぬ、それから酒客には假令自分が飲まなくても飲むが如くに見せなければ飲む人の興を醒ますからとて、徳利に目印を附して其中



に昆布湯又は番茶などを入れて酒盃の献酬に跋を合せるなど能く見受ける處であるが、實に無意味の甚だしきもので、社交は斯くまでして一方から他方の機嫌氣味を取らなければならぬものではない、生は斷じて斯ることはしない、又しなくても差支ない、故に人のする處を見ても快く思はぬ。

**献酬の代りに握手**　長崎時代に本社から社長が見えると或程度までの所員（長崎には本社辭令と云ふ言葉があつた）に晚餐の御馳走がある、無論御酒が出る、所員は交る／＼社長の面前に御盃頂戴に行く、生にも行け／＼と云ふ、生も無論行く、すると列席の視線は生に集まる、生は社長に御招の御禮を述べる、社長は話はするが盃は呉れない、或時は握手して献酬に代へた事もある、それでも尊長に對する禮は少しも欠けない。

畏き邊りでも、御盃は賜つても御酒は頂かずに濟むとか承つて居る、故に飲まぬと云ふものに無理に飲まさうとするなど、實に友誼を没却し又紳士間の禮を欠くの甚だしきものである、生は斯んな主義の下に立脚して居る、此主義は決して曲げない、何處までも主張する又論議もする、けれども敢て理窟一點張りで行かうと云ふものではない。

**淨瑠璃好き**　生は元來酒が好きで書生時代から繩暖簾でコップ酒を煽り船に乗つて多少小遣が豊富になつて來てからは時々茶屋酒も飲み、又時には藝者の酌で飲んだ事もある、けれども夫は何時も自發的でなく、人に誘はれて據なくであつた、故に藝者が三味を引て唄ひ始めると閉口して

透さへあれば逃げ出した、そんな時でも折角藝者が來たのだから、責めては好きな淨瑠璃でも聞てやらうと思つて一段語れと云つても大概のゝが出来ない、偶たま出来るのがあつて語り出すと一座の飲み連が揃も揃つて止める／＼と父せつ返すのが例であつた。

なぜ生がそんな風に淨瑠璃が好きになつたかと云ふと之には古い由來がある。

生の父は眞に田舎の好々爺で道樂も嗜好も何もなかつた、只酒が好きで、併し多量には吞まず毎晩少量を獨酌で飲むのが無上の樂であつた、又其外に年一回位近村の喉自慢を呼んで隣人と共に樂んだ、其頃の土地の習慣として、淨瑠璃が濟んだ跡で必ず酒が出る、其席上の話を生は子供心に聞て覺えて居る、其太夫連が異口同音に、子弟に淨瑠璃を習はせれば人間が眞面目になる、酒の好きなものも飲まなくなる、酒を飲んでは淨瑠璃が語れないから、少し出來て來て面白くなると全く酒が止まる、酒色と淨瑠璃とは敵同士だ、淨瑠璃が少し語れる様になると惡遊びをしなくなる、誰もそうだ、彼もそうだと實例を擧げての淨瑠璃禮讚談を屢々聞かされた、そして自分が後年酒席で淨瑠璃を所望して藝者から嫌はれ飲連から妨害された度毎に子供の時に聞た田舎太夫の言にも一部の眞理があると思つた。

そんな關係で生は我々同人間にありては割合に淨瑠璃を知つて居る方である、そして世話物よりは時代物が好きだ、菅原寺小屋、安達原袖萩祭文、一の谷陣屋、三代記三浦別れ、蝶花形小阪部館、



玉藻前道春館、二十四孝十種香、太功記尼ヶ崎、仙臺萩正岡忠義などが最好きだ。

そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中、處存の體たてを堅めさす誠に國の礎ぞや……………三千  
世界に子を持つた親の心は皆一つ、子の可愛さに毒なもの食ふたと云つて叱るのに、毒と見えたら  
試みて死んで呉れいと云ふ様な、剛愎非道な母親が又と一人あるものか、武士の胤に生れたは、果  
報か、因果か、いぢらしや、死ぬるを忠義と云ふ事は何時の世からの習はせぞ。と云ふ邊になると  
全く我もなく人もなく只モウ自分自親正岡になり濟まして側から話しかけられても返事もしないで  
笑はれたことも屢々ある。

但しそれは上手な淨瑠璃の事で、下手なのと來ては閉口だ、淨瑠璃の下手なのを無遠慮にやられ  
ると隣の糖味噌まで味が變ると云つた位だ、其處へ行くと謡曲は結構だ、少々お下手でも我慢が出  
來る(謡曲家からお叱りを受けるかも知れぬが)生は謡曲と淨瑠璃を、書と畫に比較して居る、書は  
少々不出來でも字が間違つてさへ居なければ誰が讀んでも讀める、けれども畫の下手なのになると  
虎を畫いて猫に類するの類で、畫は下手でも聞人に不快の感を與へないが、淨瑠璃の下手なのと來  
たら、浪花節だか、新内だか、御詠歌だか、實際聞人をマゴ付かせる。

幫間と問答——今日眞面目を以て生命として居る生が淨瑠璃の好きな譯は前記の様な關係である  
が、又生が全く無粹無風流の石部金吉であるかと云ふと必ずしもそう斗りでもない、生は無作法な

亂痴氣騒ぎは嫌だが談話は好きだ、朝顔日記の岩代ではないが身の上談も亦一興と云ふ調子で酒席  
でも話は能くした、或時に幫間、藝妓並に同遊と斯んな問答をした事がある。

忠臣藏の一段目は何だらうと云ふ問題が出て一座誰も知つたものがなかつた處が、幫間は鼻高々  
とそれは鶴ヶ岡の兜改めだと云つた、そこで生が誰の兜で、何の爲に改めるか知つて居るかと思つた  
ら夫は幫間殿知らなかつた、そして幫間殿は生も知るまいと思つて頻りに逆襲して來るので、それ  
は新田義貞の兜だ、高野師直の家來が義貞の首を取つて鶴ヶ岡の足利の御殿へ持つて來たが偽首で  
はないかと云ふ疑問が起つた、處で義貞は旗擧げの時に朝廷から賜はつたらんじやたい蘭奢侍の香を常に兜に焚  
き込めて居たと云ふから果して義貞のものなら其匂がするに違ない、とは云つたものゝ鎌倉中に蘭  
奢侍の匂を知つたものがない、處が鹽谷判官の奥方顔世御前が獨り會て禁裏へ官女に上がつて居て  
其匂を知つて居ると云ふ處から兜改めの役目が當つたのだと云つたら幫間閉口して今度は幫間の方  
から、いろはを逆まに讀めるかと云出して皆閉口した、處で生は子供の時能くそんな事をやつた事が  
頭腦に遺つて居て俺がやつて見せると云つて「すせもひゑ、しみめゆきさあ、てえこふけまや、くお  
のゐらむら、なねつそれたよ、かわをるぬりち、とへほにはろい」とやつて満場の喝采を得た、次  
は生が是も子供の時分にやつて覚え込んで居る事を持ち出した、子丑寅卯の十二支を逆まに云つて  
見よと云つたら一座皆閉口した、幫間は發題者御自身も是は覺束ないのではないかと云ふから馬鹿



云へ、自分に出来ない事を出すものかとして「亥戌酉申未午巳辰卯寅丑子」とやつて連戦連勝を博したことがあつた。

皆日本人で一座哄笑——生は自ら社交下手、談話下手な事を承知して居るから、出来る限り禮を失せぬ範圍に於いて人の笑ふ様なオドケも云ひ、人のオドケにも興味を持つ事に力めた、中には斯んなのがあつた、是等は生のよとしては秀逸かも知れぬ。

或る年の暮、上海碇泊中二三の友人と共に一英國人の家庭集會に參列した、其處は主もに支那青年の爲に催さるゝ集會だそうだが無論日本人も歓迎すると云ふ事であつた、多數は支那人であつたが日本人も西洋人も居つた。

集會は教會と同じ様に、讚美歌(音譜が同じで英語、支那語、日本語隨意であつた)聖書朗讀、祈禱、獎勵の説教と云ふ順序で、言葉は大部分英語で時々支那語も使はれた、支那人の中に英語を話すのも居れば、終始支那語で押通すのも居つた。

集會の後に茶菓が出て懇談に移つた、主人なる英國人は可なり久しく支那には居つたそうだが日本の事情は皆目知らないらしかつた、其人は日本人を馬鹿にして居るのか又は買ひかぶつて居るのか分らぬが、東洋に於ける汽船の高級船員は西洋人か日本人で、下級船員は支那人か黒ん坊だと思ひ込んで居て日本人の下級船員と云ふ事は全く考へて居ないらしかつた、其處で生を知人が其人に

紹介して呉れて生との會話の中に斯んなのがあつた。

貴下は船内で日曜日に聖書の講議や獎勵の説教をなさるそうだが、それは支那語で話すかと云ふから、イーエ私は支那語が能く話せませんと云つたら、英語かと云ふから、又イーエと答へたら、然らば何國の言葉で話すかと云ふから、日本語でと答へたら、少し驚いた様な顔付で、貴船々員は日本語が分りますかと云ふから、無論分りますと答へたら、夫は感心だと云ふ様な顔付で、主もに何國人ですかと云ふから、皆日本人ですと答へたら、今まで耳を澄まして此問答を聞いて居た一坐は呆氣に取られて哄笑した。

### 三、實 行 第 一

無理を避けて無理に備ふ——世の中の總てがそうであらうが、殊に我々海員にありては、食事時が來たからとて食事の出来ない事や、寝る時が來たからとて寝る事の出来ない事は年中引切りなしにある、濡れた着物を着て居ては衛生上宜しくないからとて一々取替へて居ては職務を全ふする事は出来ない、或時は一晝夜も二晝夜も又それ以上も不眠不休で食事もろくに出来ないで、腹は極度に減る、着物は肌衣まで濡れても着替る事は出来ないなど衛生上からは如何に好くないか分らぬ、



而かも亦之に堪へなければならぬ場合は決して少なくない、斯んな場合に我々は忽ち閉口しないで、健康にも頭脳にも無理の利く丈の餘裕を持つて居る必要がある。

それには生が多年の經驗に依れば常に無益に精力を消耗しないで、食事の時や就床の時に空しく雑談其他に時を遷したり、或は暴飲暴食したりしないで常に其餘裕を蓄へる事が必要である、それには又相當に思慮と訓練が必要である、もしそれを欠いて思慮も拂はず、訓練もせずして徒らに只消極的に大事斗り取つて居ては、日蔭の桃の木見た様に忽ち青ざめて、萎れかへつて仕舞ふ。

去れば自家平生の働が丁度運動に適すれば好し、若し運動に過るならば出来る丈休養を取る事が必要である、又働が主にも思考や文筆のみであるならば適宜に運動する事も必要である、運動の方法は各自の嗜好に委するより外はないが、實行の出来易い方法を選びそして實行しなければ駄目だ、生の運動は徒歩である、伴があればあつて好し、なければ一人でも好し、少し過ると思つたら止める事も、又もう少しやらうと思へばそれも自由、靴の裏は少し減るが外に金は掛からぬ、此理想的運動を生に教へて呉れたのは前にも書いた濱谷理吉郎君であつた。

斯んな風にして必要な場合に無理の利く様に日頃其餘裕を蓄ふる爲に無駄な無理を避け、無駄に精力を消耗しないと云ふのも生の處世法の一つである。

時間の尊重——光陰は矢の如く、一度去りては又還らず、一寸の光陰輕んずべからず。

時は金であり、働であり、生命であるから時間を尊重せよとは誰も知つて居り、誰も云ふ、けれども實行の段になると中々誰でもと云ふ譯に行かぬ、偶たま何かゞ時間通りに行くと、感心だ、エライと賞める、何もニライでもなく感心でもない、當り前の事だけれども世間の水準線が低いから當り前の事がエライ、感心だと云はれるのであると思ふと情ない、併し之が非常に六つかしい學問か、智識の要る事か又は金の要る事であれば到底企圖しても及ばぬから、何と云はれても諦らめるより外はないが、時間の勵行は心掛次第で誰でも出来る、何も六つかしい事ではない、何時も汽車に乗る時の心持で居れば好い。

時が金であるならば約束を違へて人を待たせるのは人に金を損さしたと同じだ、更に深刻に云へば人の金を奪つたと同じだとも云へぬ事はない、金を無駄に費消すれば貧乏する、時を無駄に費消するも亦同じだ、我々はモット／＼時を尊重し、勵行し、又利用するものとなりたものである。

#### 四、主義の潔癖

人毎に一つの癖はあるものを、我にはゆるせ敷島の道、とやら云ふ歌を聞いたこともあり、なくて七癖と云ふ事も聞いた、癖と云ふものは、ないと云つても七つ位はあるとせられて居り、歌人は



敷島の道を癖と謙遜して以て歌道に没頭したなど如何にも上品である、潔癖なども癖としては上品な方ではあらうが、兎に角、癖と云ふ以上は萬人の見て以て善しとする處を尙ほ洗つてもく不潔の様  
の様に思ひ、消毒してもく尙ほ黴菌の居る様な氣のするのを云ふのであらうから、主義にも餘り熱心になると、善く云へば主義に忠實とか熱心とか云へるかも知れぬが又一方から所謂潔癖となるかも知れぬ、そうなつて來ると生なども良や潔癖者と云はれる方かも知れぬ、一例を擧げば。

#### 酒呑みパイラー

楊子江上流では暗夜狹隘の水路に差掛る時には一時假泊して天明を俟つ事にして居た、生は該パイラーに、その碇泊中には差支ないが、航走中は呑むと常に云つた、そこで生に隠れて呑む、そして其爲ではないかも知れぬが船の取扱がどうも荒つぽい。

それから楊子江は常に濁流滾々として土砂を流し、船で錨を投ずると激流の爲に錨の下が堀れて其上に土砂がかぶさつて、永く置くと錨が埋つて仕舞つて、上げようとしても上がつて來ない、それ故に碇泊が永くなると三日乃至四日に一度は錨を上げて見る事になつて居る、三菱特約のT水先は何事にも細心な注意家で、其人は漢口、大冶では三日目には必ず錨を上げて見るから蒸氣の用意をして呉れと云つて來る、或航海に前記呑助パイラーが生の船に乗つた、そして漢口で多數の船が輻輳して碇泊が永くなつて三日目になつても云つて來ないから此方から注意したら、三日目ではま

だ必要はないと云ふ、四日目になつてもまだ早いと云つてやらないから五日目には朝から蒸氣を上げて生は職權を以てやれと命じた、そして若しやらぬなら水先を斷つて船長自らやるがどうだと云つたら、稍く不承く、そんならやらう、スチムアップブリースと云ふから、云ふにや及ぶ、モウ疾くより上がつて居る、早くやれと云つた、それからやり初めた處が錨が深く埋り込んで仕舞つて中々上がつて來ない、サア奴さん氣々揉み出した、錨鎖を延ばしたり縮めたり、主機を全速で前進したり後退したりするので、遂に錨孔を破損するか、錨鎖を切るかは免がれないと思つたから、そんな荒つぽい事をしなければ上がらぬのなら、俺の預かつた船が大事だ、モウ止めて呉れ、此錨一挺捨て、豫備錨を使用するから航海には差支ない、そして本社へ有の儘を報告すると云つたら、流石豪腹の酒呑童子も閉口して終にあやまつて今一度やらして呉れと云ふから、やらした、そして一度では行かなかつたが二度目か三度目に稍く上がった。

探錨作業はそれで無事に濟んだが酒を呑むこと、船を荒つぽく取扱ふことは相變らずやまない、生は該パイラーに關して少からず心を痛めた、勿論自分の我慢で濟む事なら成るべく人の過を許す方針で又許してやりたい、イエス様は御弟子から七度までは人の過を許さなければならぬかとの問に、七度を七十倍せよと御答になつた位であるから、併し過を過と思はないで、ほつて置けば益々増長して、其結果が自分の迷惑よりも人の迷惑になる事ならば是は斷じて許すべきでないと思ふ、



是なども矢張潔癖の部類に屬するか知ら、前記バイラーの場合が丁度それであつた、どうしても捨て置くべきでない、船の大事には替へられぬと思つたから沈思熟考の末、上海支店長に親書を以て該バイラー文は本船によさぬ様にして貰ひたいと申送つた、是は極秘裡にやつたのであるが、何時とはなしに生のレポートが崇つたとて、當人は勿論他のバイラーや船長仲間から生の處置が酷だと一時批評を受けたが其後他の船で再三失體が續いて終に組合から退かせられたと云ふ事を聞いた。

**名士の好き嫌**　どんな名士でも只エライと云ふ丈では敬慕の念は起らぬ、其處には必ず敬慕すべき又嫌悪すべき何ものがある、生は子供の時から武田と上杉では武田が好きであつた、處が謙信が今川北條が甲州を鹽責めにした時、我と足下と争ふは武にあり、駿相の下策は我の惡む處、今より貴國に北鹽を送らんとて越後から鹽を送つたと云ふ義舉を讀んで以來堪らなく上杉が好きになつた。

源氏と平家では、どうも源氏が好きで平家が嫌であつたが、それでも重盛と知盛は例外に好きで清盛、宗盛、維盛は全く嫌であつた。

嘗ては大治で支那大官の爲書たむがきを其人物が氣に喰はぬとて斷つたことを書いたが、長崎時代に一寸した世話をした人から大に徳とせられて、其人の父親が故伊藤公近侍の人であつて公から書いて貰つたと云ふ正眞正銘の春畝公の絹地を生に呉れると云ふ、生は貴重なものであるからと辭退した、

其人は貴重な物であるが故に贈るのだと云つて引込めない、處が生は春畝公を政治上からは無論尊敬して居るが鹿鳴館の舞踏會時代から日清戰役當時廣島馬關邊に於ける艶聞以來、どうも尊敬の念が薄らいで來て居たから、今貰つても折角の厚意を無にする様な事があつてはならぬと思つて達而斷つた處が側に居合した或人が見兼ねて仲裁して先方の顔を立て、感情をも害する事なく僅の返償に依て書は其人の手に落ちた、生は別に惜いとも思はぬが長崎では之を潔癖の損失として時々話柄に登つた。

世の中には著名な名士學者にして人格の面白くない殊に人倫關係に於いて甚だ忌はしき噂を立てられて居る人が澤山あるが此意味に於いて如何なる名著でも著者の素行が悪ければ好んで讀む氣にならぬ。

**骰子、賭博とたばこ**　骰子は賭博の器具であるから假令之を賭博に使用しないで双六其他の用途に用ふるにしても生は船に於ても家庭に於ても之を許さなかつた、夫と同じ意味に於いて骰子と同じく四季の花札も禁じて居た。

然るに花札や骰子は市井の商店で賣つて居る、賭博を八釜しく云ふ政府がなぜ其器具の販賣を取締らぬか、併し花札骰子斗りではない、馬券なども其類だ、公娼制度も淫賣公許だ、斯う考へて來ると世の中は矛盾だらけだ、斯んな事が氣になつて黙つて居れぬなども亦潔癖かも知れぬ。



之に就て船で面白い事があつた、何かの場合で船内を見廻つた時、何かを見違へたものであらう一水夫の室に骰子があつた様に思つたから、後で水夫長を呼んで八釜しく云つて、賭博の器具を皆取上げて持つて来いと云つた處が、やがて煙草入や煙管や巻煙草入やパイプや一切を取上げてバスケット一杯持つて来た、生は何事かと思つて聞いて見ると、水夫長は賭博を、たばこと間違へたのであつた、先に見た骰子も全く骰子ではなかつた。

**蒲鉾主義** 船員にして常に上陸しないで船に斗り居るものを蒲鉾と綽名して居る、それは今日では大概の船の甲板は鋼鐵で張られて居るが、以前木船の時代は勿論、船體が鐵になり甲板上の建物や圓材が鐵になつてからも久しい間デッキ文は木板であつたので板に付いて居ると云ふ處から蒲鉾の稱が出て来たものであらう、そして生は運轉士時代に蒲鉾メツツ、船長時代に蒲鉾キャツプの稱を受けて居た。

社外船の船長は概して事務上の用向で上陸する事が多いけれども用が済めば成るべく船に歸るのを主義として居たから蒲鉾の稱あるを聞いて内心喜こんだ、そして常に蒲鉾主義を誇として居た。

陸上に用があれば格別だが、船乗は船に居るのが原則で、船に居れば間違はない、船乗の中にも能く上陸好きのものがある、併し是は船乗としては一つの欠点である、蒲鉾主義は少々の欠点を補ふ。

生は在船中、汽罐掃除、入渠修繕其他の場合で神戸には可なり永く碇泊した事もあつたか、京都を知らず、奈良を知らず、有馬を知らず、須磨、明石は船から見た丈だと云つては能く笑はれたが併し生は少しも恥かしく思はず、笑はれて却つて誇を感じて居た。

近頃新聞で臺灣總督、朝鮮總督、滿鐵總裁等の東京滞在の永引くのを兎や角云ふのを見て、無論必要があつて滞在せらるゝに相違なく、敢て聊かも之を疑ふことはしないが、併し我等國民としては總督總裁には成るべく其任地に居て欲しい、矢張總督總裁にも蒲鉾主義が必要である。(蒲鉾の字は當を得ないけれども)



## 第八 信仰篇

### 一、我が信仰

日本基督教會 生は日本基督教會に屬し、同教會信仰の告白を信ずる、此信仰の立場よりしては如何なる他の宗教とも妥協はしない、けれども何れの宗教でも一樣であらうと思ふ、各その信仰の極致に達する迄に各宗共通の点が澤山ある、其共通点において共同の運動をなすことは少しも辭せぬ、假令へば禁酒禁煙の如き、廢娼矯風の如き問題に就ては現に他の宗教宗派に屬し又は何れの宗教宗派にも屬して居らぬ人達と運動を共にして居る、若し夫れ是等の運動をも共にすることの出來ない宗教ならば是非に及ばぬ。

日本基督教會信仰の告白は是である。

我等が神と崇むる主耶蘇基督は、神の獨子にして、人類の爲、其罪の救の爲に人となりて苦みを受け、我等の罪の爲に全き犠牲を捧げ給へり、凡そ信仰に由りて之と一體となれるものは、赦されて義とせらる、基督に於ける信仰は愛に由り、作用きて人の心を清む、又父と子と共に崇められ禮

拜せらるゝ聖靈は、我等が魂に耶蘇基督を顯示す、その恩によるに非されば、罪に死したる人、神の國に入る事を得ず、古の豫言者、使徒及び聖人は聖靈に啓迪せられたり、新舊兩約の聖書の内に語りたまふ聖靈は、宗教上の事につき誤謬なき最上の審判者なり、往時の教會は聖書に據りて左の告白文を作れり、我等も又聖徒が嘗て傳へられたる信仰の道を奉じ、讚美と感謝とを以てその告白に同意を表す。

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず、我はその獨子、我等の主耶蘇基督を信ず、即ち聖靈によりて胎られ、處女マリヤより生れ、ポンテオピラトの下に苦を受け、十字架につけられ、死して葬られ(陰府に下り)第三日に死者のうちより復活り、天に昇りて全能の父なる神の右に座し給へり、彼處より來りて生けるものと死ねるものとを審き給はん。

我は聖靈を信ず、聖なる公同教會即ち聖徒の交通、罪の赦、身体の復活、永遠の生命を信ず。アーメン。

### 二、能く聞く信仰談

#### 常職と信仰

世には宗教を常識に依て解決しようとする向がある、是等の人達は聖書の中でも



或處は肯定し或處は否定する、佛教其他の經典に對しても亦同一であらうと思ふ、併しそれでは本當の信仰は得られない、其調子で行くと自家に都合の好い處は肯定し、都合の悪い處は否定すると云ふ事にもなり甚だ危険である、宗教が敢て非常識で好いと云ふ譯ではないが、我等の常識は夫々に等差があり又皆全きものではないから常識に依て宗教の解決を得ようとするのは間違で、信仰は全く常識と掛け離れたものでなければならぬ、去れば常識が信仰を作るでなく信仰に依て常識が修養せらるゝと云ふ事にならねばならぬと信ずる。

**道德と信仰** 是は非常に類似したもので或点においては全く一樣であるけれども併し同一物ではない、只道德は信仰に含まれて居るのであつて信仰が道德から出て來るのではない、道德が信仰から出て來るのである、故に正しき信仰をもつたものは皆道德家であるが道德家が皆信仰家であるとは云へない。

**國家と基督教**——基督教は外國の宗教であるから其教義は眞の日本國民として持つべき信條とは矛盾すると云ふ様な議論は能く聞く處で、以前は相當の名士大家の口からも聞かされたが今は大分其論鋒の矛盾が世間に分つて來た様に思はれる。

けれどもまだそう思つて居る向も澤山ある様だ、併し生の信ずる處は全然之と異なり、我等が眞の日本國民として立つに適當なるは基督教の教に基づく處の信仰に依る事であると信ずる。

基督教の教は決して外國のものでないと同時に日本人のみのもでもない、宗教は凡てそうなくてはならぬ、丁度太陽が誰のものでもなく世界の總ての人類や草木國土が一樣に其恩惠を受ると同じ様なものだ、生は此信念の下に日本國民として、皇室を尊崇し、陛下の赤子として、無二忠良の臣民たらんことを冀ふ点に於いて敢て人後に落ちないと常に信じて居る。

**基督拔きの基督教**——基督教に於いて説く處の倫理道德、博愛献身主義には悉く賛成しながら其處に基督が出て來ると忽ち蹙躓する、若し聖書の中から基督の降誕、十字架、復活等に關する記事を削除したならば双手を舉げて賛成する、直に信者になる、キリストがなくても差支ない、何も斯んな邪魔物を持出さなくても好いではないかと云ふ人は澤山ある、其中には立派な學者も名士も居る、是等の人士が基督あるが爲に信者になれぬのである様に見えるのは誠に遺憾である。

それから又其方面に向つて、基督教を標榜しながら其説く處は單に仁義道德の範圍に止めて基督の生涯から十字架、復活に及ばないで歓迎されて居る様なもの稀にはある、けれども是も間違つて居る、之では丁度市井のクリスマス、デコレーションと大して撰ぶ處はない、基督教は即ち基督教である、キリストあるが故に 教があるのである、丁度神佛拔きの神佛信心家も之と似た様なものであらう、假令へば土地の繁榮を目的のお祭、それには遊廓も一緒になつてやる、初天神の恵方詣りだの、木遣音頭の土盛りだの、就學兒童の稚兒行列だのなど蓋し神佛の意に叶つたものでは



あるまい、生は基督教を談する諸君に、今一步聖書の奥殿に向つて踏入れん事を希望して止まぬ。  
鰯の頭も信心から——夫から又斯んな呑氣な信仰談がある、基督教と云ひ、神道と云ひ、佛教と云ひ皆一つだ、自分の心にはとは信するものなら何でも好い、鰯の頭も信心からだ、心さへ、眞の道に叶ひなば、祈らずとも神や守らんだ、何もアレヤコレヤと信仰の標準を定むるには及ばぬと、是亦相當立派な、世間から尊敬を受けて居る人士から聞かされる、併し是等の人士に今少し落付いて謙遜に考へて信仰の道に進まれん事を希望する、敢て基督教とは云はぬ。

禍福の祈願——宗教の宣傳には、永年の病氣が治つたとか、七轉び八起きの後、信仰に入つて忽ちに運が向いて來たと云ふ様な事は古今東西共に一律で又一番利き目がある、聖書の中にもキリストが病人を治した例は澤山ある、我々信者の間にも病氣の全快を祈り又は或る他の目的の爲に祈る事はある、けれども信仰に入るの目的はそう云つた様な所謂世俗的幸福ではない、病が治つた、運が向いて來たと云ふ事は假令あつても、それは聖旨に依る所謂副産物である、若し夫を信仰に入るの第一義と信じたならば、忽ち失望蹉躓するに至るべきは殆んど間違のない處であらう、隨つて副産物たる病氣全快又は他の物質的幸福の與へられたるに依て目的を達したりとしたならば次に來るものは墮落か失意か何れにしても善きものではない、信仰の尊とさも亦其處にあるのだ、即ち信仰の標準は世俗的を超越したものでなければならぬ。

### 三、我が信仰の由來

我家の宗旨と其感化——生の家は永平寺派禪曹洞宗であつて、祖先の祭祀には代々相當に意を用ひた、と云ふよりは寧ろ手を掛けて來た様である、家が古い丈に代々の位牌の數が多い、其多い數丈の位牌に毎朝茶と飯を供へ、其命日／＼には檀寺から坊さんが來て讀經して飯を食つて行く、其度數は中々多かつた。

夫から盆になると軒に無數の提灯を吊すなどが目に付いて何時とはなしに子供心に信心を唆られて自然に神佛を崇拜するの念が萌した様に思はれる。

母の信心——生の母が又大變な信心家で、其祈願と云ふのは、無論いろ／＼あつたであらうが其大部分は生の爲であつた様に思はれた、愛吉が無病息災に大きくなる様に、手習學問が好く出来る様に、立身出世をする様に、南無、村の氏神様、小川之地藏様、當目の虚空藏様、花澤の觀音様、吉永の八幡様、飯淵の不動様、おきつ天神様、遠州の秋葉様、京都の愛宕様祇園様と云つた様に近所遠國の神佛の名を連呼して居るのを能く聞た。

是れ或は迷信に屬するものであるかも知れぬが生は之を慈母が愛兒を思ふ眞心として今でも有難



く勿體なく思つて居る、母が若し今も世にありて基督の教を聞かしたならば初めは無論困難であらうけれども根氣よく導いたならば終に好い信者になれたかも知れぬと思ふ。

愛の字のいはれ——生は姉との間に男子が二人もあつて二人共に天死した跡に出来たので母はいたく心配して、年々京都から來て泊る愛宕の坊さんに祈禱して貰ひ、名前には必ず愛の字を冠せると願をかけて生れたのだと常に母から聞かされた。

處が生が嘗て母の里なる碓井家に養はれた時に其家は源頼光に仕へて渡邊綱、浦部季武、坂田金時と共に頼光の四天王と云はれた碓井貞光の後裔と云ふので男子は皆貞の字を冠らせ、貞喜、貞榮、貞固などあつて生には貞次ただよとつけて呉れた、處が母が愛宕さんに濟まぬとて承知しない、貞の字も好いが愛の字を削る事はならぬとて、遂に妥協して貞愛さだよしとしたが是は何かの差支で止めになつた。

源義平に戰に臨んで高官を授けんとした處が悪源太可なりと云ひ、爲朝は鎮西八郎で好いと云つたのが大に氣に入り矢張り愛吉可なりと云つて示來それで押し通した。

机の上に粗忽 生の家では父も兄(姉の聲)も近隣の子弟を集めて寺子屋をして居た、父の弟子と云ふのは只父に對して何時までもお師匠様と尊稱を用ふる人の澤山あつたことを覺へて居る、兄の弟子の中頃からの、は大概知つて居る。

或時に兄の弟子の机の上に乗つて遊んで居る内に遂に粗忽をして机上を汚した、母は大騒ぎで之を

掃除して清潔法は濟んだが、愛兒思ひの母は心配して天神様に文具を汚したお詫として梅を一生絶たせた、但十五才になる迄は母が代つて絶つて居たが十五才からはおとなだから自から絶てと云はれた、併し其頃は青年血氣、生意氣盛りの時であつたから、母の云ふ事を聞かず、そんなつまらぬ事があるのですかと、態と母の前で梅を食つて見せたりした、母は愈々心配して終に母が生きて居る内は代つて絶つて遣るから死後は是非絶つて呉れと云つた、當時生は何とも思はなかつたが後に考へて、當時の母の心は如何であつたらう、随分不孝ものであつた、母は腹の中で泣き通したであらうと思つて母の死後は斷然梅を絶つた、今日でも稀れに腹工合でもそこなつて食慾の進まぬ時など梅干を用ふる事もあるが、其時は何時も母の事を思出さぬ事はない。

母は生の爲に常に意を用ひて、それは出世前の男のすることでないとか、そう云ふ事は出世の妨だとか俗に云ふ御幣擔ぎの言葉を常に聞かされた關係上、子供に似合はぬ神佛崇拜の念を持つた。

奇蹟的避難 是は生が幾才の時であつたか全く記憶はなく常に父母から聞かされた事であるが、生の家は農家で、砂糖をも作り冬分の行事に砂糖練りと云ふのがあつた、それは中央に三個の轆轤を据へ齒車仕掛で之を回轉し、回る轆轤の間に甘蔗を入れて其汁を搾る、其動力に牛を使用する、其仕掛は中央の轆轤を中心に長き圓材を横たえ其一端を牛に曳かせる、其牛の通路は丸くチャンと極まつて居る、牛は手飼の牡牛であつたそうだが、生は其通路で何かに屈托して遊んで居たの



を誰も氣付かぬ内に母は遠方から之を見て大聲を上げて椽側から飛降りて跣足で飛んで行く内に牛は早や生の背後に來り生の帶に角を掛けてソツト傍に退けて其儘進行を續けたそうな、其時母の動悸は暫らく鎮まらなかつたと云ふ事だ、生は是等の事を母の日頃念する佛神の加護であつたらうと信じて居た、そして眞心を籠めて祈る祈は假令地藏尊に對してでも虚空藏菩薩に對してでも結局は天の神様に届くのではなからうか、其處に眞心か又は面白半分か、土地の繁榮の爲か、人の弱點に付け入つて一儲しようとしたくられたお祭りかを吟味する必要が起つて來る。

**佛壇と神棚** 生の家は佛祭りには中々念を入れ手を掛けて來たものであるが、併し又神棚もあつた、けれども神棚の方は佛壇程にはなかつた、尙其上に隣村に法印と云ふものがあつて毎月一回月讀み又は月祈禱と稱してやつて來てお經を讀んで行つた、併し是は神佛中間のものゝ様であつた。

又年々京都から祇園さん、愛宕さんなどが來て泊る、是等も神主か坊さんか能く分らぬ、矢張神佛中間の曖昧なものであつた様だ。

去れば生も子供の時に發芽しかけた神佛の有難味も物心付くに從つて漸次薄らいで來た。

**神體探檢運動** 生の家では母は前に書いた様に信心には中々熱心であつたが、父始め兄弟は只舊來よりの家の仕來りを能く守ると云ふ位の處で相變らず念入りと手数は續けて居るものゝ別に信

仰に依るものではない、だが之を廢めようと云ふ意志もなかつた様である、是は獨り生の家斗りでなく其他の村人並に近郷近在の人々も大概似た様なものであつたらう。

其頃隣村某神社の夜祭りに夜半過ぎ、所謂草木も眠むる丑滿つの頃暫時は參詣者も皆去り講中の人達も皆社殿に立籠り何れも息を殺して沈靜にして居る、其時に神靈が降臨する其證據には宵に捧げた供物が朝は一物もなくなつて居る、是斗りは實に不思議だ、實際だ、疑ふべき餘地はないと誰でも眞面目に云ふ、生等一味の四五人はそんな事があるものか、それは其時、人の居らぬ間に何者か來て竊かに撤去するに違ない、イザ正體を見届けて村人の迷信を覺まし呉れんと宵の内より手筈を定めて神前の程能き處に身を潜めて居た處が段々群集は去つて、あたりは次第に寂寞となりモウ丑滿に間もなからんと思ふ頃、神前に何者か潜んで居る、打ち叩け、打ち殺せと若衆達が手に／＼棍棒を持つて詰め寄る様子にはは大變と我等は逃げ出し、稍く一方に活路を求めて辛ふじて事なきを得た、是が誰云ふとなく生等一味の仕業で而かも生が其張本だと云ふ様な噂が立ち、父母兄弟から嚴しく叱られ、戒められて、以後そんな無謀な事はやらなかつたが、爾來益々其處等の人達の信心なるものは悉く斯んな風な迷信に過ぎないと思ひ初めた。

**静岡城内の宣教師** 静岡城内で宣教師夫婦が頻りにキリスト教を宣傳して居るのをソツト覗いて見ると大きな併し温厚そうな、寫眞で見たグラント將軍の様な男と綺麗な夫人とが頻りに何か語



つて居る、日本語も片言交りに話す様だが、日本人も居て通譯する、外來者を歓迎して、いろいろの読み易い参考書を呉れた。

それに依て直に信する氣にはなれなかつたが併し流石は文明國の宗教丈あつて今迄聞た坊さんや神主さんの説教よりは大分理屈に合つて居ると思つた、是れが生のキリスト教を聞た抑の初めであつた。

#### 信仰の一進一退

東京に出て書生時代から商船學校在學時代までは先以てミツシヨンスクールに居る友人の關係や、商船學校の運用術の教師キャピテンラムサー氏の崇高なる人格に依て幾分づつか基督教に引付けられて行つた様であつたが、座學を卒へて實地練習として帆船須磨の浦丸に乗るや、海上の毛唐さん等の卑行蠻風を目前に見せ付けられ、又舊幕時代に締結せる極めて日本に不利な條約を改正せんとすれば英國を始め各列國は容易に承知しない、横濱神戸上海等の居留地の綺麗なく、青々した公園の芝生に、白人の兒童が愉快氣に遊び戯れて居る、其入口には、日本人支那人入るべからずだ、此不平等な治外法權條約の改正が中々六つかしい、之が爲には政府當局は外國人の御機嫌を取つて、やれ舞踏會だ、やれ假裝會だ、我々には何が何だか譯が分らず、あれでも本氣の沙汰か知らと思はるゝ斗りの時代もあつた。

毛唐人は日本に来て大威張であるのに日本人は自國に居ながら手も足も出ない、其内にアメリカ

の支那人排斥問題も起つた、是では基督教の博愛主義も好い加減なものだ、とても當てにならぬ、矢張我々は大和魂で押し進み他年一日彼等紅毛碧眼の奴輩を誅戮せずんば止まざるべしと一時は決心した、此思想に支配せられて居た間が可なり永かつた。

其間に教育勅語の發布があり、一方にバラ學校は明治學院となつて益々發展し、京都には同志社が出来たりして、生が基督教主義に疑惑を狭み、愛想を盡かし、見切りを付けたのも聊か輕舉妄動の様にも思へて來たので再び信仰問題に憂身を窺つし始めた。

#### 禁酒から信仰へ

此處に一つ面白い事は生が基督教に反對し大和魂で大にやらうと云ふ時には常に大に呑んで一杯元氣でと云ふ調子であつたが、時偶たま日清戦役に際し廣島、下關邊における云に云はれぬ紊亂の有様を目のあたり見せ付けられ、遼東併有も一夜の夢、三國の干涉に依て還付の止むなきに至つた慷慨心から彼の條約改正以上に實現困難であつた生の禁酒が容易く實行せられたことである、それが動機となつて終に信仰に進むの道が開けて來た。

## 四、求道、受洗

### 求道

日清戦役が終を告げ、我が北辰丸も御用船を解除せられて久方振にお馴染の小樽港に行



つた時、生等同郷の親友三人の中の一人月形村武市農場技師小野田卓彌君が訪ねて來た、そして夕食を共にせんとする時、小野田君は生の爲に酒を注文する、生は禁酒したと云ふも小野田君信じないで「マァ飲めと云ふ、イヤ飲まぬと、それから遼東還付の憤慨や御用船中の所感やを食後深更まで語り續けて別れた。

翌日は小野田君が一人の紳士と同伴來船した、此紳士こそ今は故人であるが日本基督教會の重鎮當時小樽教會の牧師たりし光小太郎君であつた。(第三圖寫眞下左参照)

後に聞くと小野田君は生が如何にも酒を甘まそうに飲むので生から酒を奪ふに忍びなかつたが酒を止めたと云ふので、時は好しと光先生を同伴したのだと云ふ。

其後、船は常に小樽に行くが小野田君は月形に居て減多に來ない、けれども光先生とは生が御訪するか先生が御見えになるかで、大概毎航御目に掛からぬ事はない、而かも信者になれとか、洗禮を受けよとか云ふ事はなく、只航海中に暇があつたら讀めと云つて種々な本や雜誌を下さる、生も亦それは入念に讀んだ、其中で一番分り易く又一番生を動かしたものは安藤太郎さんの「在布哇受洗始末」とヘンリードモンド氏の哥林多前書十三章を説明した「愛は最上の賜なり」であつた、そして段々と聖書を讀みもて行く内に最も不思議に感動して到底他の宗教で見る事の出來ない唯一無二の増督教々理であらうと思はれた節は敵を愛すると云ふ事であつた、そしてそれが爾の敵を愛

し爾を呪ふものゝ爲に祈れと云ひ、十字架上より彼等を許し賜へその爲す處を知らざればと天父に祈られた邊り誠に能く首肯された。

先生は極めて運動好きで我等二人は常に炎天雪中の嫌なく、公園地から山上山腹を矢鱈に跋渉しそして歩きながら話す談柄が時事問題、政事問題、それから、古今東西の人物月旦、それが又奇態に馬が合ふ、先生が船に見えては社外貨物船で相場の極まつた洋食又は和洋折衷の食事が頗る御氣に入り、生が上陸しては先生の處で奥さん子供さんと一緒に御飯をいたゞくのが何よりも楽しみであつた。

其頃生の家庭は東京にあつたが船が小樽室蘭を起點として新潟、佐渡、伏木、敦賀、門司、神戸と云ふ西廻り又は仙臺、横濱と云ふ東廻りで殆んど定期の様な航路を執つて居たので、家庭を小樽に移し、妻も共に小樽で求道し始めた。

處が未だ洗禮を受けるに至らぬ内に惜しき北辰丸を去る事になり家庭を神戸に遷すの必要起り、光先生から神戸日本基督教會牧師外村義郎先生に紹介を受けて明治三十年十二月神戸に來た。

受洗の動機——生は惜しき北辰丸を去つて家庭を神戸に移し、暫らく陸上にあつて休養旁々教會にも行き又創立勿々の珍らしい海員俱樂部(今の海員協會)にも出入の出來る事を楽しんで居た處が俄かに千代田丸に乗る事になり上陸一ヶ月そこくで又航海を始めた。



千代田丸に乗つて初めての航海であつた、時は一月の中頃、石炭を満載して晴天連日吹續く六乃至七の北東信風に追はれて、支那海を南に進む時、浪は絶へず兩舷から煽り込んでコーターデッキを洗ふ。

北辰丸を去つて僅々一月の在陸、マサカ船に酔つたでもあるまいが、何時にない否やな氣持がする、モウ少しは風ぎそうなものだと思つても中々風ぎない、此時に思ふた、光先生は常に云はれた、神は慈愛に富み、全智全能で能はざる處はない、願へば必ず聽いて下さる、イエス様は浪をも風をも鎮め賜ふたと聖書にあるのは本當だ、信すべき事だと、果して然らば今日の様な時にも祈つたら此浪、此風を鎮めて下さるか知ら、試に祈つて見ようと、チャートルームで、誰も這入つて來ない様にして、獨り其中で此浪と風を鎮めて下さいと祈つた、そして出て見ると、少しも變りはない、再び祈つたが矢張同じだ、其時に斯んな事を考へた、いくら神様でも餘りヒツコク祈つたら五月蠅いと云ふだらう、暫らく祈ることを止めようか、併し又考へた、我々は神様の子供だ、子供が親にねだるに制限はない筈だ、聖書の何處やらに祈の例として、夜半寢て居る處へ隣人が來て戸を叩いてパンを一片貸して呉れと云つた時、初めは斷つたが餘り屢々云ふので遂に起きて貸してやつたと、又無慈悲な裁判官も寡婦の切なる歎願を遂に聽たとあるを見れば祈りに遠慮は無用だ、今度は聽かれるまで祈つて見ようと思つて、又海圖室に立籠もつて祈り始めた、其時に誰か耳元に口を付けて云つ

たのではないかと思はるゝ程明かに斯んな事を感じた、爾はそれ程馬鹿ではないと思つたが、思の外馬鹿だな、此天候が分らないか、是は冬季吹き續く支那海の信風だ、此信風の吹いて居る間は天氣は順調だ、若し此風が止んだら其時は氣壓に狂いを生じて荒天となるのだ、此好天氣の間に早く行けと。

ハテ不思議だ、斯んな分り切つた事にナゼ今まで氣が付かずに徒らに悶え苦んだであらうと思ひながらブリツヂに上つて見ると相變らず好天氣で船は順風順浪に追はれて疾走して居る、浪は相變らず兩舷から煽り込んでコーターデッキは盛んに洗はれて居る、けれども前の様に不安に感じない、此時初めて、祈りが聽かれた、聖靈に導かれたと感じた、そしてそれから頻りに祈る様になつた、此の時の感じは今も尙あり／＼と腦裡に泌み込んで忘れない。

**祈りの經歷** 生は家の宗旨や母の信心を子供の時から見て居た關係に依て神佛は拜むべきもので又拜めば聽かれるとの信念は臍氣ながら餘程深く泌み込んだものであらう 聖書に「信じて祈れば此山に移つて海に行けと云へば其通りになる」とある處なども或はそうか知らと思つて頭からそんな馬鹿な事がと眩す氣にはならなかつた、去れば一進一退の時代でも或は佛から神へ、神から基督へ、基督から又神佛へ後戻りしても兎も角も全く信仰から離れては仕舞はなかつた、此事を思ふ毎に常に日曜學校教育の兒童に大切な事を痛感し近頃佛敎各派の日曜學校開設を處々に見受けて



は成る程と感ずる。

そんな工合で未だ信仰に入らぬ前に船に乗つて海上安全の爲には常に神佛に祈願することを忘れなかつた、勿論それが信仰的訓練又は修養に依つてゝないから一向に取留めはなかつた。

或時に或書物で海上安全の祈りに用ふる祝詞の書いたものを見て、是だくと斗り忽ち暗記して、示來當直に立つ前には必ず之を唱へ又當直中も時々黙唱した。

基督教の信仰に入つて後は祈りの形式や對象が全く異なるので今は信仰的には之を適用はしないが會て之を心からの祈りの意味で唱へた時代や又其言葉が如何にも綺麗で氣持の好い事を思ひ出しては時々黙唱して見る、それは左の様なものであつた。

わだ津みの、潮のやよ合ひの、八潮路を、水のみはらと、しろしめす、船玉の神の御前に、畏みくも申さく、我がすめみまの命みことのしろしめす、國と云ふ國のはてく、島と云ふ島のさきく、この船の至る處、大和田の原は、八重疊しき渡せる事の如く、荒き風荒き浪の災なく、守り賜へさちわい賜へと、畏みくも申す。

受洗——千代田丸に乗つて始めての航海中、お祈りが分つて來てから、不圖した事から白根一等運轉士と信仰の談が出て、洗禮は必要であるかないかと云ふ事になり、圖らずも意見が一致して其内に洗禮を受けようと約束をした。

白根君は外國船に乗つて居た時に篤信な船長夫婦から導かれて聖書を読み、祈りをして居た、神戸に歸つてからは、多聞教會で長田時行牧師に導かれて居たと云ふ。

そこで生は受洗は決心したが、茲に一つ考へた事は、妻にも勧めて成るべくは夫婦揃つて洗禮を受けたいが、外の事なら無理にも勧めるが受洗は信仰に依る事で、強制する譯に行かぬ、是は何でも妻の信仰を進めなければならぬと又頻りに其爲に祈つた。

航海は無事に終つて神戸に歸つた、錨を投じてまだブリツヂを降りない内に我家庭の事を何呉れとなく世話を焼いて呉れる金子民三郎君が奥さんから頼まれて至急面會したいとブリツヂの下に待つて居り、性急な金子君はブリツヂに上がつて來兼まじき様子なるも、用向が私用である事は問ふまでもなく、そして下には税關、港務、水上、エゼントと云ふ様は船用の連中が扣へて居るから先づ其方から片付けて、其間も金子君が急を要する事であり暇は取らぬからと屢々云はれたが矢張公私を轉倒してはならぬからと待つて貰つて、扱公用が片付いてから用件を聞て見ると是は又不思議、金子君の言に、奥さんの信仰が大變に進んで次の洗禮式に受洗したいが、ならう事なら夫婦一緒になりたいと云ふ、貴君の決心次第にて此碇泊中に決行せらるゝ様に、そうなれば教會は今夜の小會を尊宅に開いて序に洗禮試験をしますと、丸で生が云はうと思つて居た事を金子君を通して妻から云ふて來たので是亦聖靈の導びきに依る事を深く感じた。



生が光先生の紹介を受けて来た時は神戸の教會は裁判所前の一寸した素人屋であつた、それから  
下山手通七丁目(海員協會の一寸上)に新築し、外村先生は傳道義會に轉任せられ、後任牧師貴山先  
生の御出になるまでの間暫らく無牧であつた。

生は自宅に開かれた小會に於て妻と共に試験を受け新築の教會に於いて宣教師ヘンリー、ビー、  
ブライス師から洗禮を受けた、當時兵庫に講議所があつた丈で、神戸に於ける日本基督教會として  
は我教會が唯一のものであつた。

## 五、奇蹟か偶然か

難行海 千代田丸で或年の冬、石炭を満載して上海に向ふ途中、冬期には珍らしい大時化に遭  
つた、普通ならば北東信風に追はれて順調に疾走すべき處を北西の強風怒濤を横に受け船體が動搖  
して針路を保守することが出来ず止むを得ないから夕刻より針路を風の方向に向けて非常の搦動轉  
動と戦ひつゝ終夜一時間僅に二漕斗りの速力を以て前進し曉天より天氣は快晴となり、晴雨計は昇  
騰を初めたるも風濤は益々激烈を加へ、前方は朦氣で水平線は見えないが、此邊の海岸は一帶の平  
原で高山がないから、山影を認めないからとて、陸岸を遠く離れて居ると斷ずることは出来ない、

故に絶へず海底の水深を測りつゝ前進した。

船體の漏水 然るに正午前後より後艙の滲水が漸次其量を増し來り慥かに船體後部に漏水を生  
じたるものと思はれ、而かも荷室より機關室に通ずる水管に炭粉がまつて滲水はローズに流れて  
來ないから機關ポンプを使用することが出来ない。

船體の動搖に依て之を正確に知る事は出来ないが檢査器の示す處に依れば、後艙に漏入したる水  
量約二百噸、船尾の喫水を増した事が一呎餘なるが故に後部甲板は絶へず波濤打込み、水樽、肉樽、  
鳥箱、野菜箱等皆縛索が切れて洗去られ、加之、昨夜來船體動搖の爲に飯が完全に焚けないで、半  
煮の握飯ビスケットと、辛ふじて沸かした湯で茶又は珈琲を作り以て飢を凌ぎ、航路の見張、海底水  
深の測量、手動ポンプに依る冷水の排除、甲板にある諸物體の縛着、其他の作業で船員は昨夜來  
片時も睡らず、一同綿の如く疲れたるも今は一生懸命、只管、船の安全を企圖して止まなかつた。

漸次陸岸に近づく 正午並に午後二回の天測と刻々に測る海底の水深に依て、假令周圍に一  
物を見ざるも船は揚子江口の東方に於て陸岸を距ること遠からざるを知りたるも而かも前方より襲  
來する風浪は毫も其猛威を減せず、若し之を横に受くるならば船體の動搖は到底想像すべからず、  
と云つて此儘前進を續くるに於いては如何に速力遅緩なりと雖も夜半には終に陸岸に接近して危険  
であり、又風浪を船尾に受けて沖に出すことは後部の漏水に依て尙更危険であり、進退谷(きん)まり如何



に考慮するも思切つて揚子江口に向けるより外に道はないと信じた。

爾曹は救はるべし 生は前日午後よりブリツヂを去らなかつたが此時二十五六時間ぶりでチャートルームに降りて見ると室内は洪水で、靴や柵から落ちたいろくの物が其中に游いで居る、卓上の海圖、定規、兩脚器、鉛筆、ペン、インキ壺、日誌、書物、新聞雜誌等がベッドの上やデッキに落ちて全く手も付けられぬ有様、其中から辛ふじて聖書の友日課表と聖書を出し、暫く祈りて之を繕げば其日の日課の要旨は「爾曹は救はるべし」で、讀むべき場所は哥林多前書第十章十三節「爾曹が遭ひし、試煉は人の常ならざるはなし、神は眞なり、爾曹を耐へ忍ぶこと能はざる試煉には遭はせじ、爾曹が試煉を耐へ忍ぶことを得ん爲には之と共に遁るべき道を備へ給ふべし」とあるに依りて大に奮起し、直にブリツヂに上り、非常な動搖を覺悟の上で針路を江口に向けた處が初め暫らくは横揺れに大分揺れたが、我等は安全なりとの確信を以て進んだ、其時、日は全く暮れて四面暗黒一物も見えない中を測深を行ひつゝ前進して居る内に、江口東側の沙尾山島と西側の馬鞍島の燈火が見えたからモウ大丈夫と江口に接近した。

此時風浪は大分平靜にはなつたが、まだ水路がハッキリ見えない、又浪が高くして錨を投することもないで、止むを得ず馬鞍群島の蔭に探り寄り一の安全なる錨地を求めて其處に假泊した、其時は翌日の午前二時であつた。

### 心臆を寒からしめた

其處で何は兎もあれ疲れ切つた船員を夜の明るまで暫らくでも休息せしむる筈であつたが、念の爲にと後艙に入つて耳を澄ませば海水の艙内に注入する音が涼々として聞ゆるに依り是は夜の明るまで此儘にしては置かれぬとて茲に又船員を督勵し綱掛りで塗水排除、一方には前部タンクに水を張り、艙内の石炭を後部より前方へ移動し稍く船尾が高くなつて漏水部が水面上に來たと見えて涼々の音が聞へなくなつた、此時早既に夜が明けて船尾外板の透間より朝日の光線が指し込んで居たのを見ては實に、心臆を寒からしめずには居られなかつた。

### 更に心臆を寒からしめた

夫から天候の平穩に復するを俟つて、船尾が高く飛上り、船首が突込んで丸で船がお辭宜をした様な妙な恰好で上海に入港し、石炭陸場の後、浦東新ドックに入渠して見て又々更に心臆を寒からしめた事は。

ソールピースが破損して、スターンポストが舵と共に波浪の爲に左右に激動して船尾外板に間隙を生じ其處から海水が浸入した事が分つた事であつた。

### 不幸中の幸

若し我等は今回の風波に遭はなかつたならば、此恐ろしき大損所の發生すべき状態を知らずに再び海洋に乗り出したであらう、又此出來事が本船の曾てなした前四回の香港航海の途中又は其前の牛莊、芝罘の如き修理に不便の地において起りたらば如何であつたらう、又搭載の貨物が雜貨であつたならば濡損の賠償は果して幾何であつたらう、若し貨物が牛莊で積んだ大豆



又は其前の北海道で積んだ昆布であつたならば如何、獨り賠償の損害斗りでなく、大豆又は昆布が海水に浸つて膨脹し終に船體を破裂せしめたかも知れぬ、然るに之を都合好くも楊子江口に於て起し、完全なドックを有する上海に到り適當な修理を加ふること得、且つ爾曹の頭の毛一筋だに毀はるゝ事なしと云ふが如く乗組員に聊かの怪我もなかつたことは誠に不幸中の幸であつた。

**海難報告並に審判** 上海に於て制規の海難報告を領事に出し、其頃はまだ遞信省の検査官が上海に在勤して居なかつたから、ロイド検査員の検査を受け其報告が領事から本省に回り、本船が下の關に回船したら審判所から呼出しが來て、そして審問を受けた、審判官は頻りに本船が單に激浪怒濤に搖られた斗りでなく、何處かで淺瀬か暗礁に觸れたのを知らずに居たか乃至は知つて陰蔽して居たのではないかと詰問されたが、素より斯かる事の有るべき筈なく殊に陰蔽など斷じて有るまじき事を陳べ、且又定期々々に船體検査を受けて居るから若し疵でもあつたならば検査手帳に記入もあらうし、検査官は船長に注意ある筈等を陳べて全く天災の不可抗力に起因せる事を主張した。其後審判所から、本件に付ては審判を開始せずと通知があつて、船長職務上の責任はない事になつた。

**偶然か奇蹟か** 生は一年前に北辰丸を去つて小樽より神戸に歸つた時に廣海汽船奈良丸船長に推舉せられ、大に屬望して居た處が前船長勝沼五郎君が復船すると云ふ事で、それは沙汰止みとな

つた、其後幾何もなく同船は澎湖島附近で遭難し親友勝沼君、菅沼君等有爲の士を空しく海底に眠らしめたるは返すくも遺憾の極みであつたが、若し生が往つて居たならば或は其時に奈良丸と運命を共にしたかも知れぬと思つては勝沼、菅沼諸氏に對して常に感慨を深うして居た、處が生の今回の遭難を妻の許に書送つた手紙が丁度一年前奈良丸遭難の事を耳にせしと同日であつたとて妻は一種の感に打たれたと云ふ事を後で聞た。

又妻が生の手紙を手にする前に上海に向けて發送した手紙に依ると、其頃教會で毎火曜日の午後信者の家庭で祈禱會を開き、去十二月十三日は我家の番に當り午後三時三十分即ち生が聖書の言葉に勵まされて奮起した時は丁度會衆が第九十二番(當時の新撰讚美歌)風いと烈しく、浪立つ暗夜も、望の錨を主のみもとにおろさんと歌つて生の爲熱心に海上の安全を祈つて呉れた時であつた事を見た時に、生は密室で感涙に噎びながら幾度か感謝し祈禱し又聖書の同じ處を讀んだ。

世の中には紛れ當りと云ふ事もあり、偶然と云ふ事もあり、又當るも八卦、當らぬも八卦と云ふ事がある、生の此度の事も亦其類であるかも知れぬ、併し生はどうしても之を紛れ當りとも偶然ともする事は出來ない、或は之を迷信と笑ふ人もあるかも知れぬ、けれども笑ふものは笑へ、嘲けるものは嘲けれ、生は天父の恩恵、聖靈の導と信じて疑はず、常に感謝して居る。



## 第九 回顧六十年

### 一、幼年時代

手習始め 生の兄が父の跡を襲ぎ近隣の子供を集めて寺子屋をして居たから生も其中に這入つて手習を始めた。

それは文久元治の頃で、生はその年號の文字を書き覚ええたが、それが慶應と變つた時に大變に六つかしくて慶の字と應の字の區別がどうしても覚えられなかつた事が當時の記憶に遺つて居る。

寺子屋通ひ それから年月は覚えぬが隣村上小杉の法印(後に神官となつた)松山玄山師が可なり大規模に寺子屋を開いて居る、其處へ寺入(入學のこと)して毎日辨當を持つて通學した。

松山師の寺子屋は明治初年小學校制度が行はるゝまで續き、小學校が出来てからは生徒は皆學校に行き松山師も亦小學校の先生になつた。

寺子屋教育 習字が主でお手本は先生が、名頭字、源平藤橘吉定岩彦と云つた様な、又近村名、上小杉、下小杉、藤守、吉永、と云つた様な、それから進んで大日本國盡し、畿内五國、山城、大

和、河内、和泉、攝津、それから東海道、東山道、南海道、西海道、北陸道、山陽道、山陰道等の國名を書いて呉れた、國盡しで覺えて居る面白いのは、其一番お仕舞が、外に二島壹岐對馬、唐、天竺、朝鮮、琉球と云ふのであつた。

其習字の仕方と云ふのは双紙と稱して駿遠地方特産の左束紙サツカを十枚乃至十五枚づつ綴ぢて、上表紙に御双紙それから年月姓名を書いたものに書いては外に持つて行つて乾かし、乾かしては又書く、大概之を三四冊づつ持つて居るが、書いた上に書きくゞして眞黒になつて居るから何が書いてあるか判らない、そこで單に双紙を水で濡らして乾しに持つて行くものもあつた、是等が寺子屋のカンニングであつた。

それから月に六回、之を月六才と稱して一六、二七、三八、四九、五十と云ふ様な風に日を極めて清書キヨガキをする、又二十五日には席書ハキガキと云つて大きな字を書いてゾット並べて優劣順に鴨居に貼つた。

讀書は實用向に百姓往來とて耕耘、播種、刈入れ等、商賣往來とて物品の買入れ、賣出し、目録、仕切り、注文等、又家庭向には庭訓往來と云ふものがあり、忠孝道德の教としては一番最初が今川、それから童子教實語教などがあつた。

今それ等のあらましを云つて見るならば今川と云ふのは今川了俊愚息仲秋に對する制止の條々、



一、文道を知らずして武道終に勝利を得ざる事、一、一、一と十數個條あつて後に右之條々常に心に掛けらるべく、弓馬合戦の家を生れては云云。

童子教の初には、夫れ貴人の前に居ては顯路に立つ事を得ず、道路に遭ふては跪いて過ぎよ、召すことあらば敬つて承はれ云々。

是等を解釋も何もなく只大聲に素讀したものだ。

實語教の初めは、山高きが故に貴からず、木あるを以て貴しとす、人肥えたるが故に貴からず、智あるを以て貴しとす云々、之を巫山戯て米高きが故にタント食はず、雪花菜を副へてタツタ一杯など云つたものもあつた。

塾教育 寺子屋より程度が高く、生徒も近郷近在の比較的有福な家庭から來て居た。

生は明治元年、母の里上泉村碓井家にやられてからは其處の天隨舎塾に這入つた。

其處では習字に双紙を用ひないで左束又は半紙（駿遠地方で半紙と云へば駿河半紙で、一般の半紙の事は四半紙、大阪半紙又は土佐半紙と云つて居た）の白紙を用ひ、清書席書には唐紙を用ひた。そして習字よりも讀書に重きを置き、書物も寺子屋の様な往來ものでなく初めに孝經夫から大學、中庸、論語、孟子、詩經、書經、易經、春秋、禮記、夫から文選と云つた様な順序で又漢詩も和歌も教えた。

### 時世の變遷

生の郷里は幕府直轄の地で之を天領と稱して居た、随つて子供心に、天子様は京都に御在おはしまして、神様の様なもので、人間としては江戸に御在おはす公方様くわうさま即ち將軍様が一番エライものだと言々教へられたのであらう、そんな風に覺へて居た。

それから將軍御進發又は御上洛と稱して大變な同勢で東海道を西上した、それは長州征伐とか、禁裡守護とか聞て居たが、それが何時の間にか賊軍となつて、何處を通つたか分らない様に江戸に歸り引續き官軍征東となり、曩に征伐せらるゝと云つた長州藩が其先鋒だなんて全く何が何だか分らなかつた。

### 風俗の遷變

其時分は男子は皆前髪を剃つて曲げを結び、武士は腰に兩刀を横たえ、庶民は一刀を指して居た、生等も子供の時から一寸餘所に行く時でも必ず短刀を指したものだ、大小兩刀を指したかつたがそれは出来なかつた。

### 車駕東幸

天子様が江戸に御下りになり江戸が京になり、京は西京となる、其初めての御東幸の時に生等は瀬戸川原に平伏して橋上の御通輦を拜した。

### 徳川家静岡に移轉

静岡はもと府中又は駿府と稱して居たが、江戸が京になりて東京と稱し府中が江戸になつて静岡と改稱された。

其處で駿遠三即ち駿河、遠江、三河の三國が徳川領即ち静岡藩知事管轄の地となつた事を覺えて



居る、其時徳川慶喜公は大政を奉還して陰居し、田安家より嗣子が入つて家を襲ぎ、徳川龜之助様と稱して、それが今の貴族院議長徳川家達公である、それから三國の大名は皆それ〴〵に他へ國替となり、生の近傍では藤枝田中の城主本多紀伊守は房州木更津へ行つた、其時の落首に斯んなのがあつた事を覚えて居る。

徳川の龜に追はれて房州へ、キイとも云はず行くが本多か。

## 一、流浪時代

明治元年十一歳の時、外戚碓井家にやられたのが生家を離るゝの初めで、それからどうも尻が落付かず、曾ては父及兄の生家たる隣村上小杉岡村家の嗣子が病弱で次の男子が幼少なるが故に生に其家を嗣がせる事になつた、生も其處におとなしく納まれば其家は勿論、生の父も兄も安心して四方八方圓滿に治まり、生の爲にもそれが仕合せであつたであらう、けれども其頃ボツ／＼擡頭し掛けた些と大袈沙だが、所謂青雲の志は押へても押へ切れず、父兄の意志に背いて之を拒み終に横濱に走り茶業家の小僧となり、東京に出ては小學校の教師となつたりした擧句が商船學校に入つて終に船乗になつた。

此間の約十年は所謂流浪の時代で、巻頭苦學篇并に前項信仰篇の處々に記載したが、まだ〴〵書き始むれば枚擧に違はない、併し記憶が散漫で、サツパリ纏まりがないから此位で措く。

## 二、ヂスマスト

海上二十五年の回顧　明治十四年七月より三十九年十二月まで二十五年餘の海上生活において随分時化にも遭つた、寒い目にも暑い目にも又怖い目にも遭つた、前項奇蹟の航海なども實に心膽を寒からしめた、けれども夫は後に分つたので、始終風浪に對して取るべき處置を取つて居たのであるから心配は心配ながらも、知らぬが佛で、當時はあれ程の危険に遭遇して居るとは思はなかつた。

けれども只一度、帆船秀郷丸二等運轉士時代にマストを切つて漂流した事がある、漂流と云つても幾日も〴〵漂流して稍く通り掛りの船に救助されたとか、無人島に漂着したと云ふ様な大袈裟なものではなかつた。

或年の秋肥前口之津へ石炭を積みに行く途中、長崎沖合で時化に遭つて、船體動搖の爲にシフチングボールドが毀れて砂バラストが一方に片倚つて仕舞ひ、船體は太く傾斜して起きて來ない、そ



して傾斜は動搖一回は一回毎に其度を増し、其儘置けば顛覆の外はないから、船長は最後の手段としてメインマスト、ミヅンマストを切れと叫んだ。

其處で一等運轉士はメインマストに、二運なる生はミヅンマストに分れ、各セーラーを率いて部署に着いた。

曾て運用術でマスト切斷法を習つた、けれども斯んな事が果して實際に出来るものか、どうかとは多少疑を持つて居たが、今は實際にやらねばならぬ時が來た、外に一層好い方法があるかも知れぬが夫は別問題として、兎も角も我等は習つた通りの準備をして、「切れ」の一令の下にメイン、ミヅン兩マスト共に見事に切れた、フォールマストは遺す計畫であつたが靜索の一部メインマストと連絡せるものに切り遺しがあつた爲にトップの直上から折れて飛んだ、それでも船は動搖の度毎に風下に傾く度合が著しく減じ、残つたフォールマストの下部に當る風の爲に船首が漸次風下に向ひ、風を船尾に受る様になつて船は俄かに樂になつたからハツチを開けて片倚たバラスト繰り返し方に従事した、其時、車軸を流す雨の爲に四方晦盲一物も見えず、船の位置は長崎と五島列島の約中間と云ふ位より以上は判らないが、只船を安靜の向きに保つ爲に遺れるフォールマストに極少面積に帆を展げて漂流した。

そして數時間漂流して居る内に雨が小降になり風下に伊王島其他長崎港口の諸島が見えたので、

皆元氣を出しフォールセイルを展げ、メインミヅンの切り残したマストの根元に圓材を建て假帆を展げ、出来る丈の手段を講じて日没前に香燒島附近の風蔭に辿り付き双錨を投じて安全に碇泊し一同安堵した。

翌日は風浪全く鎮まり、長崎より曳船が來て浪の平地先まで曳き行き其處にて復舊修理工事に約二ヶ月を費して又元の如く航海を續けた。

是が生の海上生活中唯一度のデスマストであつて其後は幸に斯んな海難に遭はなかつた。

## 四、三回の大患

第一回 生が物心付いて以來大患として記憶に存するもの、第一回は明治十一年の暮より十二年の春にかけて、東京で有馬小學校の先生時代に一漢學塾（塾と云つても只下宿屋の主人が漢學の講議をする丈の事）に生活中の事であつた。

最初は風を引て、其頃の慣習として先づ寢掛けに熱爛の卯酒位が關の山であつた、處が中々治らないので近所の漢法醫に診て貰つた處が、傷寒（今の腸チブス）だと云ふ、其頃父兄とは音信不通であつたが、確井從兄の友人なる藤枝の斯波、小島の兩君が訪ねて來て驚いて幾何かの金を出して婆



やを一人雇つて付添はして呉れて、それで稍く病人らしい取扱を受る様になつた。

それから兩君から碓井從兄に知らせ、從兄から生の家に知らせて初めて一同心配はしたものと表向如何とも仕様がなないので、非公式に見舞を寄越して呉れた事がある。

其病氣が何日程で治つたものかは確かと覚えぬが多分二ヶ月位ではなかつたかと思ふ。

**第二回** 明治二十年春二三月の頃と思ふ、小菅丸一等運轉士時代に腸チブスに罹つて神戸で縣立病院に入院した。

チブスは一度すれば二度は罹らぬものと聞くが果して然るものならば第一回の傷寒は擬似であつたか、又は例外に二度とも眞正チブスであつたか。

當時妻は結婚後まだ間もなく、所謂花嫁時代であつたのに東海道鐵道全通以前であつたから、郵船長門丸で海路を一人東京から神戸にやつて来て早速看護婦の洗禮を受けた。

之も日數は確と覚えぬが一ヶ月餘りは掛つたと思ふ。

次にモウ一つあるが第三回とする程のものではない、併し病勢は可なり激烈であつたから付けたりとして茲に記して置く。

時は明治三十八年夏、大治丸船長時代、大治碇泊中、晝夜打通しに華氏百四度の酷暑が幾日か續いて甲板部、機關部、職員並に普通船員中に多數の日射病患者を出した。

其時生は先づ強健な方であつたが、出帆して楊子江を下り、吳淞も過ぎ、海洋に出て大分涼しくなり、前の患者は大概起き上つた頃からソロ／＼頭痛がし出した。

門司入港前、蓋井島通過の頃は頭痛が激しくて殆んど堪へ難かつたが、氷囊をヘルメットの下に忍ばせ、辛ふじて、檢疫も済ませ、無事門司に入港して早速長府の家に歸り醫師の診察を受けた處が、矢張り日射病であつた。

門司碇泊中加養しても捗々しくなかつたが兎も角も出帆して長崎に回航し、修理に取掛つた。

此頃まだ頭痛が中々治らないので又醫者に掛つた、處が長崎の醫師は背中に芥子を貼れば治ると云ふから船に歸つて早速西洋芥子を練つて木綿に延ばして背中に貼つた、處が時間が経つに従つて、段々と痛い様な、熱い様な、兎に角堪え難い苦痛を感じて來た、何の位の期間貼つて置くと云ふ事は聞かなかつたが、此處が辛抱の仕處と眼をつぶつたり、口を歪めたりして堪らへて見たが何分にも我慢が出来ないので、約四十分の後之を剝がしたが跡が痛くて堪らぬ、夫からと云ふものは、暇さへあればシャツを脱いで、濡れたタオルを當て、背中を冷やすことにして、長崎を出帆して香港に到着する頃までピリ／＼して居た。

其猛烈な荒療治の騒で頭痛は長崎の醫師の云つた通り何時か知らぬ間に治つて仕舞つた。

是は可なり猛烈は猛烈であつたが、何しろ期間も短かく且それが爲に職務を欠くことがなかつた



から第三回とはしなかつた。

第三回 昭和五年一月十四日(日曜)夕刻、不圖惡寒倦怠を感じたるも、早く寢に就て一夜靜かに暖まつたら良からうと、就寢の用意中、念の爲體溫を検したら八度五分なので、家族の勸に依り豊口女史(家嫁梅子の従弟鴻信技師豊口熊天氏の令閨)の來診を乞ひたるに、普通の風邪ならんも目下流感もあること故に充分の注意を要すと云はれた、其時體溫を検したるに九度に昇つて居た、それから氷枕を用ひ、氷嚢を以て頭を冷やした、但し其時も頭痛はしなかつた。

翌二十日は體溫が四十度に昇つた、豊口女史は心配して、若し此體溫が續く様なら、誰かと立會診察をしたいと云はれたが、夕刻には九度以下に下つたから立會は止めになつた。

其翌二十一日には更に降つて七度臺になつたからモウ大夫丈と思つたが、女史は安心を許さなかつた、果せるかな、二十三日には俄然昇つて、最高九度に達し而かもラツセルが背中ベタ一面に擴がつた、斯くして一上一下の間に一週間を過ぎ、それから後は八度以上には昇らなかつた、病名は最初は毛細氣管支炎と云ひ、肺炎が甚だ氣遣はれたが、とう／＼肺炎になつた。

手當としては芥子泥を貼り、溫濕布を施し、之を頻々に取替へ、食事は流動物にして絶對安靜と云ふ事であつたが、十日目に體溫平熱に復してからは芥子を止め、濕布取替の間隔も段々と永くなり、流動食も次第に固形食となつたが、絶對安靜丈は中々許されなかつた。

斯くて脊中ベタ一面のラツセルが毎日／＼薄紙を剝がす様に少しづつ減つて、二月二十八日即ち四十一日目に濕布を脱し、安靜が免除になり、自由に寢返りが出來た、其間、咳が一つも出ず、頭痛、腹痛、四肢の倦怠等普通病人に共通の苦痛が全くなかつたのは案外の仕合であつた、但し咳が出ない爲に痰の排出がなかつたから、ラツセルの減退には暇がいつたと云ふ事であつた。

其時まで仰向に寢たつきり、食物も口に入れて貰つたのが横向になつて自分で食し、食事の時丈け床上に坐り、又立つて見たり、室内を歩いて見たり、二階から下りて見たりして、三月十四日、即ち五十四日目の診察で、病氣は全治したから今後大事にする様にと注意を受けて醫師の手を離れた。

それより髻剃り、入浴、戶外運動と段々進歩して四月二日即ち七十五日目に妻付添ひ學校に出頭して其日は職員一同に挨拶して歸り、中一日置いて同四日又妻付添ひ、府學事課、遞信局海事部に  
出頭した後、登校、午後生徒一同に挨拶をした。

手當及び藥餌 病氣した事のない生の病氣に一同驚き且つ心配して梅子、用子が學校を休んだりしたが、何分にも芥子泥貼り方や、濕布の取替が晝夜頻々なので、看護婦を雇つた、そして十日斗りを経て體溫も平熱になり、芥子はやめて濕布の間隔も緩やかになつたので看護婦を返し、其後は妻と潔子が之に當り、夜分は用子も花子も手傳つた。



此際潔子が居合せて、子持の身で母を助けた事は大きな力であつた。

生自身は全くそれ程には思はなかつたが、何しろ四十餘年來無病息災であつたから妻も驚き、子供や親族達は生が大病にならうなどは夢想だにもなかつたのであるから、全く事の意外に驚いたのも無理はない。

最初は直に治るだらうと思つて何れにも通知しなかつたが、良や念入と見て葉書で知せた處が、先方は驚いて電信で問合が来る、返電を出す、次電が来る、又答へると云ふ譯で、生は起き上つてから病中の來信に電報の多かつたのを見て驚いた、殊に大連にある安東は職掌柄、一層心配して専門的に何角と注意点を申越され、全快期には恰も好し大阪に日本醫學大會が開かれて、夫に參列の爲にやつて來たので病後の注意点など細大となく聞く事が出來た。

**病中の雜感** 生は最初からそんな大病とは思はなかつた、けれども體溫四十度の時には日頃の睡眠不足と相俟つて別に苦痛もなく、只ウツラ／＼と睡つて居る間に種々の夢を見た、覺めてから自ら吹き出さずには居られない様なものもあり、又夢とも幻ともつかぬのもあつて、紀念の爲に記録して置くも面白からんと思つたが、自ら筆を執る事は勿論、言ふて家人に書かせる事すら醫師の許さざる處であるから、之を十七文字に綴つて後日の記憶に備へた、勿論此中には、高熱の時のもの斗りでなく其後のものもある、今其一二を記して見るならば。

肺炎の夢にシベリヤかけ廻り。

肺炎の夢で大政治家になりすまし。

肺炎の夢に議會で大氣焰。

肺炎の夢で虞翁と物語り。

肺炎は肺病でないと醫師なだめ。

肺炎に白衣の醫師は天使なり。

肺炎で寝た間に議會解散し。

肺炎で貴とき一票棒に振り。

肺炎のお蔭寝ながら文樂座。

恐れ多し病床にありて紀元節。

肺炎で睡眠不足取返し。

**日頃の主張と此大患** 生は日頃信仰に基く處の一つの主張をもつて居る、禁酒禁煙もそれである、健康法に就ても前記處世篇に書いた様に、常に無理を避けて以て無理に備ふるの方針を取つて來たのであるから、此主張の下には病氣など憑り付けるものでないと信じて居た、又實際永の年月此主張に權威があつた、然るに今度の病氣は何とした。



最初は日頃の主張が全然裏切られた様に思つたが、併し主張が裏切られたでなくて、我が注意の何處かに缺くる處があつたに氣が付いては益々之を強調するの必要を感じた。

妻が常に生の活動を氣にして、壯者と違ふから、障らぬ様にと注意した事も一再でなかつた、其時に今少し細心に考ふべきであつたらうと懺愧に堪へない。

**大患の解決** 聖書に「生來の盲者を指して、此人の罪に因るか將た親の罪かとの間に、イエス様は答へて、此人の罪にもあらず、親の罪にもあらず、神の榮の顯れん爲とて、直に其人の目を明かに見ることの出来る様になされた」とある、生の此度の大患は生の罪か、或は他に起因する處があるかと問ふものがあらば、生は直ちに答へん、生の注意の缺くる處に因る、即ち生の罪である、併し夫よりも更に大に見逃してならぬことは、矢張、神の榮の顯れん爲である。

生は從來、自己の境遇を敢て不足とは思はず、信仰的には常に感謝して居たが、併し物質的には未だ之に満足しては居なかつた、然るに今度の病氣に就て、先づ第一に、日當りの良い座敷に寝て、最初の内こそ看護婦を雇つたが、その大部分は家族の手厚き介抱を受け、食事は醫師の指圖通り、おも湯、粥、野菜スープ、肉スープ、鶏卵、野菜、果物、魚類、肉類何吳となく口に合ふ様に攝取する事が出来、醫師は豊口貞江女史が遂近所に住まはれ、氣輕で、熱心で、診立が確かで、綿密で、最初の程は午前午後と二度づつ來診せられ、病氣の輕快に従つて一回となり、一日置となり、二日

置となり、其度毎に診察衣を着て、カバンを抱へて、イソ／＼と歩いて來られる其感じの好さ、室内の溫度調節には石油ストーブのあつたのも、特に肺炎には効果が著しかつた。

若し生の境遇が物質的に豊富であつたら如何であらう、多分モット立派な病室に、立派な寢臺に、立派な寢具で、看護婦も二三人づつ晝夜交代に付切り、食餌も、食つても食はなくとも、やれスープ、やれ肉汁、やれ何々と費用を厭はず供給されたであらう、看護婦や付添のものにも、其度毎に御禮を云はれる様な御馳走を食はせる事も出来たであらう、併し、そうした場合が全快期日を幾日短縮することが出来たであらうか。

斯う考へて來ると、今の境遇を満足には思はないなど、能くも罰が當らなかつた事よ、能くも冥利が盡きなかつた事よ、否々、罰が當つたのだ、冥利が盡きたのだ、さればこそ、四十餘年間無病息災であつた體に肺炎なんて云ふ難病が取付いたのだ、けれども生は、罰を受けても、病中に咳一つ出ず、頭痛もなく、藥餌介抱も都合よく出来たのは、まだ／＼神様の悪しきを受けては居なかつたであらうと信じて感謝に堪へない。

聖書の他の處に「神は爾曹を堪へ忍ぶこと能はざる試煉には遭はせじ、若し試むる時には毎時も逃るべき道を與へ賜ふ」とある、「にくみては打たぬものなり笹の雪」と云ふのも此意味であらう、若し此大患がモウ一月早かつたら全快期は丁度極寒の最中であり、若し又之が二三年後に起つたと



したら、如何に健康自慢の生でも矢張寄る年浪には逆らはれまい、斯んな点から考へると、神様は生に逃るべき道を與へ賜ふたに違ない、それ斗りでなく、現在斯くも不足なき境遇を満足とも思はず、そして病氣など自分には取付き得ないと考へた様な傲慢不遜の生を、現在の境遇に感謝し、且つ衛生上、自己の缺點に心付き、一層細心自重する様にして下された事は、どう考へても、此度の大患は、自己注意の怠りの外に、神の榮の顯れん爲であつた、即ち愛の答であり、惠の刺であつたと信ぜずには居られぬ。

此恩寵を如何にして感謝するか、夫は今後、生の生涯に表はるゝ處の現實が總て感謝の表現たらんことを堅く心に期する處である。

## 五、感謝の生涯

時代の感謝　上見れば及ばぬ事の多かりき、笠きて暮らせ世の中の道、と水戸黄門公が云はれた通り實に上を見ればホウヅがない、世の中には澤山の學問もし、海外留學漫遊もして、見聞を廣め、奥蘊を窮めた人は澤山ある、之に比すれば生等の見聞は實に九牛の一毛にも足らぬ、けれども時代から云へば、格別の努力もなく、進取もなく、自然に遭遇した事々物々を云へば。

幕政時代、男子は前額を剃つてチョンマゲを結び、女子は結婚すれば有夫の目標として眉毛を剃り齒を黒く染めた時代、船が櫓もなく帆もなく只石炭と云ふものを焚いて煙を出して走る、針金を引張つて夫にエレキが傳つて便りが出來ると云つて驚いた時代、摺付木の藥品には牛の脂が這入つて居るから神様の御燈明には用ひられない、牛肉を食ふと穢れるから神前に出られないと云ふ時代から、將軍大政奉還、王政復古、車駕東幸、廢藩置縣、斷髮脫刀、征韓論、佐賀、山口、臺灣の役から、明治十年の西南の役となり、西南の役には生も新撰旅團に志願したが年が足らないで採用されなかつた、生でも年の足らなかつた事もあつた。

斯んな事は今は歴史であるが之を事實に見て來た事は時代の感謝である。

就役の感謝　明治十四年七月帆船須磨の浦丸に習業生として乗船し、三十九年十二月大治丸船長を最後として陸に上り、日清日露の兩役共に陸軍御用船々長として従軍し、勳六等旭日章、勳五等瑞寶章を賜はり、遞信省では海事官、地方海員審判所審判官、海務署長、造船所ではドックマスター、最後に大阪府立高等海員學校長を勤めて、昭和六年三月無事に隱退し、從五位なんて云ふ身に餘まる位階をまで授けられたるなど、只赤面恐縮の外はない、是等が就役からの感謝である。

感謝の五十年　生の妻は初め餘り頑丈の方ではなく、どちらかと云へば弱い方であつた、處に結婚して間もなく生の第二回の大患に看護婦の洗禮を受け、續いて辰男が幼時甚だ弱い、凡そ病氣



と云ふ病氣は大方やつたと云ふ工合で之が哺育と看護に自分の病弱は忘れて、濕布其他病人の取扱注意に訓練を積み、榮二の骨膜炎切開手術、花子の二回の大患(一回は長崎雜觀に誌した)と其後の肋膜炎及び生の第三回の大患に就て少からず便宜を得、六人の子供が、そんな風に交々病魔に犯されても幸に皆恢復して今は何れも健在であり、生は遅蒔ながら三十八才で酒を絶ち煙草を廢め、四十一才で信仰に入つた、若し其儘酒煙草を續け、信仰に目覺むる處がなかつたならば、或は身心共に今日あるを得なかつたかも知れぬ、然るに一昨年の大患まで健康を持續し大患後又些の障もなく、健康は却つて舊に倍し、無事に公職を勤め上げ得たのも多分禁酒禁煙の効果であらう。

談が此處に來ると何時も、其處にモウ一つ何かまだ足らぬものはないか、欲しいものはないかと云ふ事が出る、けれどもそれは望むべきでない、若し何か足りたら又他に何か思はぬ禍が與へられたかも知れぬ、去れば何はなくとも明治十六年の二等運轉士就職から、昭和六年の校長退職まで五十年間殆んど休みらしい休みなしに勤め續けた事それ自身が感謝である、今の現狀以上には何を望むべきでない、思へば實に感謝の生涯であつた。

### 老船長の回顧六十年 完

昭和七年五月廿五日印刷  
昭和七年六月一日發行

定價 金壹圓貳拾錢

郵税金 八錢

著者 横山愛吉

大阪市西區京町堀上通三丁目一八番地

發行人 高橋冬吉

大阪市西區京町堀上通三丁目一八番地

發行所 高橋南益社

電話土佐堀二九二四番  
振替口座大阪六九二九〇番

大阪市東區北久太郎町三丁目

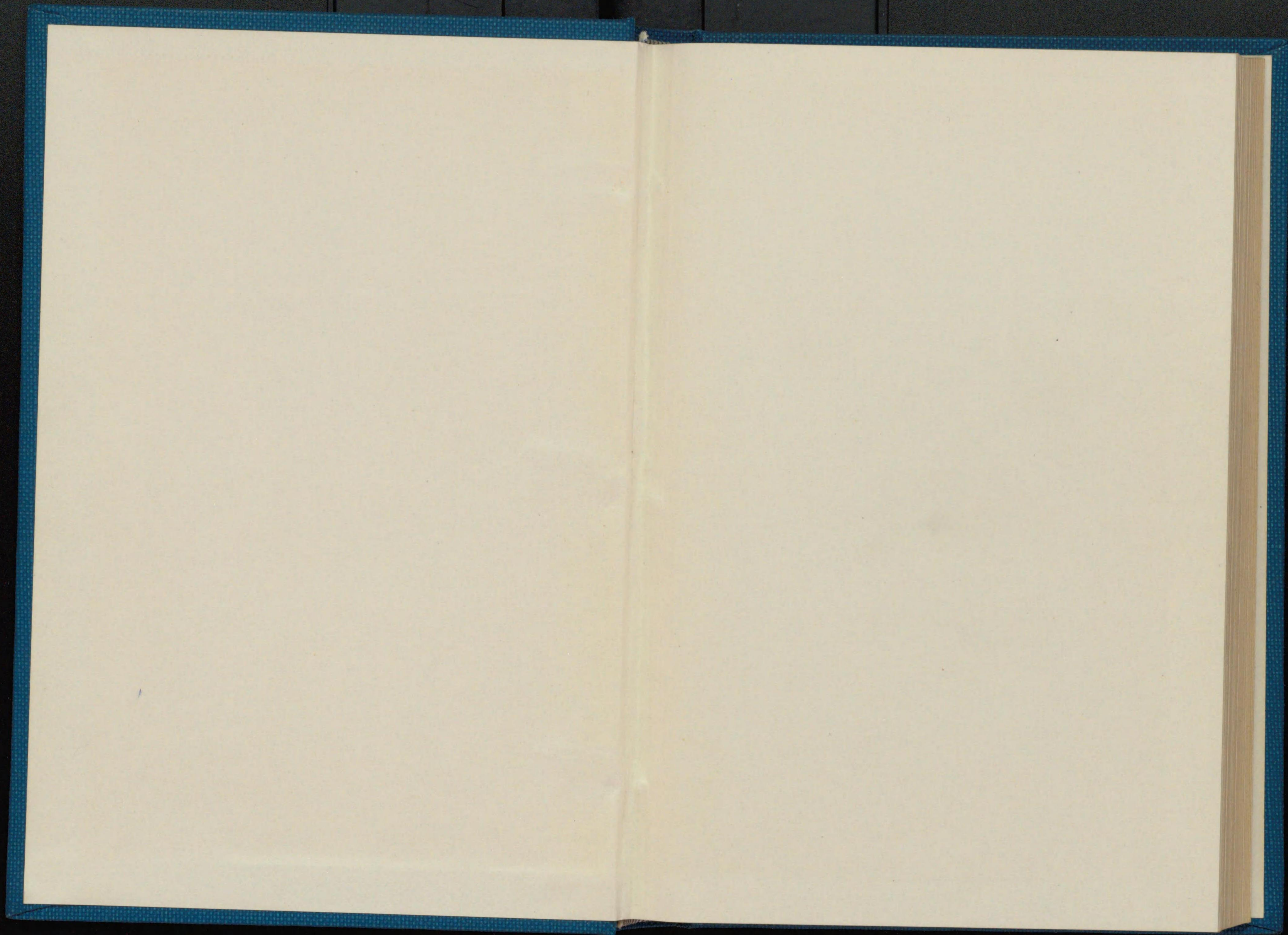
大賣捌所 會社 柳原書店

電話船場 四一四番  
四八五七番  
振替口座大阪二三一番

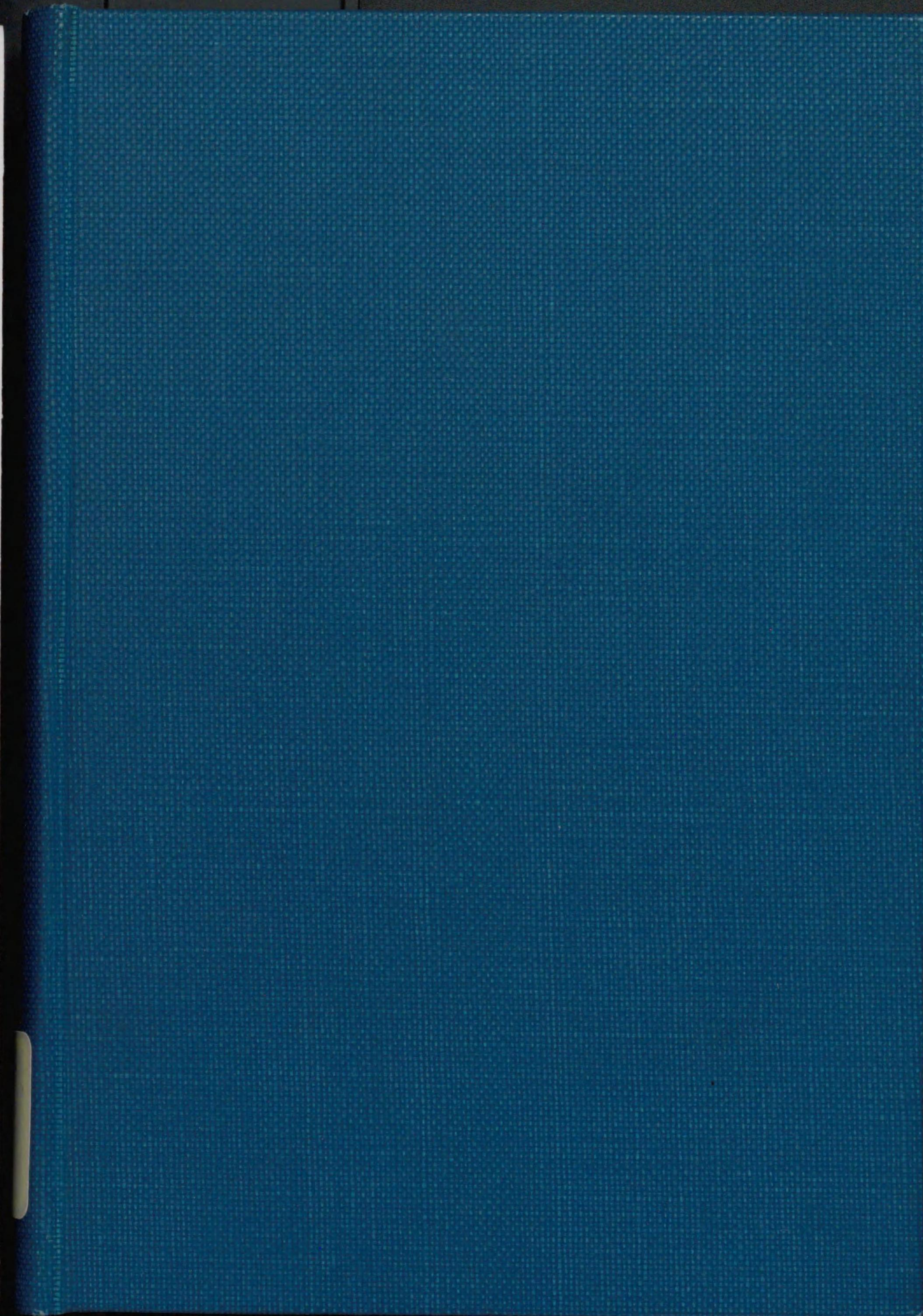


432









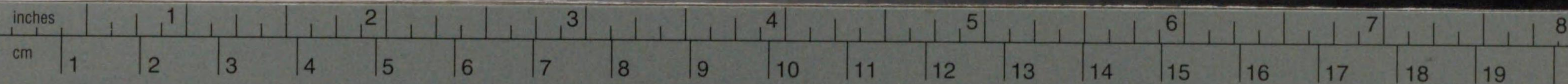


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

